THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿二年 第五號

(第二百十八號)

文學博士 村上專精先生述

新刊

教理と實踐

○菊判全一冊
▲説明圖二十六個入
▼正價四十五錢
▲郵税六錢
○郵券代用一割増

本書は言文一致體を以て嶄新なる譬喩と**數十の圖解**によりて**佛教の大意と倫理の實踐**とを詳述せられたるものにして、通俗簡明一讀何人にも會得し易からしむ。故に各宗各派の佛學者は勿論佛教の大綱を知らんと欲する人々は是非一讀を望む」

井上博士著
◉**釋迦牟尼傳**（十六版發行）價六十錢 郵税十錢

トルストイ伯著 加藤直士釋
◉**我宗教**（八版發行）價七十五錢 郵税十錢

佐々木月樵師著
佛教之真髓
▲新刊▲寸珍かな付▲價廿錢郵税不要

發行所 東京市本郷區東片町一一七 **文明堂**

賣捌所 東京 東京堂 森江書店 京都市 興教書院



中央公論第二十二年第五號目次



此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京開成館 振替貯金口座第五參貳貳番

帝國學士院會員　震災豫防調査會監事

東京帝國大學理科大學教授

理學博士　大森房吉先生著

地震學講話

着色石版其他插圖百三十二個　紙數四百餘頁

洋裝全壹冊正價貳圓　內地小包料貳拾錢

大阪開成館 振替貯金口座第貳壹六〇番

震災の恐るべきは言を俟たず。古來地震を以て有名なる我國の住民たるもの、地震に關する科學的知識の修養なくして可ならんや。彼の米國及印度の大震災を始め、本邦にても濃尾臺灣等近時の大震が、瞬時にして夥大の人命と財産とを損失せしめたる事實に鑑みるも、震災豫防法の講究は實に焦眉の急務と稱せざるべからず。地震の現象を明にして地震豫知の方法を論じ震害防禦の手段を正確に解説し、且迷信浮説に惑はされさらしめむことは、即ち本著の目的にして、記載事項は內外國數多の大地震に際し、著者が實地に就きて調査せる最新の結果を基とし、行文亦平易にして多趣味ならんことを努めたれは、一の通俗科學書として普通讀者に適するのみならず、苟も建築土木等に關係するものは必一讀を要すべく、殊に學校工場官署旅館病院等常に多數人の集合する營造物の管理者は速に本書を讀んて前車の覆轍を鑑み將來の變更に對する相當の設備を講ぜらるべき也

發行所　大阪市心齋橋通北久寶町角　東京市小石川區小日向水道町　開成館

取次　六合館●東京堂●中西屋●勉強堂●日本堂●岡崎屋　其他全國著名書店



第二十二年
第五號
（二百十八號）

議會後の政局

（一）

兎にも角にも議會は終れり、六億餘萬圓の大豫算は成立したり、今後の政局は果して如何樣に趨向すべきか。

議會中意外の奇變として世を驚かしたるは政友會と大同倶樂部との提携斷絶にして、其の餘勢や今に存す、此の奇變の畢竟原敬氏對大浦兼武氏の戰鬪たるは何人も看取する所にして、其の結果は交綏なり、一は衆議院に勝ちたるも、他は貴族院に於て敵を敗り得たれば也。

故に此の戰鬪の結果は西園寺氏の內閣が衆議院には多數を制する成筭あるも、貴族院に於ては依然として山縣系等に當ることを得ざることを證す、換言すれば西園寺氏の內閣は依然として山縣系に死命を制せ

らるゝと今猶ほ昨の如くなるを證する也。

山縣系は依然として西園寺氏の内閣の死命を制するも、然るも倘ほ急に取て代るが如きと莫かるべし、大浦氏等は其の政權に執着すると深きよりして、及び總選擧に對する掛念よりして、或は西園寺氏の内閣を擊倒せんとを欲するなるべし、之がため苟くも機會の乘ずべきあらば、必らず跳躍するに躊躇せざるべし。

〔二〕

然れども事實上山縣系の首領たる前首相桂氏は、未だ取て代るの志あらざる也、桂氏は素より機に觸れて其の鋭鋒を示し、以て西園寺氏の内閣を威壓するが如き態度を執るとあるを利とすべし。郡制廢止案に對して撤回の勸告を爲したる次第を公表して、以て暗に大浦氏等の戰鬪に聲援したるは其の證也、桂氏はまた時としては大同倶樂部と進歩黨とを提げて起つの氣勢を暗示して、以て政友會を威嚇し、其の强梁を牽制するとを利なりとすべし、郡制廢止案に對する大同進歩の提携を聲援するが如き態度に出て、暗に進歩黨首領をして希望を繫がしめたるは其の證也。

然れども桂氏の眞意は未だ全く西園寺氏と絕ちて政友會を敵とするを好むに非ざるなり、伊藤氏は味方を作らざると共に又敵を作るを欲せざるも、桂氏は味方を作つて而して敵を作るを好まず、巧みに調和の材能を以て事に當るを常とす、是れ氏の内閣が曾て聲望一世を壓するにあらざりしも、能く無前の壽命を保ち、無前の大事を遂行し得たる所以ならずや、氏は今にして益々調和の必要を感知して其の特

色を發揮せんとを期するなるべし。即ち西園寺氏と絕ち、政友會を敵とするが如きは氏の容易に爲さゞる所のもの也。

思ふに桂氏は歷代の政府が全力を衆議院の操縱に盡し、幾んど其の精力の大半を消耗せしを愚なりとすべし。即ち衆議院に於て最大黨たる政友會を利用するの便なるを感ずると最も深かるべし、政友會にも亦實に雞鳴狗盜の輩多く、利の爲に屢々相反噬するとなきに非ざるも、而かも結束力に富み節制に練熟せる、遙かに進步黨の上にあつて大同倶樂部の如き者とは同日に談ずべからず、素より大同進步の兩黨を提げ、利を啗はして以て政友會の一角を斬り取らば、必らずしも衆議院に多數を制し得られざるに非ざるも、其の勞は直ちに政友會を味方とするの利便なるに如かざるや明白也。

西園寺氏の內閣は、桂氏淸浦氏大浦氏等の援助を借るに非ざれば到底貴族院を動かすとを得ずと雖も、桂氏は今日の處貴族院に於て心を勞すべき必要なく、只僅かに衆議院に多數を制すれば則ち足れりとす、而して衆議院に多數を制するの手段は、第一政友會を敵とせずして、力めて其の歡心を繫ぎ置くにあり、第一の事行はれずんば大同進步の兩黨を提げ、奮鬪的に政友會の一角を斬取るにあり、孰れにしても西園寺氏よりは多算且つ多福の地位に在るや疑ふ可らず、今の政界に於て桂氏の重きを爲す遙かに西園寺氏の上にあるは此の故ならずや、而して桂氏は政友會を敵とせざる目的よりして、容易に西園寺氏と反目す可らず、反目すれば則ち政友會を敵とするの不利を招かざるを得ざればなり、唯だ桂氏は自から主となりて他を客とする地歩を占むるがため、時に大浦氏等の戰鬪行爲を默認して、以て西園寺氏を威壓

するとあるのみ。

桂氏が取て代るの機會は、西園寺氏の内閣が漸くにして民望を失ひ、自から現地位に立つに倦むの時にあるべし、此の場合に至りて好意的に西園寺氏と政權の受授を爲し、而して政友會の援助を得んとはすべし、自から進んで西園寺氏の内閣を擊倒せんとするが如きは、大浦氏等或は之を企圖せん、桂氏に至ては斷じて無し、否、西園寺氏の内閣に大なる非違あるか、西園寺氏等公然桂氏を敵視せざる限り、斷じて斯の如きこと無き也。

（三）

桂氏が尙ほ取て代らざる他の理由あり、其の一は吾人の屢々言へる如く、ポーツマス講和談判に對するの憎惡未だ全く消散せざることなり、桂氏の内閣は日露戰役に於て實に其の最善（ベスト）を盡したるものにして、講和の如きも是れ以上多く望む可らざりしとは、苟くも當時の事局に精通するものの齊しく認むる所なりと雖も、世上の多數は尙ほ淺薄にして詭激なる新聞紙に指導せられて、桂氏の内閣を憎むこと深く、殊に三十八年九月五日の燒打事件に因て民怨多くは桂氏の内閣に集中せり、此等は歲月の經過に由て自然に世上の誤解を解くの外あらず、即ち將來の永くして且つ多望なる桂氏に在ては、今遽かに政權を得るの要なく、陰忍して以て、好機を俟つには如かず、多智多算なる桂氏如何ぞ之を察せざらんや。

其の二は西園寺氏の内閣の未だ多く民望を失墜せざることなり、四十年度の豫算に於て輿論は素より西園寺内閣の姑息を攻擊したりと雖も、而かも戰後民心を休養し、經濟界に急激なる變動を來さざるがた

めには、勢ひ斯の如くならざる能はず、假令何人が局に當るも、是れ以上多くを望む可らざるは、心あるものゝ承認せざるを得ざる所なり、即ち未だ全く民心を失ふには至らず。

西園寺氏の內閣に於て毀譽の焦點たる者は內務大臣原氏なり、其の電車賃率の引上認可の如き痛く市民の惡感を招きたるも、原氏の精悍人に過ぎ、事々物々明白に截斷して曾て曖昧の點なく、曾て姑息の處なきは一部人心の快とする所、且つ努めて公正を期する處、自から人の同情を惹くものなきに非ず、未だ大に民心を得ざると素より言なきも、此等の事實は其の不人望と相乘除して、少くも西園寺氏の內閣に累せざるや事實也、殊に西園寺氏が洒脫にして宰相の器度ある、頗ぶる民心を繫ぐに足るものあり、去年一月內閣組織以來未だ大に民信を博するの大政策なきも、又甚だしく人心を失ふ程の秕政もあらず、取て之に代るは徒らに政權を爭ふのみ、桂氏の敢て爲さざる所なるべき也。

其の三は西園寺內閣をして必要なる戰後經營を爲さしめんとするとなり。戰後經營の第一至難なるは、非常特別稅を改廢して而して新たに一億圓內外の收入を増納するにあり、今の豫算を視るものは必らず歳入に於て約一億圓の缺陷あるとを看破すべく、而して國勢の進步と物價の騰貴とは、唯だ歳計を膨脹せしむるのみ、到底縮少するを得ざるに於て、歳入の缺陷を補ふの急務たる言を俟たずとす。其の補充の途は增稅を斷行するか、砂糖或は酒の專賣を行ふか、或は其の二者を併用するかにあるべく、而かも其の發案の議會の協贊を得るに困難なるや想察に餘あり、思ふに桂氏等は政友會といへる大政黨の上に立つ西園寺氏等をして、此の補充を斷行する責任を負はしむるを以て便とすべきか、抑も財政を堅確な

る基礎の上に立てんと欲せば、永久不變なる增收約一億圓を得ざる可らずして、之を行ふこと遲くも四十二年度豫算よりせざるべからず、否四十一年の豫算に於ては斷じて今年度の如き彌縫策を取ることを許さざる也、即ち桂氏等は西園寺氏の內閣をして敢て此の難局に立て以て此の難問題を解決せしむるを期すべき乎、果して然らば桂氏は少くも此の事情のみによりても尙ほ一ヶ年間起つの志なきものと認めざる可らず。

（四）

或は總選擧に於て、政友會が衆議院に過半數を占むるを恐れて、總選擧以前に西園寺氏の內閣亡ぶべしと爲すものあり、吾人と雖も敢て西園寺氏の內閣の壽命を保險するものには非ず、唯だ總選擧のために其の更迭を視るべしとするには乃ち反對なるのみ。

山縣系の人々が一個の政黨をして議會を制せしむるを以て多數黨横暴の弊に陷るものとし、所謂天下三分の主義を以て、中立の一黨能く公正無私の黨派を助くることを理想とするは事實也、隨つて政友會をして獨り過半數を占有せしむることを好まざるや亦明か也、然れども西園寺內閣の下に行はるゝ總選擧に於て、政友會果して然かく多數を制し得べきや否や。

內務大臣は地方長官を戒めて總選擧に公正の主義を執り、敢て政府の私情に徇じて一黨を助け一黨を抑ゆるが如きこと無からしめんと期するものゝ如し、勿論此の用意あるも、政友會員が總選擧に於て比較的利便を得るや疑ふ可らず、然るも此の利便位るを以て果して幾何の增員を得べしとするぞ。

政友會にして、若し政權者たるを楯として、地方に新事業を興すことを豫約し、此の條件を以て自黨員を擧げしめんとする乎、是れ理に於て地方の事業を濫興し、地方に弊毒を流すものなり、其の結果の反動として更に政友會の勢力を失墜すべきや明かなり、政友會人無しといふも如何ぞ此の睹易き事情を察知せざらんや、且つ新事業を興さんことを豫約するも容易に實行す可らず、地方財源には自から限度あり、此の上また新事業を興すが如きは幾んど言ふ可くして行ふ可らざれば也。

新會社の認可を條件として、政友會の黨勢を擴張せんとするものあり、而かも新會社濫興の弊ある顯然たる上、其の政權に結托するの弊害ある、世の明かに認むる所、政友會が今之を爲さんとするは、偶々以て世上の指彈を招く基と爲るのみ、彼の京阪電鐵事件に看よ、是れ寧ろ政府及び政友會に取て苦き經驗にはあらずや。

且つ政友進歩の諸黨は其の地盤一定して容易に變更しがたきものあり、大同派の如き比較的に地盤を有せざるものも、亦多少の根據なきに非ず、此の黨域の分野は明白にして容易に增減す可らず、況んや相當の理由なくして之を變更せんとするをや。

此等の事情を綜合するに、政友會は必らずしも現在數より多く增加せざる也、且つ政權に附從する徒輩の如き、次の內閣成れば又直ちに政友會を去つて其の皂隷と爲るを常とす、斯の如き者は敵として恐るゝに足らず、味方として恃むに足らず、政友會假令彼等の雜然たる頭顱を多く陳列するも、到底鞏固に之を結束し得ざるや論なきのみ。

故に總選擧に於て、政友會の過半數を占むるを恐るゝは杞憂也、頭數假令多きを加ふるとも、之を斬取るべき見込十分にして、到底憚かるに足るものなし、之を憚かつて寧ろ總選擧以前に内閣を更迭せしめんとするが如きは、神經過敏症の病者のみ、立憲政治に於て豈斯の如き事由を以て漫りに内閣を更迭す可んや、否斷じて更迭なき也。

〔五〕

或は西園寺内閣倒れて、寺内内閣の起ることを夢想するものあり、今の陸相寺内氏總理大臣となり、再び山縣系の内閣組織を見んと豫期する也。

寺内氏が近時著るしく政黨及び官僚の間に信望を增加したるや事實也、然るも其の總理大臣として材幹は尙ほ未知數也、其の四十年度豫算に於て陸軍擴張案を執持し、讓るべきを讓りたる苦衷は人の諒とする所なるべく、其の態度頗ぶる桂氏に似たるあり、然るも總理大臣として能く桂氏の如くなるを得べきや否や疑問なり。

若し桂氏の容易に起たざるを測りて、先づ寺内内閣を夢想するものとせん乎、吾人は其の短見を惜まざる能はず、夫れ出づべくして出づ、公明なる政事家の進退也、未だ出づ可らざるに出てしめんとし、而かも適材を用ゐず、唯比較的に聲望あるが故に之を内閣の首班に推すといふが如きは、思はざるも亦甚だしき也、今や國家の聲價頗ふる高まり、世界と折衝して雄を東亞に稱せんと欲す、其の内閣は一時假設的の如き脆弱なるものなる可らず、少くも三年を繼續するに足るの成算十二分に立つに非ざれば、

漫りに新內閣を組織す可らず、假設的內閣は威重中外に足らず、信を列國に保つ所以に非ざれば也。
只彼の總選擧のために、政黨々派の頭數の多寡を爭ふがために、公明に爭議すべき問題もなきに、未だ甚だしき秕政なく、未だ甚だしく不人望ならざる內閣を更迭して、而かも假設的內閣を作るが如きは、是れ內閣を奕棋と做すもの也、政權を私するもの也、嚴格に且つ極度に之をいへば、殆んど立憲政治を賊する也、短見と稱せんよりも、寧ろ無法也、吾人は斷じて之に與みせず。
政治は學究の討論に非ず、情勢の至る處自から變局を生ぜざるを得ずと雖も、而かも公明なる理義に由て之に指導すべきとは、是れ立憲政治の特色也、本領也、若し唯だ情勢のみに徇せば、政治は畢竟權謀奇略の競爭のみ、公明なる理義を爭ふが如きことなかるべし、嗚呼是れ立憲政治の前途のため深憂すべきものならずや、今の政事家及び民間の輿論動もすれば情勢にのみ重きを措きて、また理義を度外に放擲する傾向なきに非ず、吾人故に殊に此の一言を附加して決論とす。

外交上の成効

吾人は素より外務大臣林董氏を謳歌すべき義務を有せず、然るも外交上の事情に通ぜずして、不通のまゝ漫りに外務大臣を攻撃する者の列に伴するを耻づ。
彼の日清協約によりて新奉鐵道、吉長鐵道等の協定を爲したるは、單に爲すべきを爲したるのみ、之

を以て外務大臣の成功とするは寧ろ諛言に近し、然れども日露英佛の接近を事實に現じ、且つ日露間の交渉に有利なる進捗を見たるが如きは、假令敵人と雖も外務大臣を祝せざる能はざるべし。

無爲を裝ふて無爲ならず、徒らに吹聽を高くし献立を排列するよりも、陰密の間着々歩武を進むると、實に最上の外交なり、外務大臣が世間多數の新聞紙より無爲無能を攻撃せられながら、何ほ日英露佛の親近を事實に現出したるは、少くも其の無能無爲ならざることを證する也、如何なる癖み根性の新聞紙と雖も之を惡罵し得ざるべし。

英露日佛の親近は英國皇帝、佛國大統領等主として其の功績を負ふべし、而かも我が外務大臣が露國に對して遠慮に過ぎ無爲に過ぐると罵られながら、陰忍して謙抑し、以て露國の誤解を釋くに努めたる苦衷は、今にして之を諒とせざる可らず。

日英同盟は印度以東の平和を保證するもの也、然るも露國西伯利亞に戒心を弛めず、佛國安南緬甸に危惧を絕たずんば、日本未だ眞の平和を得べからず、然るに英佛英露の接近に出り、日露日佛の間に新たなる友誼を重ね、假令同盟と稱すべからざるも、互いに親近して誤解を釋くに至らば、是れ單に日本をして平和ならしむるに止まらず、又實に亞細亞の平和を保證する也、否世界の平和に保險する也。吾人は世界のために祝福せざらんと欲するも能はざる也。

英國皇帝陛下は又葡萄牙と親善なる上、更に西班牙皇帝を訪問して、玆に英佛西葡の親交堅まり、西歐の聯合殆んど成れり、之に加ふるに露國を以てせば、僅かに獨墺伊の三國あるのみ、而かも伊國の英國と親善なる絮說を要せずとす。

英米の親交は又益々日米の友情を篤くすべし、彼の學童問題の如き桑港の一部に排日本の運動起れるも、我が外務大臣が勉強して謙抑したる苦衷は、今にして思ふに頗ぶる察するに足るものなくんばあらず、吾人は素より我が外務大臣の英米方針を贊成するものに非ず、就中移民問題の如き大に意見を異にすと雖も、其の謙抑の必らずしも無意義に非ざりしとは明かに之を認ざるを得ず。

今や清國、佛國、露國、米國との交情新たに加はりて、日英同盟益々光輝を發揚するは、世界に於ける我が日本の地位を鞏固にし、平和の保障を堅實にす、誰か之を祝福せざらんや。

吾人は又玆に皇上の盛德の國交に偉大なる効績あるとを特筆せざる可らず、英國の前女皇が屢々親翰を發し、若くは博愛仁慈を以て、殖民地の民地を慰撫し玉へるがため、其の擴大せられたる殖民地の結合甚だ鞏固となれるは隱れもなき事實也、獨逸皇帝は常に有爲の資を以て外交上に親から施設し玉ひ、時に毀譽の交々到るあるも、倘ほ帝德を發揮せらるゝの大なる、世界の齊しく認むる所、唯だ其の國務大臣の職務を侵犯するの嫌ひあるに於て、聊か帝德の穆々を缺如するを遺憾とするのみ、現英國皇帝は親から佛國西國を歷訪して優に親厚の基礎を立てさせられ、又其の皇后の妹君なる露國皇太后陛下を倫敦に迎へて、竟に英露親近の基礎を据へられしが如き、皆帝德の範と爲すに足る、我が天皇陛下亦近時大に列國皇室及び主權者と遙かに信問を交換し玉ひ、現に英國御訪問の東伏見宮殿下をして、巴里に於て佛國大統領と友誼を交換し、由て以て日佛の親近に偉大なる效果を及ぼし玉へるが如き、亦帝德の國交に及べる明證也、吾人は我が外交上の成効を祝すると共に、また之を特筆して皇德を頌し奉らざるとを得ず。

郡制問題に對する 政界大葛藤の眞相

無名氏

廿三議會に於て最も興味のあつたことは、郡制問題に關する現内閣と前内閣派との對抗運動であつた。不幸にして問題が如何にも人氣の乘らない者であり、且つ運動が或程度迄隱密に行はれたが爲めに、世間の注意を惹かねばならぬ程の注意を惹かずに終つて了まつた。併しながら政治上の所謂戰鬪といふ上から見れば、近年殆んど比較なき程面白き葛藤であつて、其跡について充分研究し、且つ充分評論するの價値あるものと思ふ。

世間では此問題が、昨年來原内相が内務省の成案によつて之を提出した行掛り上から提出したもので、それが偶然にも前内閣派との戰鬪となつたのだと解して居るらしい。が、それは寧ろ素人連の考であつて、黑人の側では此戰鬪には今少し意味あり、今少し觀察する必要あるものと見て居るのである。

從來前内閣と現内閣との關係は、一つは前代であり、一つは現代であるといふ單なる繼續的の意味ばかりでなく、極端にいへば現内閣は前内閣によつて守護されて居るといふ譯合になつて居る。諺にも三年經てば三つになるといふが、初め成立する時には守護も有難いが、成立して見れば守護程迷惑なものはない、又一寸の蟲にも五分の魂といふ通り、現内閣も、どうかして獨自一己を發揮して見たいと思うて來た。併し餘り極端な急激なことをやれば、生存に關係を生じて來る。生存と志望と兩立しない場合には餘儀なく前内閣の鼻息を窺て生存を計らねばならぬ。現に四十年度の豫算についでは、[illegible]とは出來ぬが、多くの點に於て前内閣派—[illegible]る桂伯の助力によつて纏

めたのである。所が現内閣と雖も何處までも前内閣の鼻息を窺ふことは厭である。何等かの機會あれば、どうかして獨自一己を發揮して他人の力をはなれ自己の力によつて立て見たいと考へたのは當然のことで、決して無理のないことである。而して郡制問題といふものは實に此目的のために提出されたものである。

郡制廢止案といふものは、如何にも人氣の乘らない問題で、いうて見れば、地方的で、アカデミックで、人の熱情を鼓舞する問題ではない。現内閣がさういふ氣乘りのせぬ問題を選んで、前内閣派の鼎の輕重を問はんとしたのは、現内閣にも亦多少政治的策士があることを證明して居る。何故かといふに、若し豫算案といふが如き大問題であれば無論一人で通すことが出來ず、假りに通さうとしても容易に通らず、若し萬一失敗すれば最早や内閣の自滅となる。然し郡制案の如きつまらぬ問題であれば、誰も氣が附かぬから通すに樂てもあり、萬一失敗しても知らぬ顏をして居れば其れて濟む譯である。といふので自分の力の試しに此問題を選らんだのは、戰略の上から論ずれば餘程巧みなるものといはざるを得ない。一體政界に於て戰はんとすれば、問題を選ぶの權は多くの場合に於て當局者にある。これは當局者の地位に伴ふ一の利益であつて、いはゞ役得である。當局者がよい問題を選んで戰を挑めば、野にあるものは勢ひ之に應ぜざるを得ない。現内閣は實に此役得を利用して郡制問題を持ち出したものというてよい。世間では陰險といふ字を以て前内閣專賣のものであつて、現内閣には少しも其風がないと思うて居る樣である。が今度の郡制案の手並を見れば、若し陰險といふ字を用ふるを許さば、本家本元の前内閣よりも寧ろ新店の現内閣の方がエライと思ふ。豫て前内閣員は自ら政治界の老手であつて、四十八手の極意は悉く自己の掌中に握つて居ると自任して居つたかも知れぬが、彼等は其自任の爲めに誤られて、つひうか〳〵と現内閣の手に乘せられて、驚いて眼の覺めた頃には形勢が餘程危險の淵に迫て居た時であつた。其處まで前内閣派を引込んで來たのは現内閣の手際に

へば手際といふてよい。今少しく其の顛末をいうて見ると、初め此問題は餘り具合のよくないもので、之を提出すれば貴族院は必ず怒る。貴族院の怒は邀ひ近くべからずといふので前内閣派では提出を見合したらよからうと忠告した。此忠告は正直にいへば好意的のものといふてよかつた。處が現内閣では出すとも出さぬともハッキリした返事をせぬ。前内閣の人は多分は出すまいと思ふて居たに違ひない。所がチョク／＼出すやうな評判もあつた爲めに再び忠告を試みると、現内閣の人は手輕く答へていふやう、成るべく出したくない。然し原の立場からどうしても出さねばならぬことゝならば、出來得る限り政治問題とせずに法律問題として出し、通らねば通らぬまゝ、つぶれればつぶれたなりにしてかまはぬ。出せば只行掛上出しておくといふ話であつた。で前内閣派の人々が思ふに、それでは出すまい、萬一出すとしても此問題で以て、成敗を一擲に賭するといふやうなことはあるまい。たゞ出す位なら、出してから後に之に應ずる方便もあらう。といふので全く無頓着で居つた。處が時は迫り、豫算案は首尾よく衆議院を通過して貴族院に入り、貴族院の形勢も略ぼ察することが出來るやうになつた時に、時は今だというて、前内閣の人々の意外にも、郡制案を投げ出した。處が其時は最早や貴族院には手が入つて居る。なか／＼一通や二通でなく、非常に手が入つて居る、殆ど遺憾なく手か入つて居る。「實業の團體には實業の團體から夫れ／＼話があり、官吏の議員には官吏方面から相談があり、所謂多額納稅者には又それ／＼の關係から入つて居る。貴族院に於て最も多數を占めて居る公卿華族などには最も都合よく手が入つて居た。前内閣の人が實は我繩張りと思うて居た貴族院に現内閣が切り込んで／＼殆ど其本營までも切り込んだ有樣であつた。此點については前内閣の油斷といふてよいか、現内閣の敏捷といふてよいか、驅引の上からいへば無論團扇は現内閣に擧げざるを得ない。」

併しながら前内閣にも多少其人ありといはざるを得ない、此形勢を見て取るや否や、彼等は貴族院で之を

防禦するよりも、寧ろ衆議院で戰つた方がよいとし、直ちに策戰計畫をして衆議院で之を邀打つた。貴族院で油斷をして居る時に切り込んだのを現內閣の手際といへば、衆議院で油斷をして居る時に切り込んだのは前內閣の手際といふてよい。衆議院に於ける激戰といふ事は勿論現政府の思ひ設けぬ所であつた。恰て彼等は自分の飯を喰つて居るテーブルの下から鐵砲を打たれた樣に不意打を喰つたのである。郡制案は昨年已に黨場一致で通つた問題であるから今年も其通りであらう、其通りてあるべき筈だと思うて居た。所が前內閣の運動のために此形勢がガラリと變つて了つた。元來政友會と大同倶樂部とは聯合黨である。聯合黨といへば必ず同じ立場の上にあるべき筈のものである。處が政友會の勢が漸次膨脹して本年に至ては殆ど主從の關係となつて居る。英國の本國がトランスバールに君臨するやうな態度になつて居る。附いて來たければ附いて來いといふ待遇をして何時の間にか自分の保護國として居る樣な形勢である。大同倶樂部なるものゝ之を憤らざるを得ない。而して一方に於ては、政權に渇すること旱魃後の人民の如く、又一度び政友會に賣られて、鬱憤惜く能はざる進步黨が、何等かの機會あれば、其鬱憤を晴らし、且つは宿昔靑雲の志を達したいと念じて居る。魚心あれば水心であつて、進、大、二黨の聯合したのは所謂水到て渠成るであつて何等の力を用ひずして自然に出來たものである。若し其時に大同派に黨の全體を統一する首領あり、又進步黨が政友會の如くに團體的運動に馴れて居たならば、或は衆議院に於ても政府案を叩き破て了ふことが出來たかも知れぬ。否之れは決して出來ぬことではなかつたのである。然るに彼等は九分九厘まで成功して、委員會に於て全く大敗北を取つた。これは形勢非也といふよりも、彼等の行動に違算ありしといふを適當と思ふ。いはゞ十二分のものを六分しか取らずに六分を政友會に返して了つた如き形勢である。それで一時政友會は誠に狼狽したが、然し黨派の驅引に於て所謂黨術的(黨略的でない、タクチツクであつてストラテジーでない)

には凡そ政友會に勝るものがない。といふは政友會は、よく人のいふことを聽く兵隊を持て居る。タクチック即ち戰術といふことは目前に敵を控いて居て動作をすることであるから、一番の敵は議論である。一番の要件は盲從である。然して政友會はよく盲從し得る人から出來て居る。群疑滿腹の進歩黨大同倶樂部に對して主一無適の政友會がやつたのであるから、忽ち形勢が一變した。問題はこれからであるが、最早や委員會に於て政友會が大勢力を占めた時は即ち政友會の面目の全うした時である。此時にどうしたらよいかといふことは最早やタクチックの問題にあらずしてストラテジーの問題である。戰術的の問題にあらずして戰略的の問題である。宜しく政治界の全局から利害を打算して掛らねばならぬのである。吾輩をして評せしむれば、委員會で勝たのをキッカケとしてあの案を引くに若くはなかつたと思ふ。進歩大同兩黨の聯合といふものも畢竟はあーいふ問題を出した爲めに起つたことであるから、其種を奪つて了へば、恰かも鳶に油揚を掏られたも同樣、兩黨共殆んど瞠若たらざるを得なかつたであらう。又貴族院にも、それ〳〵味方を製造しておけば、今度使はなくつても決して損は行かず、此次の豫算案の時にも役に立ち、恰度金を銀行に預けたと同樣で、味方の利息が殖えて行く許りである。またあの案を撤回した日には前内閣との交際をも溫めることゝなつて、これ程都合のよい事はない、郡制案はだん〳〵やる積てあつたが、お前さん方の手前もあるし、これて手を引きませうと、恩を被せて、花を持たせて、休戰をすれば極めてよい都合てあつた。若し之を撤回せば現政府は名に於て負けて實に於て勝たといふ結果を來たしたに違ひないと思ふ。實は此場合撤回した方がよいといふことを勸めた者もある。前内閣首相桂伯の如きは其一人であつた。又此事を希望した者かある。現内閣首相西園寺侯の如きも恐らく其一人てあつたらう。處が之を撤回するを得ざりしは如何なる故てあるか。之れは政友會の議員が抑ひ切れぬ爲めてあるか。否な政友會の議員は皆よく總裁のいふことを聽

く連中である。自分の懷中を冷たくすることならば兎に角、然らざれば何でも總裁のいふことをきく連中である。或は彼等の中にも撤回すべしといふ總裁の命令の下ることをエキスペクトして居たものもあつたかも知れぬ。處が其處に行かざりしは原であつたか、或は原以外の閣外の或元老であつたか、誰が其責任者なるかは今こゝに斷言することが出來ないが、然しとう〳〵之を撤回しなかつた一の原因をなしたものは、衆議院は固より、貴族院に於ても大丈夫勝てるといふ現内閣の豫想であつたらうと思ふ。」

現内閣は如何にしても衆議院では勝たねばならぬ。衆議院で現内閣が破るゝ時は、生るか死ぬるかの問題である。前内閣は如何にしても貴族院では勝たねばならぬ。貴族院で前内現が破るゝ時は是れ亦生きたるか死ぬるかの問題である。彼等は最も其生命の繋る點に於て骨を折つた。が其骨折方について現内閣が衆議院でやつた所を見ると、正義だとか、公道だとか、矢釜しい問題を度外にして、單に政略の上よりいつても、誠に拙劣極まつたものである。彼等は衆議院を以て恰かも魚市場か、又は大根河岸の如く心得、極めて露骨なる。極めて裸體なる賣買を行つた。罪惡とか何とかいふことを論せず、單に成敗利鈍の點からいうても其やり方のまづいことは爭ふことが出來ぬ。これが如何なる病毒を政友會に遺し、又如何なる禍機を將來に埋伏せしめたかは今茲に明言する限でないが、事實が追々之を證明すべきことゝ思ふ。

轉じて貴族院の形勢といふものについては、何人も自分が貴族院に居なければわからぬ。實は貴族院に居てもわからぬ。一言にしていへば貴族院の團體的機關（マシン）は餘程發達して居る。ツマリ貴族院の勝敗は個人〳〵の狙擊よりも其のマシンのスプリングを握らねばならぬ。現内閣は貴族院に於て運動頗る勤め、何時も御注進〳〵の度毎に吉報捷報で持ち切て居た。それは其筈て、個人〳〵に狙擊すれば、其場で嫌やといはぬがマシンが動かぬときは個人が全く用をなさぬ。處が其マシンは前内閣の手にあり、スプリングも亦其手にあ

る。それが存在する限り容易に其形勢を引繰返すとか出來ない。貴族院の中堅といふものは要するに研究會と幸倶樂部で、而かも其中堅の中堅ともいふべきは、質の上からいへば、幸倶樂部で、量の上からいへば研究會である。研究會の態度はつまり貴族院の勝負を決する天王山である。然るに其態度が已に極まつて了へば戰はずとも勝負がわかる。處が現内閣に於ては何の見る處あつて戰爭を繼續したのであるが、傍からは評することは出來ぬが、彼等は何處までも勝つ積であつたらしい。終ひには政府は寧ろ速決をつけて、勝を一擧に試むるといふ考であつたらしい。此點に於ては政府の運動は確かに龍頭蛇尾といはざるを得ない。

若し單に勝つといふことを目的とせば、何故之を最初に貴族院に提出せなかつたか。衆議院で勝ても別に現内閣の重きを加へない。何故といへば去年已に通過した問題である。同じ議員から成て居る同じ議會で、同じ案を一度通過さしても二度通過させても同じである。萬一負ければ不面目である。苦戰をすれば傷を負ふ。苦戰せぬまでも手數である。夫れよりも一番に貴族院に提出して殆ど電光石火の間に之を通過させて、其勢で衆議院に行けば恰かも圓石を千仭の谷に轉ずるも同じで、何等の骨も折れずに行たらうと思ふ。一體貴族院はなか〳〵のろい。贊成することものろいが、反對するのものろい。曠日彌久は寧ろ反對者に利益を與ふる。前内閣に同情ある貴族院議員と雖も、みしみし現内閣を破壞することは嫌ひである。若し郡制案が重大なるものであれば、彼等は之に反對するに餘程遲疑躊躇したゞらうと思ふ。其勢に乘じて手段を廻らせば或は勝利を得たかも知れぬ。處がそれが出來なかつたのは、衆議院に於てさん〳〵しくじつて、衆議院に於てサン〳〵不手際をやつて、衆議院に於て犬も喰はぬまでにやり損つて、貴族院に持出した時は最早や鼻摘みの姿であつた。委員會の不意打、議員の買收、一つとして貴族院の反感を招かざるものがない。それがために政府黨のものも反對に赴いたものもある。況や閣外の貴族院の議員が中心より反對したのは當然のこと

てある。是に於て彼等も之を傍觀坐視することは能はざるに至つた。つまり政府は衆議院に於て郡制案の受附くべきものでないことを廣告して、然る後貴族院に持ち込んだといつてもよい。戰ふ爲めならば實に順序を過つたものといはねばならぬ。」

政府がどうしてかゝる間違をやつたかといへば、初めより其偵察を誤まつたのである。貴族院に於ても必らず勝てるといふ間違つた報告若くは間違つた想像が一切の間違を來さしめたといふてよい。初め前内閣員が郡制案を決して出すな、出せば手傷を負ふぞと忠告をしたのを彼等は、若し提出すれば貴族院も通る、貴族院も通れば前内閣派の立場が無くなる。それを恐れて止めるのだといふやうに解したために、忠告をすればする程出したくなつた。出せば必ず勝つに違ひないと思うた。此勝つといふ間違つた想像のために。張らなくてもよい山を張り、又禍を轉じて福となす撤回もせず、終に惡戰苦闘をして彼が如き結果を生じたのである。若し貴族院に於て勝利を占め、他人の力より獨立して自己の力にて立ち、彼等の思ふがまゝに政權を振り廻すことが出來たならば、彼等にとつては誠に小題大做であつて問題が小さくとも大きくとも、前内閣の根據地を顚へして自己の勢を示すによいわけであるから、彼等が山を試みたことも無理がないが、併しながら實際彼等は假りに勝たとしても、其勝は永久のものであるか、此次の議會にはどうか。それは餘程の疑問である。寧ろ今回は力を收め、機を伏して來年の總選擧を待ち、其上に力を實現するも決して遲しとせなかつたのである。此點から評すれば現内閣は少しく早まり過ぎたといふてもよい。

夫れで世間では郡制案は法律問題から政略問題になつたのだといふが、それは嘘である。初めから政略問題として取扱つたものである。即ち其勝負は郡制問題の如何にあらずして、貴族院に於ける現内閣と前内閣との勢力の消長如何を卜すべき問題である。此問題は實に日本の政界の權力平衡（バランス、オブ、パワー）を引繰返すべき問題である。故に問題は外觀上小なるに似て小ならず。現内閣

前内閣双方共其死力を出して爭ふたことは理の當然である。併しながら其爭は買收問題の外は世間に餘り暴露せず、斯程の大葛藤が比較的隱密の間に行はれたといふことは、實に我政治上の戰爭の一層巧妙となり、一層熟練したとを語つて居るものと見るべきである。

（完）

啓蒙思想

文學博士　桑木嚴翼

十八世紀の歐洲思想界は通常啓蒙時代と稱せられるもので、伊佛等に曙光を發した近世文明が十七世紀に於て赫々たる光明を發した後、其餘光が社會の各層に遍ねく行き渡り、從來の慣習傳說に對して鋭利なる批評が顯れると共に、知識が平均し偉大な創見や趣味多き創作のやゝ缺けた時代である。併し一概に啓蒙思潮と云つても其中多少の差別はあるので、殊に當時思想界に覇を唱へた英佛獨の間に自から判然たる境域が劃せられる。

先づ時期の遲速と思想の源流との點から云へば、英國は其の首に位するもので、佛國之に次ぎ、獨逸は最も遲れて居る、是れ職として英國には一般に自由の精神が普及して居たが、佛國は王權鞏固で宗教も割合に威力を有し、獨逸は三十年戰爭の創痍が長く癒えなかつたとに由るが、一體英國の思想が最も啓蒙向きだといふとも其主要なる源因たることは掩はれぬ事實である。既に英國の社會は最も自由で又一般に知識が普及して居る所へ、其學者の思想は最も啓蒙的だとすれば、此國の啓蒙運動が比較的に弊害が少なく、よく其效果を奏したとは當然の事であらう。英國の啓蒙は何所までも常識的で又健全である、然るに恰も之と正反對なのは佛國である。此處では啓蒙運動は許多の障碍物に打勝たねばならぬ、加ふるに英國思想界の如く其源因の大部分が自己中にあるのでなく、結局外國即ち英國の影響によつて生じたものであるから、自から思想と社會との間に睽離が生じて大騷亂を惹起した。かくて

佛國の運動は單に思想上に止まらず、延て實際の問題となつたが、之に反して獨逸に於ては全然思想界學者間の事業として人民敎化の方面に傾いて居た。故に試に一言で此三種の啓蒙思想を表はせば、英國は道德的常識的で、佛國は政治的空想的、獨逸は學究的論理的と言へやう。

此の如く英國の思想は實に十八世紀の原動力であるが、殊に又其內ロックの哲學說は英國諸學說の淵源で又同時に全十八世紀思想の源泉となつて居る。今此處では詳しく其內容に立入る遑はないが、英國に於ては所謂經驗論の基を立て、一方には道德宗敎等に關する自然主義の端を開いた事や、佛國に於ては變じて感覺論となり其他間接に唯物論等に影響を與へたことなどや、獨逸に於ては獨逸啓蒙の祖たるライブニックの『人知新論』を促した事などを擧けれは一端は察しられる。然しながらロックの說がかく十八世紀に大勢力を得たのは一部分は其說か最も啓蒙に適した點にある。試に其說を聞けば、先づ人心中には生れながら具備する觀念はないといふ、其證據は如何なる人々も承諾せざるを得ない普通の事實の記載である、而して此否定說に對する肯定說は何ぞといふに、曰く知識は凡て經驗から來ると、是亦最も人耳に入り易い論ではないか。然らば經驗とは何ぞ、曰く是には外的感覺と內的反省との二があると、もし五官の外感だけとか心の內感だけとか云へば議論も要るが、かく無造作に出られては角力も取れぬ。其他『人間悟性論』一篇、皆寧ろ事實の記載で、困難な點は說明してない。此論は道德や宗敎にも及んで極めて寬容公平、而して同時に極めて平凡曖昧である。故にロックの說に對して論辯は無用である、我等はたゞ其のよく人々普通の意識を描寫した事を認めればよい、而して是れ實に啓蒙には最適當な說き方ではないか、幽玄な宗敎や高妙な哲學に食傷した凡俗の耳には最もよく響いた福音であつたらう。

此點から見るとバークレー、ヒューム一派の經驗論は哲學史上には價値はあるが、英國流の啓蒙としては、か極端に奔せた氣味かある、併し二人ともに決し

ら非常識とは思はぬバークレーは其唯心論の方か形而上學者の説よりは常人の知覺に一致すると言ふし、ヒュームも自ら決して異説を樹てるものとは信じて居なかつた。たゞ其説の發展すると共に知識——啓蒙時代唯一の寶たる知識の根底を危くしたので、常識哲學のやうな平凡な方法で之に對する防禦策を講しやうとする者も出たが、是れ實に啓蒙哲學に最恰好なものと云はねばならぬ。而して之と同じく、英國の自然主義的道德宗教論は最も啓蒙的なもので、殊に所謂「ディズム」は當時の氣風に適つて居る。彼等は所謂道德は人性中に根據を有するもので、其中には或は人性を抑壓するのが道德だとし、或は人性の靈妙なる作用を發達させるのが道德だと言ふの區別はあるが、何れにせよ道德は人間的のものとなつた。獨り道德のみならず、宗教も亦人間的自然的となつて彼等の所謂理性に最適合するものとなつた、天啓とか奇蹟とかいふ不可思議な事は一切排除せられて其結果始と普通の道德訓戒と何等の異なる所なきものとなり了り、たゞ自然研究上自然の組織構造の精巧微妙なるを認めると共に、之に對して意匠者のあることを想像して之を神とした説かあつて稍古代宗教の面影を殘して居る。然し此の神の説も宗教的情熱を示すよりは、寧ろ從來の神に對する信仰を餘り烈しく毀損しまひといふ懸念から生したものと見る方か適當だ、然らば宗教が道德と化し畢つたのも啓蒙的で、多少古説を殘した所も亦啓蒙的と云はねばならぬ。即ち英國の思想は（多少の例外を除けば）徹頭徹尾常識的凡俗的である、而して若し凡俗的天才なる語を許すことが出來ればロックは正に其れであると言つてよからう。

翻て此健全な常識が割合に舊習の牢乎たる佛國に於て經過した狀態を見ると、著しき相違あることに注意せぬ譯には行かぬ。佛國にも固有の懷疑的思想があり、デカルト一派の新哲學もあるが、とかくに舊來の宗教が勢力を得て新思想を妨害するから、新哲學は之に迎合することによつて僅に迫害を免れ、懷疑主義の如きは反て宗教を學理的批判より獨立せしむる口實となつた。

斯る狀態の國土へ英國より新歸朝のヴルテールなどが連りにニユートンの物理說や英國流の經驗を鼓吹し、ロツクが常識的に感覺と反省との二要素を認めて置いた經驗はコンデイヤツクにあつてはたゞ感覺一方に限られるやうになつた。斯く佛國の啓蒙思想は既に其出發點から反抗的てあつたが、ヴルテールの極力當時の宗敎を攻擊したるや唯物論者の大膽な論議は益世論を沸騰せしめる性質を有つて居る。其の結果は一方には百科全書の編纂となつて如何にも啓蒙の時勢に適合した事業となつたが、一方には又『自然の體系』の編述となつて唯物論の組織か出來て形式的知識を重ずる啓蒙學者の心を滿足させた。然るに盛極まつて衰へ、知的啓蒙に對する大反抗はルソーの感情主義となつたが、是も亦其の人間的たる點に於て明に啓蒙學者の特色を具へて居る。而してルソーが當時の文明に對する反對は佛國革命となつて實際に現はれたが、此騷亂はルソーの理想を距るとは固より遠い、史家は評して、ルソーは太古の黃金時代を夢想して現代文明を呪咀したが、其說の一部を實行した結果は反てホツブスの原始狀態と假想した萬人相爭となつたと言つたのは警句と言はねばならぬ。要するに百科全書で知識を平均し、唯物論感覺論て人類と他物との差別を沒却し、自然主義感情主義て社會の階級を撤去し、かくて啓蒙的平等主義は遺憾なく實行に顯れたが、得る所は反て極端なる英雄專制となつたので、世に實際的空想なるものがあつたら正しく是を示すものと言へる。

獨逸の思想界は大分是と趣を異にして居る。此處には啓蒙運動は大哲人ライプニツツの足跡を逐ふて起つて居る、而してライプニツツは佛國の理性主義と英國の經驗主義とを發展說によつて結合したのてあるが、其眞意は反て傳はらず、平凡なる理性主義と經驗主義との調和者と解釋せられ、其說を祖述して論理的に整合せる組織としたものが當時の思想界の中心となつた。其組織は論理的には殆ど間然する所なき程てあるので、從て所謂一辭をも贊する能はず、新材料によつて研究するとは已んて、たゞ既存の學說を或は解說し或は招

擡し、一般社會に普及するとばかりが學者の業となり、何事にも論理的形式を擔出し、何時も煩瑣な方法で組織する有樣になつた。著書は中々出版された、然し教科書に非ざれば注釋書、偶々自說らしく打て出てたものもよく見れば古今學說の綴合せか、些細な言語上の議論。論理を重して事實を棄つるが爲に其批評は歷史的根據を缺き、理屈一遍に傾くが故に其說は全く沒趣味て幽玄の趣など秋毫もない。單に形式上の理由から明晰なる觀念に關する論理學に對して感覺即感情に關する美學が產出したのは偶然の好果だが、其他には心理研究の盛になつた點のみが注意を價する、而して是れ實に人間的思潮の當然の結果と云はねばならぬ。斯く飽くまで常識的通俗的に傾いた獨逸思想界はたゞ一の救濟によつて全然凡俗に陷ゐるとを逃れた、即ちレッシングの歷史觀て、實に其源をライプニッツに發して居る。レッシングの獨逸に於けるは猶ルソーの佛國に於ける如きものがあるが、其の歷史的と沒史的とは正反對の觀がある、從て又其結果に於ても徒らに空想を實行せず、空想は全然空想で通して終に思想界の一新期を喚起する基を開いた。而して此レッシングの思想はライプニッツより出て、ライプニッツの此の說は特にロックの說に對する評論に於て顯れたとすれば、英國啓蒙の祖たるロックは實にまた全啓蒙時代の淵源と稱してよい。此の如く獨逸の啓蒙思想は一轉機を索め得たが、然も其大部分は確かに學究的であつた、換言すれば俗人的學者の事業であつたのである。

以上簡單な敘述から啓蒙思想の特性を尋ぬれば、先づ其思想の根據たるべき哲學は最穩健で不偏不黨、一切を包括するものであるとを要する、而して其結果として常識に適合するとか最も貴重視せられ、或る特別の原理で事實を說明するよりは寧ろ事實を列擧記載するとを目的とするやうになる。斯くすれば何所からも苦情は出ぬが、往々にして肝要の證明すべき所を脫漏したりする恐はある、從て何等の奇拔な所もなく極めて平凡な思想を產出し、往々にしてやゝ突飛な說を容れる餘地がない樣になる、故に獨逸てはライプニッツの

説か持断されても其の説の根本精神は全く失せ去つて居つた。次に其思想の中心を一言にすれば人間的といふ事に歸するので、其意味は研究の對象と方法との兩面に亘つて居る。研究の對象が人間的といふのは、啓蒙時代の問題中多少自然理學等に關するものもないでないが、常識を主とする所から問題を餘り高遠に馳せず、手近な人間の心情を分析し、心理道徳、教育等のみを論ずる事を其本務として居る事で、論理學者や心理學者教育學者が輩出して平易無趣味な説を陳述する事を云ひ、研究の方法か人間的とは常に人間の立場から研究する事で、之を極めて極端に應用し、往々にして淺薄な目的觀に陷ゐる事を意味する、故に例へば此方法から宇宙の善美を説いて居ると一地震の爲に大損害か生しても直ちに其樂天觀に變動が生ずることゝなる。終りに啓蒙思想の發表法に關しては既に述へた通り全然通俗に研究的形式を執るから、微細な研究よりは寧ろ概括的撮要の類に富むで居る、啓蒙思想には教科書と小論文とはある、然し教育を離れた各種の特殊な著書は終に見た事がない、啓蒙學者中該博を以て名ある人は多い、然も從來古典語や外國語で祖述した哲學を自國語で述べる事にしたといふ事か、辭書や百科全書を編するのが關の山、毫も斬新な意見を出す者はない。然のみならず多數は實に淺薄な歷史的知識を有つて居たので、該博も餘り當てにならぬのである。

啓蒙思想には長所もあれは短所もある、上來の所述は主として短所を擧げたが勿論公平な歷史的批評には其長所を沒する事は出來ぬ。併し今此に啓蒙思想を述べた譯は我國現時の思想界と比較した爲であつたからである。現時の思想を啓蒙思想と稱する事は夙に識者の唱へた事であるが、上來の所述は正に移して、我國の狀態と見る事は出來ぬであらうか。此には態と其比較の細評に立入らぬ、たゞ我等は自から玻璃鏡に面した樣な心地がして我等併ひに我か思想界の爲に赧然として耻ぢざるを得ない事を自白しやう。此一篇は歷史談てはない、實は現在の實錄なのである。（畢）

腐敗せる政界を奈何

田中穗積

一難去て一難來るの裡に國力の增進國威の發展胚胎するは、國運進步の普通の順序にして、頓挫なく波瀾なく平々坦々順潮に次ぐに順潮を以てするが如きは素より企及すべきにあらずと雖も、政界當今の腐敗墮落の如きは豈國家の深憂大患にあらずとせんや。

政界の眞相を曝露して細さに此を讀者に訴ふるが如きは余の忍びざる所なるのみならず、必ずや讀者の目親しく此を視耳親しく此を聽く所なるが故に、茲に蛇足を添ゆるの必要なきを信ず。況んや坊間往々憲政の危機を叫び、或は衆議院の存在が却て國政を蠧毒すべしと謂ふが如き、極端なる論議の傳へらるゝに徴するも、政界の眞相必ずや思半ばに過ぐるものあらん。

遮莫政界は如何にして現今の悲境に沈淪せる乎、試に歷史に就て此れを觀るに我邦に於て始めて政黨の勃興せる明治十四五年より明治二十三年議會開設に至る、所謂憲法政治の準備時代に於ける政界の空氣は頗る淸廉純潔にして、當時政客の抱懷せる主義主張若くは其經綸に至ては、今日よりして此を觀れば淺薄幼稚の譏を免る可からざるものありしと雖も、而かも其主義に忠實にして又其主義の確乎なるに至ては、威武も屈する能はず富貴も婬する能はざる操守を有し、自家一身の得喪を度外視して立憲政治の基礎を建設するに狂奔せる勇氣は誠に欽稱の値なくんばあらず。故に總選擧の始めて行はれ、國民の選良として帝國議會に集まれる三百の議員は、智識に於ても亦其人格に於ても當時國民の精粹を選拔せるものにして、國民は議員に謝し多大の尊敬を拂ひ多大の希望を囑したると同時、議員も亦誓て國民の重望に辜負せざるを期せり。即一擧藩閥內閣を倒して責任內閣の實を擧ぐるが爲めに、年々歲々豫算問題を提げて政府に肉迫し、解散に次ぐに解散の厄に遭ひ、選擧干涉の迫害交も臻るも議員の熱烈なる勇氣は却て此れが爲めに加はり、遂に藩閥內閣を危地に陷れ、明治二十七八年戰役開始の當初にあ

りては其餘命既に永からざるを認めしむるに至れり。然るに日清戰後擧國一致の美名の下に從來反目せる政府と政黨とが一度び相接觸するや兩者の態度は急激なる變調を呈し、藩閥內閣は從來慣用せる强壓手段を一擲せると同時、在野政黨も亦其進擊的態度を變じて提撕扶掖の方針を採るに至れり。思ふに此の如きは藩閥內閣が柔を以て剛を制するの寧ろ得策なるを看取せるに當り、在野政黨も亦稍戰鬪に疲れ、一氣呵成を望まんよりは寧ろ漸進的の勢力を以て藩閥の勢力圈を蠶食することの寧ろ長計なるを悟りたるによると雖も、政界の危機は既に此時に胚胎せるものにして、自由黨の首領板垣伯が伊藤內閣に入て內務大臣となり、次て進步黨の首領大隈伯が松方內閣に入て外務大臣となり、所謂人才登用と稱し一寒布衣の在野政客を拔擢して局長となし知事となすや、政界の純潔なる良心熱烈なる勇氣は自から痲痺して、權勢利祿の狂熱を煽揚する恨事を遺すに至れり。蓋初めより淸貧に甘して主義の爲めに健鬪し主張の爲めに倒るゝの壯圖を抱ける者と雖も、其同僚が一躍して權勢を弄し利祿を縱にし、世俗の尊敬仰慕を受くるを見て自から其意動くは、非凡の人物にあらざる限り人情の弱點免れざる所にして、古今東西渝ることなく、決して此を以て我邦政客の薄志弱行とのみ非難すること能はず、即歐米孰れの國に於ても政爭を利用して權勢利祿に近づくの機會あれば、必す其國の政界は墮落に陷るものにして、殷鑑遠からす今米合衆國の如きは投票權の買收によつて如何なる顯位要職も此を攫得するを難しとせざるが故に、其政界の腐敗墮落は疑もなく我邦の現狀以上にありと謂ふべく、英國著名の政治家ジエームス、ブライスの如きも、英國の政界の純潔なるは獵官熱の起らざるに職由し、若し一度び此門戶を開放するに於ては一朝にして溷濁を免る能はずと痛言せる、誠に肯綮に當れりと謂ふべし。

即獵官熱が如何に政界を蠱毒するの毒素たるかは絮說を要せざる所にして、此恐るべき毒素が一度び在野政客の血液中に注射せらるゝや、政客の態度理想は忽

ち豹變し來り、昨の淸貧に甘んじて主義の爲めに健鬪せる勇士、今は利祿に戀々として輕擧妄動し、暗夜赤毛布を被つて權門に跪くが如き狂態頻々として演出せられ、日淸戰役以前に於ける高潔なる理想堅實なる德操は蕩然地を拂つて空しく、政界は唯其形骸を存するに過ぎずと謂ふも誣妄の言ならざるに至れり。

此の如く政界の情勢今や日に益々非なりと雖も、其腐敗墮落は日淸戰後卽遠く十年の昔に胚胎せる禍根が日一日に侵潤瀰蔓して、遂に今日に至りたるものなるが故に、歷史を遡究するに於ては毫も此を怪むの要なく、唯世の先覺者が此趨勢を認めて今日の極端に陷るに先立ち、此れが挽回の策を講ぜざりしは、千秋の恨事なりと雖も、今にして此を絮說するも所謂死兒の齡を數ふるの痴に過ぎず。

然らば卽此れが挽回の策如何、樂天論者は說をなして曰く、凡そ物窮れば必ず通ず、卽我邦政界の腐敗墮落も今や殆んど其極點に達したるが故に、此を放任するも自から改善刷新の方嚮に進むべきは明かにして、深く意に介するの必要なく、又假令此れが爲めに焦心懊惱するも革新の機運自から到るにあらずんば、人爲を以て此を奈何ともする能はずとなせども、余は歷史に顧て此の如き樂天觀に同意を表する能はず。何となれば凡そ一國政界の空氣は國難前に懸るの際にありては自から純潔なりと雖も、幸にして其國難を排除し國家平靜無事の日に至れば、動もすれば溷濁の危險あるは爭ふべからざる事實にして、此を米國の政界に就て觀るも獨立戰爭以降十九世紀の始めに至る創業時代及一千八百六十三年の南北戰爭に至る整理時代にありては、頻到する內憂外患を芟刈するが爲めに忙殺せられ、政界の空氣は極めて純潔なりしと雖も、常に南北戰爭の鎭定して共和國の基礎確立し、前途又深く憂ふべきものなきに至るや、政界は日と共に墮落に傾き、市政を蠱毒し州政を腐蝕し遂に危害の國政に及ばんとするに至て、始めて米國市民の覺醒を促し、十有餘年以來革新運動は米國の到る所に於て勃興せりと雖も、二十年來馴致の宿弊素より一朝にして此を打破する能は

ず、今日に於ても尙ほ桑港市長シユミッツの如き公職を利用して詐僞取財を行ふが如き醜態の演ぜらるゝ決して稀なりとせず。

即米國政界の腐敗史を繙き、翻て我邦の現狀と對照するに於ては明かに其近似せる點を發見するを得べく、憲法政治の創設時代及議會開設の初期にありては、我邦の政界は頗る清廉純潔なりしと雖も、開國以降の宿題たる條約改正が明治二十七年に於て行はれ、次て東洋平和の禍根たる韓國問題が日淸戰爭に於ける全局の勝利によつて一段落を告ぐるや、政界は早く既に變調を呈し政客の態度は豹變し、更らに日露交戰の勝利によつて極東平和の保全が確認せらるゝや、政界は急轉直下の勢を以て腐敗の深淵に轉落するに至りたるは、誠に米國政界墮落の歷史と符節を合するにあらずや。故に若し誤て輕躁なる樂天觀に耽り此の頽勢を傍觀するに於ては、殆んど其底止する所を知らざる明かにして、一日遲るれば革新事業に一日の難を加へ、此れが爲めに邦家民衆の被る危害は計るべからざるものなきを得ず。

玆に於てか一派の悲觀論者は、政界の現狀に對して懊惱煩悶を極め、或は憲政の危機を叫び或は社會の澆季を歎き、道德の頽廢を疾呼して輿衆の覺醒に日も亦足らざるものゝ如しと雖も、此の如き悲觀論に對しても亦余は同意を表する能はず。何となれば道德の刷新向上は其事甚だ至難にして到底短日月の能くする所にあらざるが如く、道德の頽廢も亦決して忽然現はるべきものにあらず。即日淸戰役後に至るまで淸廉潔白なりし政治道德が、戰後僅かに十年の短日月に於て根底より頽廢せりとは、如何にするも信ずる能はざる所にして余を以て此を觀れば政界の腐敗今日あるは、道德の頽廢よりは寧ろ其因源を法律の不備に歸すべきものなりと信ず。

即法律の不備若くは其缺漏が道德の頽廢と同一の結果を呈するは屢々起る所の現象にして、人類の道德が至善至美の境に到達せざる限りは、苟くも國家の制定せる法律にして弛緩せんか直ちに醜態を暴露するは免

れざる勢にして、此を例へば彼の賭博の如き我邦の法律に於ては此を嚴禁するが故に、賭博の流行歐米諸國に於けるが如く甚しからず、世人は此を認めて我國民の賭博心少きに歸し大に此を喜ぶと雖も、安んぞ知らん一度び競馬に賭を許し、臺灣に彩票を發賣するに於ては狂奔の狀歐米諸國の人民と毫も軒輊なきを認むるにあらずや。故に賭博の行はれざるは決して邦人の賭博心少きによるにあらずして、法律の此を嚴禁するに職由せずんばあらず。

思ふに此と同一の現象は政界に於ても亦等しく認めらるゝ所にして、我邦現行の選擧法にありては、選擧權の範圍狹隘に失し、選擧有權者の數七十五萬人にして三百八十名の議員を選出するが故に、議員一名平均僅かに二千個の投票を集むれば必ず當選するを得べく、此の如く少數の投票によりて其當選明かなりとせば、此を攫得するが爲めに黄金の力に依賴するは策の最も容易なるものにして、人情の弱點に乘じ一票數金を投ずるも尙ほ數千金の費用を以てして餘りあるが故に、選擧運動に於て投票の買收が一般に行はるゝ毫も怪むに足らず。即選擧が候補者の人格材幹若くは其抱持する主義主張を問はず、專ら黄金の勢力によりて行はるゝに至れば、政界の腐敗するは必然の勢にして、經濟上に於けるグレシャムの法則は政治上に於ても亦行はれ、劣惡なる貨幣の流通するに至れば善良なる貨幣は皆其影を潛めて流通市場を退くが如く、背德無恥にして名奔利走を事とする政客が黄金の勢力を藉りて超梁跋扈するに至れば、主義あり德操ある眞正の政治家は此と共に齒するを厭ふが故に、自から政界より高踏勇退すると同時、靑春氣鋭志政治にあるもの又此渦中に投ずるを踟躕し、此の如くして政界は人物地を拂て空しき悲境に陷らざるを得ず。加之既に選擧が黄金の勢力によりて行はれ、議員が當選の爲めに數千金を散せざるべからずとせば、彼等が其費用を回收するが爲めに狂奔し、賄賂苞苴敢て辭せずとなすは又怪むに足らざる所にして、彼等にして其費用を回收するにあらざれば、次期の角逐場裡に加參する能はざるが故に、

其財源を得ると否とは誠に彼等が死活の問題なればなり、茲に於てか政界に幾多の惡德公々然として行はれ、日一日に腐敗墮落の深淵に轉ずるは勢已むを得ざる所と謂ふべく、約言すれば撰擧法の不備缺點は遂に今日政界の頽勢を馴致したる最も有力なる原因にして、悲觀論者が此を政治道德の頽廢に歸するは甚しき誤謬と謂はざるを得ず。

即余は政界刷新の第一義として選擧權の擴張を提唱するものにして、選擧權に大擴張を斷行して選擧有權者の數を今日の四倍若くは五倍に增加し、議員一人の當選投票數平均八千票若くは一萬票を得ざるべからざるに至れば、一票一圓を以て買收せんか總額一萬圓を要し、二圓を以て買收せんか總額二萬圓を要するが故に、此の如き多數の費用は到底多數政客の資力が能く堪ゆる所にあらず。從て選擧場裡に於ける黃金の勢力は自から煙滅して眞正の投票行はれ、高材逸足德望あるの士は勝を制するに反して、權謀術策萬一を僥倖せんとするの徒は閉息し、議院の面目は忽ち一新し、政界の頽勢容易に此を挽回するを得べきこと、火を睹るよりも明かなりとす。

而して選擧權の擴張は獨り政界刷新策として當今の急務なるのみならず、又此を憲政の本義より觀察するも、今日の如く普通敎育の發達によりて人文の進步し、財政の膨脹により一戶平均四十圓と謂ふが如き多大の租税を負擔する時に當り、尙ほ且つ選擧權を少數の人民にのみ制限するが如きは甚しき背理にして、此れを歐洲諸國と比較するに、英國に於ては人口一千に對し選擧有權者數百六十八人に當り、獨逸に於ては二百〇六人に當り、佛蘭西に於ては二百六十二人の多きに當るに對し、我邦に於ては僅かに十六人に過ぎずと謂ふに至ては國民の參政權が制限抑壓せらるゝも亦甚しからずや。即此の如きは世界一等國の伍伴にある立憲治下の國民たる面目に對し、如何にするも忍ぶ能はざる所にして、選擧權の擴張は國民の當然要求すべき權利なると同時、憲法政治の本義に顧て一日も此を閑却する能はざるなり。

要するに政界の刷新は當今の急務にして、此を現狀に放任せば憲政有終の美を濟すは百年河淸を待つの類たらざるを得ず、余は國民蹶起して選擧權の擴張を要求し、頽瀾を既倒に挽回することの一日も早きを望むや切なり。

亞細亞大陸諸國の將來

文學博士　白鳥庫吉

亞細亞大陸諸國の現狀を見ると、何れも萎靡振はず、其實權は殆ど歐羅巴人に掌握されて居る有樣である。北の西比利亞は露西亞の領土であつて、南の印度、安南及び印度洋諸國も明かに歐羅巴人の領土である。其間には土耳古、アフガニスタン、緬甸、支那などの國があつて、名義上は獨立國であるが、これは何れも西洋諸國の權力平衡上から獨立國とされて居るに過ぎないので、實際に於ては獨立の實力を備へて居らぬ。であるから、今日亞細亞大陸では實際自分の力で國を立てゝ居るものが一つもないというて可いのである。

嘗て威武を以て鳴り響いた北方の民族は露西亞領となり、又文明の本源地として上代の歷史に赫々たる光を放つた南方の印度、支那其他の國は今日已に全く固陋保守に陷りて一歩も進まず、西洋の文明に接觸してさへも其れに化せられぬ程の沈滯の姿である。夫れ故に亞細亞大陸の諸國は武力の點に於ても又文明の點に於ても一も見るべきものがなくなつて居る。夫れで世の中には此現狀を觀て、亞細亞大陸は到底駄目だ、どうしても振ひ起る見込がない、終ひには歐羅巴人に併呑されて了ふ、亞細亞は如何に之に敎育を施し、如何に之に刷新を加へても全く見込がないと斷念するものがある。今日の有樣ばかりを見れば一應の道理ある說と思はるゝ。さりながら果して此等の民族が回復の見込なきや否やを論ずるは深く其今日に至りし原因を研究し、然る後將來を推するにあらざれば、決して適當

にして　なる豫言推測を下すを得ないと思ふ。醫者が病人を診察して病氣を直すときに、其病源を究めなければ之に匙を下して藥を與ふることが出來ぬ。今亞細亞大陸諸國はいはゞ大病に罹て居る。其大病が恢復するや否やを見るには、即ち此等の諸國が今日の病態に陷りし原因に遡りて研究する必要がある。然れば此大病の原因如何といふに之には大いに歴史的理由あることである。

今其病態に陷りし原因を考へて見るに、亞細亞が歴史を有してから今日まで大凡そ四五千年の年數を經て居る。其間には固より種々雜多の事件が起て居る。然しながら歴史上から直觀すれば、北方の民族と南方の民族との爭に過ぎないのである。それが亞細亞の歴史を構成する大綱である。

北方の民族とはどーいふ民族かといふに、此民族の主もに代表するものは、今日の博言學者のいふ所の、ウラルアルタイ民族即ち蒙古、土耳古、或は滿洲の如き地に住む種族である。此等は今日に於ては文物に於ても、又武力に於ても一も見るべきものがない。が、此民族は實に亞細亞の歴史に花を咲かしたものである。亞細亞の民族で史上に赫々たる鴻業を遺したのは大抵此民族であつて、元の國を建てた成吉思汗、或は中央亞細亞を征服したタメルラン、或は西歐のアッチラ、又は匈牙利を建てたハン民族等皆此民族に屬するものである。其他規模は其れより小さいが亞細亞内に大帝國、大王國を作り、亞細亞の歴史の最も華美な事蹟を作たものは皆此民族である。即ち此民族は武力を以て世界史の上に後世忘るべからざる事業を遺したのである。東洋史を修める人が、文明の點に於て見るべきものなしとて此民族を度外視して居るものが多いが、それは間違であつて、亞細亞の歴史を研究するに、此民族を究めなければ、少くも其一斑を知ることを得ず、從て全體の歴史の正當なる解釋を下すことを得まいと思ふ。

南方の民族とはどういふ民族かといふに支那、印度アッシリア、バビロンの如く何れも文明國にして、其

文明は何れも世界の文明の本源となつて居る。世界の四大宗教、其他の文化のカルチューア即ち化育は皆此等の民族から出て居る。それで今日の亞細亞の歷史は文明の點に於ても見るべきものがないが、歷史上から見れば、實に非常の功績ありといはざるを得ぬ。

一言にしていへば北方の民族の長所は武力である。南方の民族の長所は文明である。亞細亞大陸四五千年間の歷史は此北方の民族の武力と南方の民族の文化との爭に過ぎぬ。即ち北方の武力ある民族が南方の文化の民族に侵入し、之に壓制を加へ、其文物制度を破壞し、之を支配する丈けの歷史である。かく北方の民族が南方の民族を打破りしことが實に亞細亞大陸をして今日の如き萎靡振はず、其諸國民をして卑屈、保守、固陋ならしめた最大原因である。何故かといふに之れがために南方の民族は其特有の文化を失ひ、北方の民族は其特有の武力を失ひ、南方共其特有の點を沒却して了つたといふ結果を來したからである。今少しく詳しく其顚末をいふと、南方諸國の文明は北方の侵略のために其文明が中止する。啻に中止するばかりでなく、今迄の文明丈けを保存し、其ナショナリチーを維持しようとして極端なる保守主義に凝り固まつて了つた。其保守主義の最も明かなるものは支那である。保守主義が、いはゞ結晶（クリスタライズ）したものである。北方民族から絕へずやらるゝから南方民族の特色は全く無くなつた譯である。それで北方民族の特色の無くなつたといふはどういふ譯かといふに、北方民族には元來文明といふものがない。彼は只馬に騎ることが上手で、弓を引くことが巧妙な民族である。それが偉大なる豪傑の下に統一さるれば偉大なる勢力となる。其目的は南方を侵略して其慾を充たさんとするに過ぎぬ。夫れ故に一旦南方を侵略して支配すれば、南方の奢侈に染まり、美酒を飲み、美衣を着、宏大なる邸宅に住み、北方の曠野に居りし時の慓悍勇武の氣象が銷磨し、惰弱にして婦女子のやうになる。かゝる理由であるからして北方民族が南方に侵入すれば何時でも其特色たる武力を失ふことになる。夫れ故に南方民族は武力で征服されるが

文化を以て北方民族を支配するといふことになる、だから南方はどこまでも其文化を保たねばならぬ、何となれば北方の武力を支配するものは彼等の文化であるからである。此點から見ても彼等は保守主義となるのである。其プロセッス即ち歴史的作用が亞細亞大陸の上に何遍となく繰り返された。所が亞細亞の北方には何時でも曠野あり、砂漠あり、其一部は南方に入つて柔弱になつても、其あとに殘る野蠻人があり、又偉大なる人物あれば又其れを統一して南方に侵入する亞細亞の南方の諸國が其文明文化を蒙古の如き砂漠曠野に入るゝこと能はず、北方民族は蜂の子の如く何時でも南方にやつて來る。この北方の禍の絶えなかつたのが亞細亞大陸が衰弱した一大理由である。それがわからぬと大病の理由が分らぬのである。支那の國が元來固陋であつて自分獨り倨傲尊大に構へ、西洋人に何遍負けても、其非を悟らぬのは、即ち彼等には已に幾千年間の經驗があつて、武力に負けても文化で勝てるといふ信念があつた爲めである。現に亞片戰爭に於て英國に負けても決して負けたとは思はず、又英佛の同盟軍が北京に入つて其宮殿を燒き、王樣が熱河に出奔しても目が覺めぬ。世間では不思議と思ふだらうが、其れは覺めぬ譯である。今迄四千年間の經驗で、武力で勝てても文化では支那が勝つ、だから支那人は武に負けても文に勝つといふ自ら恃む所があつた爲めである。

所が茲に近世に及んで亞細亞の此大勢の上に大いなる變動を來した事件がある。即ち亞細亞の四千年の病根であつた北狄の住家が悉く露西亞の領となつたことである。露西亞は歐羅巴に於てこそ野蠻と見られて居るが、古の蒙古や土耳古の比にあらず、東洋から見れば立派な文明國である。西比利亞が其下に立つたといふことは實に大いなる變動を亞細亞に與ふる、といふのは、これよりして亞細亞は古の野蠻人の襲擊を受けず、野蠻人は次第に露西亞の文化に接觸し、且つは自ら南方に侵入するの自由を有せぬために、亞細亞は北方から禍を受くるといふ病根を絕たれたのである。此點から見れば大に露西亞に感謝せざるべからざること

て、亞細亞の運命を一歩よい方に導いたものといふてよい。處が露西亞は大國であるから、それより進んで支那をも支配するならんとの心配が一時あつたやうである。然るに南の方には歐羅巴の勢力があつて、葡萄牙、和蘭、英吉利といふ順序に移て、十九世紀に於ては亞細亞の南部は全く英人の手に歸して居る。だから亞細亞は恰かも露西亞と英吉利との對抗場となつた。古は北狄と南方の民族との對峙なりしものが今度は其位地が歐人の代る所となつた。其權力の平衡上多くの國が存して居る。この儘に放任して置いたら、終には全體が兩國のものとなつてあつたかも知れぬ。處が此危難を救ふ事が一つあらはれた。即ち英國が露國に對抗する爲めに我日本と同盟を結んで、其同盟の結果日本が露國を打ち破つたことである。これが實に世界の歷史に大影響を與へたことであるが、殊に亞細亞の民族に道德的の導きを與へたものである。即ち一の興奮劑を與へたのである。今迄は亞細亞の國民は西洋人には到底叶はぬと思うて居たが、日本が彼等の最も恐るゝ露西亞を破りしことが一種の自覺心を喚び起し、我々と雖も日本人の如くになられると、いはゞエレキに打たれた如く感じた。これが亞細亞の國民の病氣を直す第二段落と思ふ。其結果として今迄自ら尊大に構へて自國を唯一の文明國とし周圍を夷狄視した支那からして留學生をドン／＼日本によこす。今迄支那人にこんなことはあるものでない。自分の國を天下といひ、其主權者を天子といふて居た國が、之を古の東夷と稱して居た日本に留學生をよこすことは、支那の歷史を知て居るものから見れば、實に大いなる變動である。これは全く自分の地位を自覺して來た證據である。茲に於て初めて病源は除かれたのに一服の清涼劑が加はつたのである。留學生は印度からも來る。其他からも教師を雇ふといふことが初まる。それであるからして亞細亞の國民が今からして我に返つて自覺し、自ら世界の文明を採るといふ心あれば古は、世界の文明の本源地であつたのであるから、其能力、其武力共に歐羅巴人に劣ることは決してない。今迄劣るやうに見えたのは全

く永い病氣に罹て居たからである。此大勢からして推せば亞細亞人はだん〳〵開明に赴くに違ひない。開明に赴けばだん〳〵ナショナリチーを發揮しようといふ考が起て言語、風俗、習慣、宗教等を同じうするものが一塊となる。さうなれば到底歐羅巴人が之を支配することが出來ない。其一例をいへば日清戰爭後 Beresford といふ人が Break-up of China といふ本を書いたが、あれは全く歴史を知らぬ人だ。支那には人口三億以上もある。其國が Break up するものではない。況んや此等の人民が我に返つて日新の文明を採用すれば到底歐羅巴人の手で治めることが出來るものでない。それで我輩の見る所では第一恢復の見込あるものは支那である。支那が將來に於て立派なる國となるべきことは今日に於て豫言することが出來る。印度は支那の如く容易には行かぬ。若し出來ても餘程久しい年月を要する。何故といふに印度といふのは地理上の名稱であつて歴史上の名稱でない。國民の名稱としては印度といふ國民があつたことはない。彼處には種々雜多の民族が居て各々文明の程度を異にして居て此れが一つになつたことがない。此等の國民を一つにして一致協同して國を立つることは若し出來ても餘程暇のかゝることである。又西比利亞も今迄游牧の民で一國を建てたことがないから獨立することが六つかしいかも知れぬ。然しながら波斯は必ず起る。あれはイラン民族というて一つの民族から成て居るから恢復の見込がある。土耳古も亦起ると思ふ。これも支配者の關係よりすれば六つかしいか、併しセミチックで亞剌比亞人と同一人種であるから其點から起るかと思ふ。又印度外の南方の民族も大抵起るだらうと思ふ。

果して然りとすれば今日亞細亞大陸諸國は萎靡振はざるも、其病源の除かれ、又清涼劑の加はつた以上は、次第に勃興して、遂に古の如く盛大となる時期が必ずあるだらうと信ずる。



獨逸の總選擧より得たる教訓

『ナショナルレヴュー』 ジエー、エリス、バーカー

稱して一獨逸國の總選擧とはいへ、之を以てその國民の外交上に於ける覺醒を見るべく、關係は直接吾人の上に在りとし、仔細に獨逸皇帝並に國民の胸底を揣摩し、自國の狀勢を回顧して痛憤の筆を驅りたるもの、吾人に取りても他山の石多大の興趣なくんばあらず。唯限りある紙面に長き論文の全體を盡く譯載する能はず。此處には勉めてその要を摘むに止まるを憾む、讀者諒とせよ。

獨逸の總選擧は了れり、今や吾人はそれに對して、新議院の組織如何、黨派別の異同如何、將たその議員の性質並に將來の行動如何を究むるを得、その結果は今次の獨逸の總選擧がその影響するところ啻に獨逸一國に止まらず、又直に我大英國の上に存するを知りぬ、されば、吾人が一層深くそれより一箇の教訓を得んとはするなり、

前議會は解散せられたり、その原因は吾人が曾て聞けるが如く已むなき葛藤の爲にはあらず、實は政府が議會を解散せんの素意より却て葛藤を求めたるによる、これ僅に南亞弗利加殖民地に要する四十万磅の金額が偶まその因を爲したるなり、議會解散後に於て、彼の半官報なるノールスジヤーマンガゼツトは論じて曰く、刻下の急に迫り居る我總選擧は、我國が依然として唯た歐洲の一大帝國たるに甘んずるか、將た進んで世界的强國となるべきかの決する時なりと、斯くの如く國民は今は進守孰れかに運命の定まらん時ぞ、歐洲に於ける獨逸帝國の、自然の發達に任する平穩無事の政策と海外における失費多き冒險的政策と、兩者その孰れを取るかと問はるヽに及び、彼等は今次の總選擧の結果に見れば明かに後者を撰びしなり、議會解散の當時に在つては、外觀には如何にも獨逸政府並にその世界的政策に不利なる所ありしが如し、政府と中央黨との紛爭は、中央黨が摘發したる殖民地に於ける耻づべき不正事件より起りぬ、南西亞弗利加戰爭も該地駐劄の官廳並に官吏の處置の惡しきに萌せるに、之に對して失ふ所の人命二万を算し、軍費は二千万磅に達せり、更に此戰爭間には南西亞弗利加に於ける軍用品受負者、ティッペルスキルヒの商會等が不正行爲にて私腹を肥し、在官者の之と結托したるあ

り、又如上の出來事のみにはあらず、元來左までの價値なき此殖民地に對して。既に七千五百万の國費を消失したること、既に一般國民の嫌惡を長ぜしめたるなり。

過去十二ヶ月に亘り、獨逸の諸新聞紙は筆を揃へて嘗に如上の南亞戰爭事件を論ずるのみならず、更に食料問題にも上り、食料品の價の騰貴は、外國品の輸入税を増したるによる、此事既に誤れるのみならず、當局者が、テイツペルスキルヒの商會と結び、その利に與からんとして斯くは煩瑣の規則の下に輸入品を拒まんとす、其結果は眼前に見る生活費の増大之なりと論ずるあり、反政府政策の會合は處々に開かれ、演説會は催され、印刷物は頒布せらる、然るに一南西亞弗利加殖民地における豫算案よりして、政府は唐突にも議會を解散せり、その結果や如何、衆皆此かる機會に此かる處置、此度こそは非膨脹政策用ひられ、社會共和黨は議會に多數を占めて、從來の獨逸の野心は根絶を見るべく、且つ社會共和黨は少くも百以上の人數を議席に着かしめ得べしと、豈圖らんやその結果の豫測に反せんとは、之れ最も研究せざるべからざるところなり。

ウイアヤム二世が帝位に登りしより以來、彼は獨逸を世界的强國の位置に進めんとす、その希望並に野心は彼が諸所に試みたる演説によりて明知せられぬ、彼は斯く認めぬ、世界の領地が斯くも今日の如く明かに分有せらるゝ上は、到底尋常の温和手段にて白人種の爲に殖民地を得る能はず、唯一征服によつて海外諸邦に一大獨逸帝國樹立の地を爲さゞるべからず、さて海上に覇を爭はんには、他日希望し居る殖民政策の行路に於て衝突を見るべき一大强國、今日最大の海上權を有する一大强國を威壓すべき海軍力の助を要すと、されば千九百年の海軍擴張案の冐頭に、「他日最大なる一强國との戰爭に當り、能く敵國の覇權を脅し得べき優勢の軍艦なかるべからず」とはいへる、之ぞ獨逸官吏が一意遵奉し遂行し行く一の口號にて且つ主義なりとす、千九百年に海軍費は二億磅と決定せられたれど之れにて尚ほ足らず、千九百五年末には在來の艦隊を二倍せんと勉めたるも成らず、僅に前期議會に於て五千万磅の増額を見て滿足することゝなりぬ、その結果獨逸は數閲年の後に於て、我ドレッドノート艦よりは、更に巨大にして更に强力なる戰艦凡そ二十隻を得べきが、此五十万磅の増額を得しや否や政府は必ず在來の艦隊を二倍せんとの煽動を試みたり、而かも舊議會は到底之に協賛を與へざるべきを見るが故に、それを解散して、更に獨逸海軍を極度に膨脹せんと欲する議會により素志を遂げんとするに及ぶは怪むを用ひず。

更に又他方に海軍協會なるものあり、百万以上の會員を有し、皇帝並に諸皇族の保護を受け居るものなるが、之が頻に海軍擴張の慫慂に勉め、遂に政府に勸むるに、迚も海軍擴張案が議會に容れられずば、詭計も亦用ひざるべからず、艦隊倍増の案は、議會の贊否に待つて決すべきにあらず、已むなくんば議會の意志に反對しても、更に進んでは議會を廢止しても決行すべしといふを辭せざりき、

斯くて議會は解散せられぬ、人々は非膨脹主義者の多數を占むるを豫

想せり、此豫想にして眞ならば政府は議會を無視して艦隊倍增案を通過し得べし、議院政治は或は中止せられ、或は變形せられ、或は何等かの形を取りて實際には廢止せられしやも知れざりしなり、保守黨員並に幾多同主義の機關新聞は選擧法改正の語を用ひ、ビューロー公は干戈に據りても議會が廢止するか、或は少くも變形し得べきかを考へたるもの丶如く、その眞意は往々にして彼が選擧の宣言書中威嚇的語調を示したるにても知らる、形勢此の如く、選擧前には詭計、選擧干涉、議會なき政府、革命等の如何はしき言語飛口に上り、之に對して社會民主黨は、議院政治の危機を叫び、選擧の自由を擁護すべく自黨に投票せんことを説き廻れり、

而かも選擧の結果は如何、豫想は全く外れて政府は望を達せり、ビューロー侯は膨脹主義者の多數を得たり、反對黨の議會における勢力は八十一人より四十三人となれり、これ畢竟何を示すぞ、武力的帝國主義の勝利は實に由々しきことにて、獨



I he can only water the sands of the result will be something like this! Africa with the, people's millions, he declares.

DERNBURG THE WIZARD.

—*Wahre Jacob* (Stuttgart).

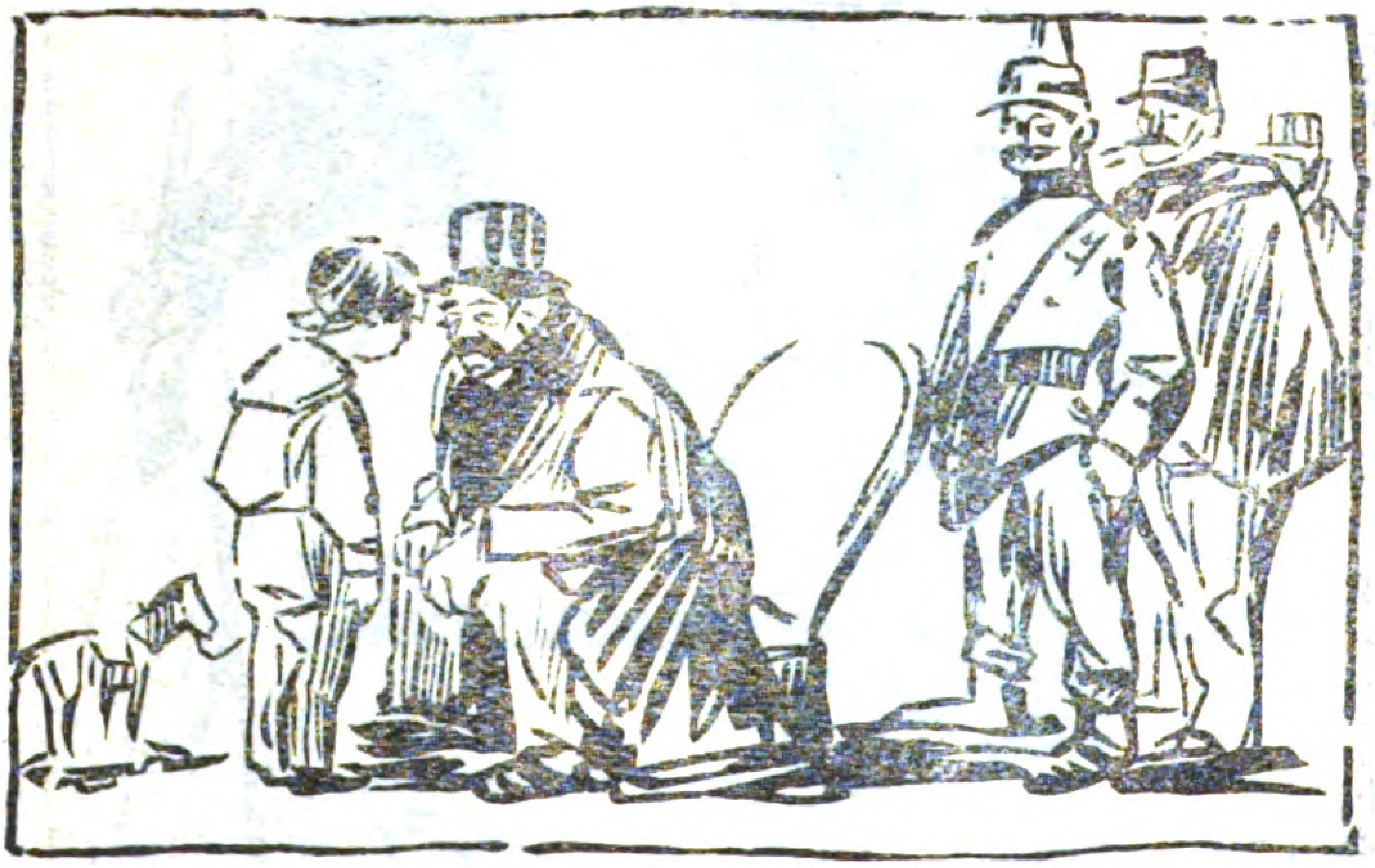
逸國民は實に皇帝並に海軍協會の意志に聽けること、且つ殖民地並に帝國の爲に、國費を惜まず、我と海上の霸權を爭はんと決意したるなり、

獨逸國民の意志既に此處に定まるとすれば、將來の狀は豫察し難からず、獨逸は全力を以て頻に帝國政略を採り世界の强國たらんとするに我英國は、帝國政略と世界的膨脹主義とに倦むの形あり、されば獨逸人が年老いて力なき大英國の手より、幾多の殖民地が遁れ出でんとしつ丶ある時に、彼等が取つて後嗣者たらんと望めるも强ち(あながち)訝くもあらず。

獨逸政府は此選擧の一大事件、即ち兩半球に於けるアングロサクソン人種には極めて興味ある此の大事件に際し、諸外國特に英米兩國の注意を避けん爲、勉めて國民の武力的狂熱を挑發せざらんとし、選擧の爭因たる大問題をも殆んど示さゞるに拘らず、二三の新聞紙並に小印刷物によつて、彼等人民が明瞭に獨逸國將來の大方針を知悉し居るを示す、之れ彼等が前例なき多人數と熱心とを以て投票し、而かもその結果が千

八百七十年佛國に對して宣戰したる當時の如き狂熱を以て歡迎せられし所以なり、皇帝すらも此一般に普及せる感情に動かされしの觀あり、夜間皇帝は宮殿に密集し歡呼せる人民に對して一場の挨拶をなせり、その語は實に我知らず心の奥底より迸れる如く、其處に彼の目的野心、並に獨逸の將來の政策が一閃の光を洩しぬ、即ち下の如く言へる所あり、「予は啻に今日に止らず此後とても亦此の如くなるを要す、あらゆる階級あらゆる信仰の人民凡て心を一にせば、吾人の進路を遮る何ものをも悉く乘り倒して過ぐるを得べしと、吾人は此最後の語よりして、必然に千九百年の海軍擴張案の冒頭に想ひ到らざるを得ず、その語は已に前に述べたる所なり、獨逸は明かに從來彼が爲せるよりは海上權の掌握に於て一層の努力を試むべく、新議會が大英國の海上權を脅すに必要なる巨額の出費を協賛すべきを望むなるべし。

我國人多くは獨逸が我と海上權を爭ひ得ざるを思ふ、曰く彼れ軍艦一雙を作らば、我はその間に二隻を造り得んと、そは過去に於てのみ然り、將來は危むべし。更に海上權の爭は第一着手に財政上の爭なるを記臆せよ而かも商工業の現勢より見て吾人は獨逸に優るを信ずる能はず、こは一見怪むものあらんも明かに統計の吾人に語るところなり、嗚呼吾大英國は此獨逸の選擧よりして一の教訓を了得するものあるべきか。



THE FRENCH INCOME TAX—THE NEW INQUISITION.
"If you don't tell us where your father hides his money, these gentlemen will take away your little wooden horse."
—*Figaro* (Paris).

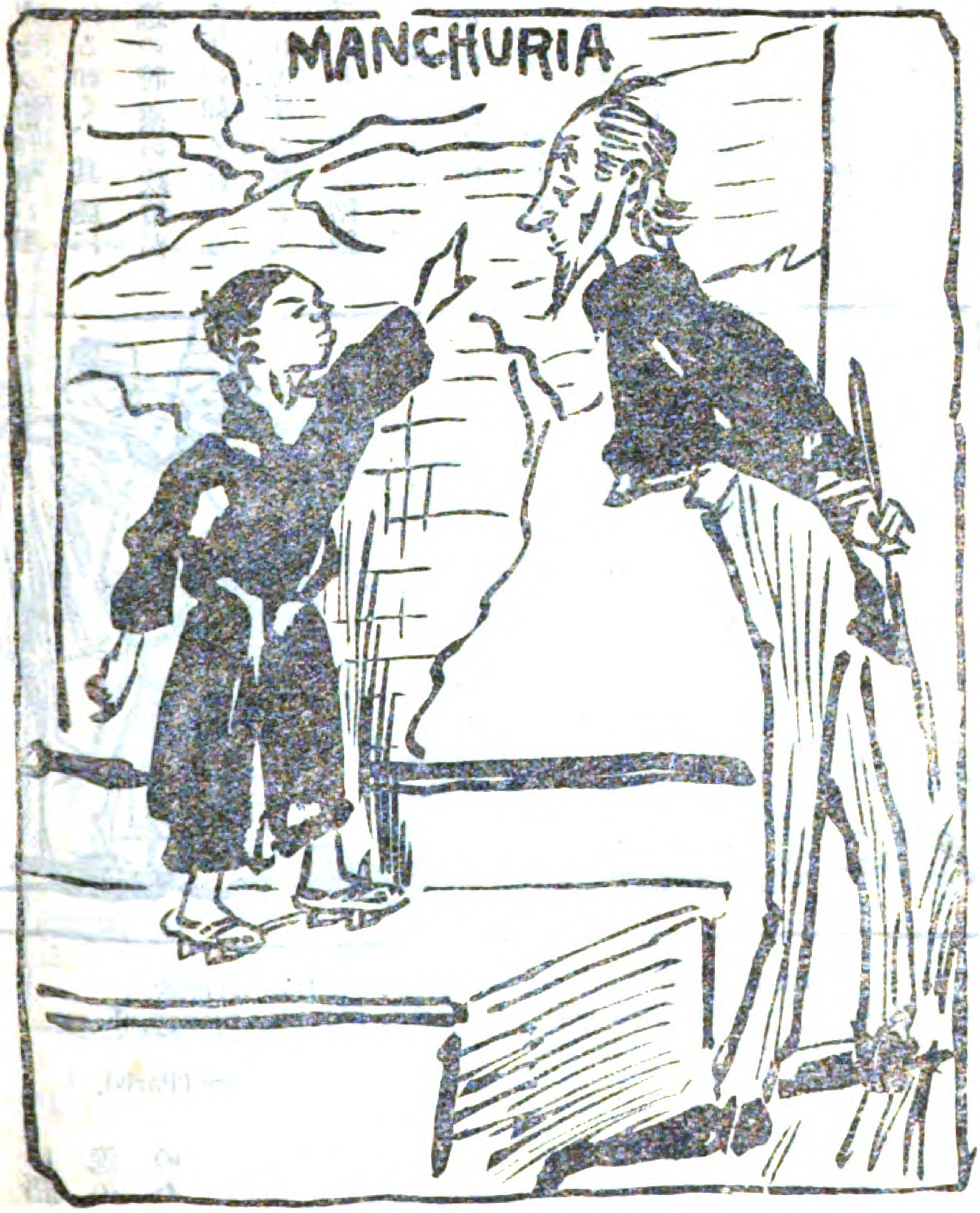
露國議會の消息

『エヒヨー』

露國新國會は三月五日、聖彼得堡タウリ宮に於て開催せられたり、其際議員の出席者四百餘名に達せり。祈禱終れば政府樞密院副議長は皇帝の詔勅を朗讀し、次でカデット黨の議員ゴロウヰン氏を議長に選擧せりと（カデットとは蓋し立憲共和黨に對する綽名にしてコンステヰチコーショネル、デモクラテン"のコ及デの二字を取合せて造り做せるものにして、國民には通り名なり）ゴロウヰン氏の議長に擧げられたるには、左黨及中央黨は喝采を以て

迎へ、右黨は沈默の內に承認したる也。其投票數は反對者百〇二に對する三百五十六の多數に上る。ゴロッキン氏は一場の演說を試み、予は何れの黨派にも倚る所多しと述べ更にいふ

國會に於て議員が各派に別るゝは洵に重大なる意味を有するものなり。而して國會は國民の安寧利福を計るに專らにして、次期國會の開設を待遠しく思ふ如くなる點に於て、各黨は爰に一致するもの也。新國會はかくして生じぬ。冀くば從前の專制政治と結合して憲法を編成し、社會に法律の制定を實現せしむるを力むべきなり。國民參政權の樹立以後は斷じて熄むことなく之を繼續し行かざるべからず云々。



UNCLE SAM—"You pesky little cuss! What do you want in my schools?"
THE LITTLE JAP—"I simply want to make a change or two in your map of the world." —*Humoristische Blaetter* (Vienna).

此演說は好意的の感動を與へたるものとして、右黨の側よりは多少の喝采を以て迎へられたり。

議長ゴロウキンは水曜日を以て皇帝より謁見を賜はりぬ。渠ゴロウキンの爲人に就て吾人の聞知せる所は實に下の如きもの也。

フェードル、アレキサンドロヴヰチ、ゴロウキンは露曆千八百六十七年十二月二十一日を以て生る、其先は古き貴族の家系に屬せり。チエザレヴヰチ、ニコライ黌の法律科を卒業したる後、千八百九十一年外交官の試驗に及第して二等外交官に補せらる、政府元老院が千八百九十三年に開かれたる時、渠は三年間ドミトロウスク州の貴族選出議員に選ばれ、同時に治安裁判官の任命を受けたり。千八百九十六年にはドミトロウスク州會の代

議士に推され、同じき年莫斯科州會の議員に選擧せらる。此職にある事凡九年、其間渠は孜々として其任に當れり。千九百四年六月八日莫斯科州行政官會議員に擧げられ、這回また更に國會議長の職に重任せらるゝに至れり。渠は精力絶倫と稱せられ、頗る思慮に富む。されば州會の卓絶せる統率者、州會及議會の創設者として、殊に能辯の譽高き人として世人の瞻仰する所たり。

印度に於ける英國

『エヒョー』

ベルリーネル、ノイエステ、ナハリヒテン紙はいふ。

頃者聞く所に據れば印度に於ける回々教徒の運動は、英國政府に取りて漸く危機の近づけるもの丶如し。此英政府に不利なる運動を惹起せしむるに至れるの罪、大半は懸りて英政府自身の處致宜しからざりし所に歸す。



A BAD SHOT.
MEMBER OF THE CENTER—"True, you've hit the mark, but not the Center." —*Humoristische Blaetter* (Vienna).

抑印度全土に於ける經濟問題の最も難關と稱せらるゝものは實に交通機關の問題に在り。廣袤凡そ北米合衆國の半に當り、而も其鐵道延長は漸く八分の一に過ぎざる印度領は、其人口に於て合衆國の三倍乃至四倍に垂んとす、恁は官報の言ふ所なれば勿論誇張の言にはあらざるべし。既にかくの如くなるを以て現存の鐵道線路は決して交通運輸の便益に於て間然する所なしとは言難かり。彼の印度が常に飢饉を患ひ、財界の不振を惹起し、輸出の困難、商業の停滯を招くもの決して故なきにあらざる也。

印度は又自國の軍事費を自己の双肩に負ひて立てるものなり。印度國務卿ジョン、モーレー卿は數週間以前に、下院に於て印度の現狀は節儉を行はざるべからざる旨を演説せりと然れども節儉

衛ふと否とに關せず印度人は依然として其拂ふ所を拂はざるべからず、而も印度軍隊費而已ならず、西藏に駐在せる若干の軍隊、又ソマーリ役に派遣せる各隊、及北京公使館付の護衛の軍隊の移動費は一に印度人の手より拂はざるべからざるものたり。而して其理由とする所は常に、かくの如く軍隊の設置及移動も、印度の安寧を堅うするに必須なるものなればなり、といふに在り。世人はかの父の生命を維持せんが爲にその子女を喰盡したるウゴリノーの譚を記するならむ、印度の軍隊の一ケ年に費す所は金貨にして千九百万磅、特別なる臨時費は此外たるは勿論也。印度は其父の爲に犧牲となれるかの譚の子女に外ならざる也。

又印度人の最も忍び難とする苦痛は英國の主權者より受くる輕視侮蔑の情なるべし。英國人は其教育の如何には毫も酌量する所なくして一概に印度人を以て一等品下れる人類の階級に屬せるものと見做せり。而も印度人には高等の教育を授くることを肯んせず、かるが故に彼等印度人は自由選擧に基く人民の參政權獲得の機の、未だ彌勒出世の曉を待つが如くなるに失望するも宜なり。



"It is too bad that President Roosevelt should not have subjected himself to more discipline."—Harriman.
—Macauley in the New York *World*.

而して世人が目して所謂弱冠の印度人と做す教養ある人士達が政權の門戶を叩いて入らむ事を請ひ、纔かに入る事を得るに過ぎず。往々にして說を爲すものあり、曰はく印度の現狀にして久しからんか、遂には愛耳蘭の轍を踏むに至ると遠からじと、又曰はく印度は速に政府を樹立し、自國の財貨は之を自國の用途に充て、饑饉、其他の災厄、苦痛及屈辱を一掃せざるべからず、と。

印度が人口二億八百万を有する中に、回々敎徒は五千七百万を以て數ふるに過ぎず。而も彼等回々敎徒は非基督敎的印度回々敎の團體を形造り、印度帝國回々敎徒の下に英帝國に忠勤を勵み、一方には又印度帝國に於ける回々敎徒の政治上の權利を現今の所より以上に獲得せ

んとを冀ふものなり。實に印度に於ける回々教徒は今日に於ては各般の革命運動とは全然同一のものにあらず、然れども如上の要求にして納れられずんば其結果は如何、吾人は須らく此に類似せる幾多の小なる股鑑を思ふべきなり。即ち回々教徒にして法律研究學生クョーレに集會を開ける時に於て、今春一辯士は絶叫して曰ふ。吾人、印度回々教徒は政治上土耳古國王と何等相關涉する所あらざる也と。此時集會者は袖を拂つて席を去りぬ、是當時シナイ、ハルピンセル事件に於て英國と事を構へたる教父に就ては、此辯士と全然見を異にせるを示せるものなり。仍是觀之親近喚起しつゝある異度回々教徒の運動は英國殖民帝國に取りては全然好望的のものにはあらざるべし。

エルンスト、ヘッケル

『エヒョー』

ベルリーネル、モルゲンポスト紙上に掲載せられたる所を抄出す。

かの有名無實なる編年記に於て一般の進境、極めて興趣饒多なるべき事こそ起りたれ。若し然らざりせば爵位、肩書及之に類するものに何等の意義も附せられ得ざるならむ。

エルンスト、ヘッケルは其學位受授五十年祭に於て、私會より閣下の尊稱を以て擬せられたり。是れ眞面目なる學界に於ける事象としては當然の事に屬す。渠がエナ大學に在るは該大學を重からしむる所以にして、ハイデルベルヒに於けるクノー、フヰッシヤーの如き位地を占むるものなり。現ザクセン、ワイマルの大公爵は、先考が各般の自由を與へて、其業を大成せしめたる此碩學に名譽ある賜物を給ひぬ。

エルンスト、ヘッケルの何人なるかは獨逸國に於ては層狗走卒の徒とも、雖之を知る。又彼の名著「自然界の創造史」を讀みたる事はなくとも、通俗に讀まるゝ「世界の謎語」を有せざる者は恐らくなかむ。渠は國教の基督教より獨立して別に其學を以て一大教義を建設せんと欲する人なり。而して其確乎不撓なる獨立心を以て、自然科學に志篤き幾多の人士に與へたる感化力は極めて偉大なるものなりき。渠は爲人孤峭にして、かくの如きは獨逸自然科學界にて他に比なし。

渠はポストダムノ出にして、伯林に滯在の頃はヨハン、ミユラーの師たりき。而も伯林に於ては遂に大學教授たる事を得ざりき。此度の事と共に併せて双異觀と爲すべし。渠ハエナに於ても物質上の要求は極めて薄きに甘んじ、嘗て學界の先達と稱せらるゝ人々に接近せしことなし逆境數十年、今尚ほ其境地より脫せざるも洵に故あるかな。世人はかのヘッケルの科學上の敵手なるキルヒョーの運命に思到るならむ。渠はベルリンに於て大學の助教授に進みしが、普魯西政府の有司より其職を褫はれ、醫士會よりは酷しく迫害せられ、ラウメルより招還せられたる迄はヴルツブルヒに逍はされたりしなり。

舊慣、迷信、俗習に抗するものゝ苦闘は何れの地何れの時たるを問はす皆其揆を一にす、而も此間にあつて克く難に耐へ其業を完うするに至つては眞に其人の名は實の賓たるに止らざるなり。



明治故人論（一）

はしがき

我社茲に「明治故人評論」なる題目の下に、明治年間に故人となりし偉人、殊に明治の文化に功勞ありし偉人に對する現代諸名士の評論を連載せんと欲す。次に掲ぐる所の「高山樗牛」は其第一回として蒐集せる者なるが、發案の時、已に編輯〆切の間際に近く、成く諸名士に依囑すること能はず、又依囑したる人士の中にも時日切迫の廉を以て斷られたる人少からず。僅かに次に掲ぐる丈けの材料を得たるに過ぎず。我等は早急の間に此等の材料を寄與せられたる諸氏の非常なる好意を謝すると共に、餘りに短日月の間に此事を企てたる我等の無謀を耻ぢざる能はず。然れども高山博士に就いては尙金子筑水氏、小山鼎浦氏、齋藤信策氏、畔柳芥舟氏等の寄稿あるべければ、そは一葉女史に對する評論と共に次號の誌上を飾るべし。一葉女史については充分の時日もあれば、創作家、評論家の兩方面を通じて最も廣くこれが評論を集むべく、已に承諾を與へられしは、島村抱月氏、上田敏氏、德田秋聲氏、登張竹風氏、小栗風葉氏、大塚保治氏、佐々醒雪氏、沼波瓊音氏、佐藤紅綠氏、大塚楠緒子氏等の諸氏にして其他にも續々依賴中なれば、發表の上は、此不朽の女作家の光彩をして益々發揚せしむるに足るべし。又引續き、福澤翁、紅葉山人、子規居士、綠雨氏等に對する評論もつぎ／＼連載せらるべし。乞ふ、鶴首して如何に趣味饒かなる評論の續出すべきかを待て。（編者しるす）

高山樗牛

△高山君に就て

大町桂月

高山君は、明治の一大奇才也。我友人と云はゞ、云ふものゝ、學才、文才、世才、識見等あらゆる點に於て、鈍物なる余に取りては、友とするには、あまり、えらすぐる也。唯碁だけは、ほゞ對等でありしが、鎌倉に移りてより後は、餘程上達したとの事なれば、それも、かなはなくなり居りしかも知れず。

高山君の事業は、收まつて、樗牛全集にあり。同書を見れば、高山君の奇才なる所以がわかるべければ、余は茲に高山君全體に關する事は說かず。唯、余が直

接高山君に接して、感じたることを記して、高山君を識らざる人の參考の一端に供せむと思ふ也。

高山君は第二高等學校よりし、余は第一高等學校よりし、高山君は哲學科に在り、余は國文科に在りて、相識るに由なかりしが、帝國大學起るに及びて、はじめて、相識りたる也。高山君は、之より前、『瀧口入道』を作り、讀賣新聞の懸賞に當選して、其名文壇に知れ居りしが、帝國文學起るに及びて、其名益々高くなれり。帝國文學は實に高山君の手になりたりといふも可也。庶務の方面は、岡田正美君が擔當し、雜報の如きは、高山君一人にて書きたり。尤も第一號の雜報は、島華水君の文も少しありたり。委員としては、高山君、岡田君、島君、狩野直喜君、上田敏君、鹽井雨江君ありしと覺ゆ。その委員が三號までつゞきて、第四號目には、委員の改選ありて、その時には、岡田正美、藤岡勝二の二君が庶務委員、畔柳芥舟、上田敏、佐々醒雪、武島羽衣、及び余の五人が、編輯委員となりたり。高山君は、うつりて太陽に時評を草し、堂々たる論陣を張れり。されば、帝國文學は、第四號以下は、われら四五人にて、雜報を書きたるが、その前の高山君一人にて書きし時に比ぶるに、大に劣ることあるも、毫もまさりし所はあらず。高山君の如きは、學生の時より、學生にあらずして、名士也。坪內、福地諸先輩と共に、演劇改良會を組織したることもありき。君のみは、學生の中にて、嶄然として、ひとり頭角をあらはせり。

學才、文才、世才、あらゆる才に長じたりしこと、高山君の前に、高山君無く、高山君の後に、高山君無しと云ふて可也。君は傲慢なりしとは、よく人の噂せし所なるが、余は、君の傲慢に對して、大に同情を表するもの也。君は、幼時より學問もすぐれたり、才智もすぐれたり、腕力もすぐれたり、神童といはれしかは知らざるが、神童ならずとも、秀才也、何をしても人にひけを取らず、お山の大將ともなれば、餓鬼大將ともなり、ストライキの巨魁ともなり、一たび小說を草すれば、忽ち當選し、學課は勉强せずとも、特待生となる身の上也。世人一般が馬鹿げて見ゆるは、當然の

人情也。譬ふれば、山の上にありて見下すが如し、殊に春秋わづかに三十二にして死したれば、向上の一心、頭高からざるを得ず。壽あらしめば、山をのぼりつくして、頭も自然にさがりしなるべけれど、惜むらくは、早世して、年齢は、氣鋭才敏の高山君をして、謙譲なるを許さゞりき。進歩の途にある氣鋭の靑年が、態度の傲慢に見ゆるは、その進歩の爲めに、却つて喜ぶべき也。然かも、高山君は、空威張にあらず、實際、傲慢なる態度を爲すだけの力量ありし也。されば、君が文壇に於ける態度も、君の活氣が溢れて、將軍馬に跨りて顧眄するが如し。弱武者を相手にせず、逍遥とか、鷗外とか云ふ先輩の最強者に鋒をむけたり。鷗外、逍遥、筆を收めて後は、評論壇は、高山君のひとり舞臺也。實に壯觀也。曾て帝國文學の編輯所が、本郷臺町の下宿屋にありけるころ、一夜、相並びて臥し、種々の事話しけるついでに、余、君を戒めて曰く、君の態度、あまり高慢に見ゆ。恐らくは、處世上の得策にあらざるべしと。君曰く、えらがつて、大きな事言へば、從つてそれに伴ふ力量を作らざるを得ず、勉強せざるを得ず、余の進歩上、その方がよきなりと。この言、一理あり。げに、其言の如く、君は大言を吐けども、空威張りにあらず、實際それだけの力量ありし也、實力をつけんことを力めたりし也。この心掛あるを以て、君は絶えず進歩の途にありし也。唯、天、之に年を假せざりしを惜むべきのみ。

昻然たる態度は、これ君の氣象に伴へる、自然の結果と見るべし、これをかれこれ言ふは、言ふ者の度量がせまき也、君にありては、毫も痛痒を感ぜざる所也。否、罵られて、却つて君の高さを見る也。

親しく交はりたりといふにあらざれば、獨斷かも知らざれど、思ふに、君は感情の人也。されど、感情の點數が多しといふだけにて、意志も、理性も、六十點以上はありしやう也。感情の人とても、よわ〳〵しからず、勝氣の人にて、よろづ、男性的也。趣味もひろかりしやう也。哲學、宗教、文學、教育、政治その他運動遊戯に至るまでも、それ〳〵趣味を有して、文

明批評家として、最も適當なる人也。君は、幼にしては、いつも餓鬼大將なりしとの事なるが、長じては、論壇の大將也。君の一生は、痛快なりし哉。

余や、愚鈍にして學問なく、識見なし、才は、あらゆる方面に於て、すべて缺けたり。君とは、全く反對の意氣地なし也。君を友と呼ばむは、勿體なき心地す。茲に直接に君に接して感じたりしあらましを記す。後日、閑を得て、樗牛全集を批評して見たき考也。

△樗牛に就て

田山花袋

樗牛に就いて自分は餘り深く知つて居る事が無い、交際もなかつたので、手紙を一度往復した事も無い位だ。同じく博文館の編輯室に出て居たから、毎日顔は合せて居たのだが、恰んど話をした事すら無い、全體樗牛の性格として餘り人に打解けなかつたと思ふ、自分より目下の者だとか、反對側の者だとかに對しては、彼より進んで言語を交へるやうな事は爲なかつた是は一面に樗牛の理想が高かつた爲め、人に下らない氣風――傲然（フラウド）な所があつたからなのであらう。

其樣な風に只顔を合せて居た丈けに止るので、自分が樗牛に就いて曰ふ事は彼の著書を讀んで、斯く感ずると云ふに過ぎぬのだけれども自分は樗牛の著書は「我袖の記」から讀んで居るので、彼の著書に對しては愛讀者の一人であつたと思ふ、彼が仙臺の高等中學に居る頃、地方新聞に掲載して居たウエルテルの飜譯なども讀んだ、樗牛の著書は大概讀まぬものは無い。

樗牛の作品は初めからセンチメンタルであつた、到處に彼の多感多情な、而して清く高い理想に憧憬れて居たのがあり／＼と見える。併し一面に斯う清い鋭い感情を抱んで居たやうだが、只多感多情の詩人的に薄志弱行では無かつた、非常に強い實行的な所もあつたと思ふ。要するに樗牛の性格は、彼の頃の青年の思想を代表したものであつた、然も是の、時代の代表的な物の中で、最も卓然たるものであつた。

ツルゲネッフのヴァジン、ソイルの主人公のネズダノフの性格が樗牛に能く似て居る、ネズダノフは一面に非常に高い理想に憧憬れて居ると共に、他の一面は現前の事實から全く離れて了ふ事は出來ない、多感多情の狂熱と、冷かな理性とが常に胸の中にこゞらかつて、衝着して、煩悶して居るといふのだ。樗牛の性格も亦た一面非常なアイデアリストであつたと共に一面はリアリストであつた、平民的であると共に又た貴族的の血を交へて居るなど如何してもネズダノフ的であつたと思ふ。

嘗つて樗牛がニイチエを唱ひて居た時分、鷗外が樗牛を評した言葉がある、何でも樗牛のニイチエは獨逸のニイチエよりは非常に弱い、樗牛のニイチエには翼もなく牙もないが、獨逸のニイチエには翼もある、牙もある、もつと强いニイチエだと云つたやうに覺えて居る。が、是の弱いニイチエが矢張樗牛の性格なのであつたと思ふ。

非常に多忙なので談話で御免を蒙りますが、纏つた事も申上ず甚だ失禮でした。

△故高山樗牛君

醍　雪

學者としての高山博士は、世間に紹介する人も多からう、よし紹介せずとも、樗牛全集が、立派に傳へてゐる、今更僕等の縷述する必要はなからう。だから、僕は唯、私交上から見た、高山君の半面を、僕の感じた儘、卒直に露骨に話して見よう。

僕は勿論、故人の親友ではない、從つて其の皮相しか知らない。だが、若し僕と同じ樣に、境遇上生前の氏に交際する運命をもつた人があつたならば、恐くは、十人中の八九人まで、僕と同樣の感想を懷くだらうと思ふから、其の感想を其儘に、寧ろ無遠慮に述べて見たら、或は却つて、氏が眞面目を發揮する一助となりはすまいか。僕は、屢々、氏の生前にも、今こゝに話さうと思ふ通りの感想を、頗る露骨に故人に語つたこ

とがあるのだから、決して口のない人の惡口をいふのではない、否な決して、故人の德を煩す樣な感想を懷いたのではない。唯一種の性癖のあつた人であると思つたに止つてゐる。

有體にいふと、若し僕が晩年の高山君、卽ち鎌倉に閑居せられた時代の高山君と半日の閑談をする機會がなかつたならば、僕には殆んど、故人に對するなつかしい記憶も追懷もなかつたであらう、僕は恐く樗牛會の發起人をも辭したのであらう。

三十五年の初春のことであつた、僕は六年振で東京に歸つて、例の「文藝界」の創刊に着手してゐた頃て、逗子の方に訪問する人があつて、久し振で樗牛を訪問した。勿論それまでにも東京へ出れば、何時も訪問する例ではあつたが、殊更に慕かしいとか戀しいとか思ふ譯でもない、唯普通一遍の交友といふに過ぎなかつたが、折節し、故人の閑居は友人の來訪も稀であつたからであらうが、いかにもなつかしげに出迎へられた其の樣子からが、旣に別れて二年以上になる、彼の氣の勝つた、人を威壓する樣な昔の高山君とは、全く見違へる樣で、冷しく力のある譬へば秋の日の風の樣な、我が先輩に會ふことゝ豫想してゐた身には、意想外にも、溫かな春風のそよ／＼とする親友の室に入るのかと一度は、寧ろ驚いた位であつた。晝にも未だ程遠い時刻であつたが、そこはかとない雜談に夕暮近くなるのも知らなかつた、雜誌の經營談や、東京の文士氣質や、はては當時の故人が主張の一端をもほのめかされたが、二年前の樗牛君の樣に、ひたすらに指圖をするのではない、唯同情ある友人として、自分の經驗談に耽けられたのであつた。其後は、僕の樗牛君に對する感想は全然一變した。自分の執つてゐた業務の關係もあるが、而來は頻繁に手紙も往復した。昔ならば、其のプライドを傷けるだらうと思はれる樣な內情をも書いておこされた。此の時からである、自分が故人の友人に數へられることが出來ると思つたのは。

かゝる無意味な樣な事實が、僕の感想を一變されたといふのには、其の以前を說かねばならぬ。

僕と故人とは、同じ年に大學に入つて、同じ年に卒業した。學科こそ違つてゐたが、ケーベル博士の講釋も一所に聞いたものだ。帝國文學の第二年目の編輯には、三ヶ月程も一所に從事してゐた、こんな關係があるにも拘らず、在學中に一所に酒を飮んだことは、何等かの大會の外には一度もなかつた。唯一度、何かの用向で僕の下宿を訪問せられたことがある。折しも鷗外先生と理想論か何かの論戰中で、「今鷗外君を訪問したが、論戰中は親談することを避けようといはれて來た。論戰中は敵であるから、同時に友人であるといふことは出來ないと鷗外君がいはれたが、成る程、それも一理ある。」といふ樣な風の話があつた。實際、其頃の樗牛君の筆鋒といふものは、隨分鋭いもので、同輩に向はうものなら、稚氣滿楮とか、見るに堪へずとか、思ひ切つて言ひ放つ、稚ななじみの某君すら大に憤らせたといふ話がある位だから、先輩にしても、矢表に立つてゐる時は、懇談が避けたい樣な心持もしたらうと思はれる。丁度其の時に、樗牛君と入り違ひに綠雨君が來られて、「今高山が鷗外君の所へ來て、今は僕と君は敵同志だからといつて、談もせずに返されたのを見て來た」といつて、至極愉快氣に話された。蓋し綠雨君などといふのは、由來高山君とは、互に同情し難い特質があつた樣だ。

僕の交友の範圍が異つてゐる。加之に僕も何やら彼やら評論めいたものを書いてゐて、度々、淺薄や矛盾の評語を頂戴してゐた。何時であつたか、樗牛君が僕の連俳史を評して、何者にも歷史の價値はある、連俳などでゝ眞面目に調べるのは感心だといふ風の評語が太陽に表れた時に、「高山は總花主義を始めた」といつたのが、矢張り綠雨君であつた。そんなこんなで、つひ〳〵訪問の機會もなくて、既に學校を卒業して了つたのであつた。

二十九年の八月の末、丁度僕が仙臺の高等學校へ赴任することが決定した頃のことであつた。一日故乙羽君が來て、高山君の送別會を向島で開くから來てくれといふことで、それが又仙臺へ赴任するのだと聞いた。

では、僕も同じ所へ行くのだと言つたので、終に二人ともに送られる人となつた。これが抑高山君と僕とを交際せしむる因縁であつて、數日後に、上野で送別會があつた時にも、僕と高山君と二人がお客であつた。其席上で、確か上田博士であつたか。あの鬚むしやの佐々が京都生れで、この瀟洒たる好男子が、東北は東夷の後胤であるとは面白い對照だといふ笑話があつた、實際寫眞で見るよりも更に立派な男であつたので、必しも僕の反照を假るの要はなかつたのだ。

送別會場で、東北線が大破損で汽車不通といふ談を聞いた。明朝の一番汽車で二人は同行を約してゐたのだ僕は少し躊躇したが、樗牛君は何でも行かうといふ、否な寧ろ僕が行くから、君も從いて來いといふ風だ。勿論僕は仙臺を知らない、學校も知らない、——高山君は仙臺出身である、唯々としてお供をすることにした。宇都宮まで行つたが、汽車は何時通ずるとも豫知し難い。雨は彌盛に降る。一日宇都宮に籠城して、翌日は黒磯といふ所から、人足を雇つて、荷物を背負はせて、とぼ／＼と鐵道線路を歩いたものだ。滞在、出發、荷物の世話から人足から、かうしよう、あゝしようといふ調子が、總て命令的で、毫も相談するのではない。——斷つて置くが、僕は一體、故人より年齢は下だが、世故には寧ろ長けた積で、高等學校時代から雪老と稱せられてゐたのだ。然るに、一言も何事にも容喙させない、否な、何事にも僕が歩く通りに從いて來れば良いといふ有様だ。異常な自信の影は、こゝにも顯はれてゐたのだ。——だが、僕は毫も不平はなかつた。實は、氏の評論の筆を見て、一圖に意地の惡い人だと思つてゐたのだから、唯我儘なだけだなと思つて、寧ろ滿足したのであつた。

宿屋はなし、足は疲れる。公用だなどと怒鳴つて見たが、實際宿屋といふ宿屋は、段梯子の下まで人が泊つてゐるのだから。仕方もない。西那須野村の端れの、馬方の腰掛け茶屋で、やつと泊めて貰つた。飫の丸煮に腹を作つて、蚊張なしに加ふるに虱類の患難を倶にすると、流石に何となく友達らしい感じも起る、かく

て辛くも青葉城下に到着して、陸奥ホテルの二階で、大跌居の麥酒の醉に、思はず白狀したのがかうだ。「僕は一生、君とかうして談が出來ると思はなかつた、同じ學校には來ても、到底性の合はない人だと思つてゐた」といふと。樗牛君が、「僕は實際、大學に入つて一年間程は、全く新しい友達がなかつた」といはれたことを、今も確に記憶してゐる。

而來、朝に晩に交通した。高山君は當時獨身で同じ獨身の敎授と二人で家を一軒借りて、氣樂な世帶であつた。始終、押かけて行つては御馳走になつたものだ。だが、未だ其の我儘な所が、何となく癪にさわつて、時折りは、何故さう澄すだらうと思つたこともあつた。

久しからずして學校騷動が持ち上つた僕は赴任早々チブスに罹る、從前の學校の樣子も知らず、敎授間にも多少闘討があつて、新米の我々は、何を騷いてゐるのか、全く筋道もわからぬ。ところで、高山君の所へ驅け附けると、かうだ、「先づ見て居給へ、知らなけれやならぬ幕になつたら知らしてやる。」

かういふ譯で、僕は騷動の終まで、全く門外漢であつた。或はその方が、僕に取つては利益であつたかも知れない、だが、相も變らず、人を子供扱にすると思はずにはゐられなかつた。其の揚句に今の澤柳次官が校長として赴任せられて、辭職する人は辭した、理由を知らぬ門外漢は多く留まつた。それから一月程經つて僕は故人に誘はれて、土曜日の午後に散步に出かけた。所が、例の流義で、何も言はずにずん／＼學校へ入つて行く、何か用事があるのだらうと思つて、僕も從つて行つた。敎官室へ行くと、待ち設けてゐた事務員が、校長室へ來て吳れよといつたが、僕は何の事だか知らんと思つてゐると、實は僕には用がないので、兼て高山君が差出してゐた辭表に就いて、校長から話があつたので、止を得ず僕は差控へてゐた。やがて氏は校長室から出て來て、僕は彌々東京へ歸ることにした、これから飮みに行かうといふ始末だ。一時間前に話して吳れゝは、こんな馬鹿な顏はしないのだにと、

つく〴〵感じた。事務員には、其間に、貴君はどうなされたかと聞かれる、何だか、僕が一人で嘲弄せられた樣な心持もした。確に故人には惡意がなかつたので、唯十分か二十分待つてゐて貰つて、一所に陸奥園（料理屋）へ行かうといふ考に外ならぬのだつた。

聞いて見れば其の通だが、何となく業腹だ。其時に、今度僕の行くところで、百科全書の樣な者が出來るが、一二冊引受けないかといふ談があつた。後から考へれば、博文館の百科全書のことだか、僕も何處へ行くのだと聞くのも厭で、聞いても或は「東京さ」といふ位のことだつたかも知れぬ。業腹まぎれに、僕が他の本屋に一二の約束があるのを言ひ立てゝ斷つて了つた。其頃は、樗牛君は一軒立の新しい借家に居たので、僕が其の跡へ引越して、不用な家具と愛犬とを讓つて貰つた。それでも、出立の三四日前までは、彌々博文館へ入るといふ談はなかつたのである。僕も妙に意地張つて、聞きもしなかつた。

其の犬に就いても、一つ譚がある。僕や老母は、元來、犬や猫は好でない、だから、牛肉に飽かせて育てるといふことも出來難いし、旁、誰かに與つて貰ひ度いと言つたのを、どうでも可いからといふことなので、育てゝゐる、略二ヶ月位も經つた。東京に着いてからも、樗牛君は、とかく其犬の夢を見て仕方がないといふ談を聞いたので、虐遇してゐると思はれては惡いとも思ふし、且つは其頃仙臺にゐた僕の弟が、又非常の犬好きで、毎日伴れて歩く、僕等も好でないと云ふ條段々可愛くもなるといふ時に、突然、何かの序があつた同僚の所へ、僕の所にゐる、犬を鐵道便で送つてくれと言つて來た、但し僕に對しては一言の挨拶もないのだ。老母は大に憤慨して、決して返すなといふ、といふ樣な騷もあつた。それのみでない、この犬を貰つて來た時にも、隨分我儘な談があるので、例の某教授と一所に住んでゐた頃で、都合によつて轉宅するといふ話になつて、翌日は轉宅するといふ前の土曜日に、樗牛君は突然溫泉行を企てた。跡の混雜は勿論、跡に殘つた某氏の負擔である。その歸途少からぬ金を拂つ

て、溫泉場から持つて歸つたのが、その愛犬であるのだ。

勿論、以上は、我儘だと思ふ目から見たことで、元來が、當時同居してゐた人は苦勞性の方であるから、轉宅の騷ぎなどは良い加減に棄てゝ置いて、一所に溫泉へでも出掛けよう位に思つたのであらう、だが、行かうと言はなければ、自分丈けは思ふようにして、出掛けてしまふといふのが、氏の性分だ。僕に對する犬一件は、固より迷惑がつてゐるから、同じことなら、自分の所へ呼び寄せようと思つてせられたことではあらう。だが、何もかも獨斷で、人の思はくを一切考へないことの多かつたことは、當時の友人等の、悉く認めてゐる所であつた。

現に東京へ出立せられるといふ送別會に、「君はどうも我儘だ」と、醉餘に放言したことがある、故人は少しも怒らなかつた。どうしたら人づきがよくなるだらうと反問せられたから、君のようなのは蕩樂でもして、すれつからしどもに揉まれて來る外はなからうと云つたことだつた。

蕩樂の序に、樗牛君が仙臺出發後には、彼の地の新聞が艶聞を傳へたが、これは全く虛報でなくば、唯女の方の片戀である。今も樗牛君の名の爲にも泣く女が仙臺にはゐるが、君の品行の方正であつたことは、何人も疑はない所である。

仙臺で別れてから三年間、僕は年毎に東京へ來て、來た毎に君を訪れた、君は年毎に社交に巧な人となつてゐた、だが、古の性癖が全く跡を絕つたのは、僕の豫言したようにすれからつしに揉まれた結果ではなくて、其の反省修養の結果であつたらうが、又全く病魔の力がないではなかつたことは、思ひ出づるごとに淚の種である。嗚呼、僕が久しく自ら牆壁を築いてゐた目の低さは、今いかに悔ゆるも及ぶべきではない。僕は自ら誡めて、再び千載の一遇を失はないことを期せうと思つてゐる。

だが、試に見給へ、樗牛君に對して、最も深い同情のあるのは、生前に親交のなかつた人か、或は其の晩

年に、最も深く交際した人であるではないか。

△高山博士の言行

沼波瓊音

僕は高山博士をよくは識らぬ。顔を見たのは帝國文學會でと大學の圖書館でと都合二度だけ。話をしたヿは一度も無い。又博士の作物も僅しか讀んで居ない。併し博士の言行に就てチョイ〳〵人から聞いたヿはある。兎に角この僅な知識の範圍で博士の面目の一斑を次に記さう。

「瀧口入道」は喧しく云はれたものだが、僕は更に感服しない、實は終まで讀むのに少なからぬ忍耐力を要した。博士自らも得意では無かつたさうだ。

餘り人は口の端に上せないやうだが、博文館で世界歷史譚と云ふものを出した時其第一編に博士が「釋迦」と云ふのを書いた。これは博士大得意の文章であるさうだが、成程文章として大に讀める。

「月夜の美感」のやうなものは僕は其價を認め得ぬ。あア云直覺で知り得るヿを研究的に說明するヿは詰らぬヿだ。「美的生活論」、「淸盛の論」「日蓮の論」の如きには實に博士の面目がよく現はれて居て、論旨も痛快だ。

博士は語學の力が非常にあつて旣に中學時代にヴェルテルを評したヿがある。高等學校豫科に居た頃は都下の諸雜誌に投稿して坪內博士にも知られて居た。驚くべきは、或年の夏休み中に佛語を獨習して、悉皆覺え込んで仕舞つたヿである。

博士は數學が好きで高等學校時代にはいつも滿點で、「僕は工科をやらうか知ら」など〻云て居た。

文壇に上つてからも一體の遣口が竹を割るやうで、些の澁滯を見ない。紫式部の修辭を調べる必要が起つた時博士は源氏物語を實に二日で讀んだ。勿論これは大般若の轉讀のやうなヿを遣らかしたのだらうが、兎に角それて式部の修辭の要を捕へ得たのは豪いては無いか。彼の美術史を書く時に法隆寺に行つたが、丁度

其時彼地に居られた藤岡博士の話によると、高山博士は寺の内を足早にズン／＼通つた丈位のとであつたさうな。して見るとあの博士論文も「源氏二日讀」の流儀て出來上つた者と見える。この點を捕へて博士はあまり本を讀まなかつた物を深くは知らなかつたと嘲る人があるやうだか、それは嘲るに及ばぬ博士は博士にはなつたが學者ては無い全く詩人であつたのだ、詩人たる所に博士の生命があつたのだ、詩人が本を讀まないのは疵にはならぬ、事物の形體を知らぬのは疵にはならぬ。

博士は尾崎紅葉を賞して居た。又山田美妙を賞して且つ其境遇に尠からぬ同情を寄せて居た。

博士が洋行させられるとになつた時には大に愉快がつて會ふ人毎に此事を物語つて居た。併し博士になつた時には左して嬉しくも思はなかつたらしい。

洋行は出來ず、病は篤くなり、空しく床に横はつてからは、「あゝ此頃は誰も彼も疎くなつてしまつた、友人が減つた」と口癖のやうに呟いて居た。

博士は總べての天才が然る如く積極的て、自分の志したとは飽くまて遣り通すと云猛烈なる勢が常にあつた。だから清盛や日蓮が博士の氣に入つたのである。

博士が或知名の人々を罵つた語を聞いた。實はそれを書かうと思つたが、どうも罵られた人々に氣の毒だから止めにした。

△高山樗牛

長谷川天溪

肅啓、故高山樗牛君に關する評論を物せよとの御言葉は、餘程以前に承り、其の節期日までには必ず何か認め申すべしと堅く御約束申しながら、今更違背仕り、何とも辯解の辭無之候、これは多忙なりしとも一の理由にては候へども、眞の理由と申すは、如何なる事を書き綴りて宜しきや、大に閉口致し候事にて候。固より御申越の意味は、明瞭にては候へども、其の御求に應ずるには、如何にして可なるべき乎、これが小生の

惑ひし所にて、其の爲に空に時間を費し候と、これ期日を失し申候有力なる原因にて御座候。さりとて只今となりても、意義深く、趣味ある事柄を述べ難く候。これ敢て述べざるに非ず、全く述ぶると能はざる次第にて御座候。

御存知の通り、故高山博士と小生とは、お互に顔を知ると言ふ點より見て、比較的に長く有之候ひき。小生は明治三十年七月を以つて博文館編輯局に於いて飯に有り付き申し、其の節故高山君は『太陽』の主筆として、敏腕を振はれ居り、爾來同君が、不治の病に罹られしまて、恒に机を列へて、幾多の指導を受け申し候へば、年月の割合に多く接近致し申し候。序に申上候。姉崎博士の顏を知りたるは、なほ此の以前にて候。これは何の關係もなき事の樣にて候へども、故高山博士と姉崎博士とが、餘程早くより親交を結び居られ候點より看て、此の事は小生一個人にとりて何となく妙に感ぜられ候。かく申す次第は小生がケーベル先生のお世話になり居りし當時は、高山姉崎兩博士共に、大學々生にて、折ふしにケーベル先生を尋ねられしが、かけ違ひて小生は故博士に一回も見ゆるの機なく、姉崎博士には、之れに反して屢ば接近するを得申し候。而して博文館に傭はれて後は、故博士が此の世を去らるゝまで、單に事務上より見ても、非常に密なる關係を保ち申し候。

小生は故博士に就きて知る所、多きだけに何から申して宜しきや、殆ど窮し申し候。元より同君の思想とか理想とかに就きては、小生如きの容喙する資格無之候へども、そんな六敷き方面を去りたる故樗牛君に關しては、餘り多く知るだけ、其れだけ纏めて申し上ぐると困難にて候。

たゞ一言申上たき點有之候。世間にては、故高山は傲慢なる人なりとの批評、今なほ傳へらるゝ樣にて候。こは小生が飽く迄も、取り消さむと欲する所にて候。故博士は決して傲慢の人にては候はず。其の倨傲の人と見へたるは、見識あると共に、身體其の物に一種の品位ありたるが故にて候。小生の見たる所に依れば、

故博士の風采は、決して平民的にては無く、所謂侍風の品位を備へ居られ候。たとひ如何なる粗服を纏ひたるにもせよ、一種言ふべからざる威嚴を有したるは同博士にて候。こは殊更に作りたる態度にては候はず、生れつき備はりたる樣子にて、男性的と言ふ概念は、立派に表はれ居り候。所謂町家の娘が追慕する役者的風采、又は現時の或る種の女學生が理想とする詩人的風采は、秋毫も同君の上には覓むべからず候ひき。

此の武士的風采ありしために、一寸近づき難きやうにも思ひし人も有之べしと存じ候へども、一たび接近して見れば、極めて平民的、書生的の人にて候ひき。

其の見識の高かりしは、同君をして不朽の名を遺さしめたる所以なるべしと存じ候。其の學問が深かりしか否かは別問題にて候。否、見識の高下は學問の高下に依るものにては之れなかるべく、而して小生は其の例を故高山君に於いて實見いたし候。學問の點より言はゞ、故博士よりも多くを積みし人々、決して僅少ならざりしと存じ候へども、其の獲たる學問を、故博士ほどに活かして使ひたる人、果して幾人か有之候や、恐らく其の以上に出でたる人なかるべしと存じ候。これ畢竟見識の高下强弱に由るものと申すに非んば、他に解釋の道なかるべしと存じ候。

故博士は見識ありしだけに、自我的精神は中々に强烈にて候ひき。小生をして言はしむれば、故博士はエゴィスチックの人にあらずして、エゴチスチックの人にて候ひき。其の晩年に於いて、吾れはエゴイストなりとの宣言有之候ひしかど、小生は寧ろ、彼れはエゴチストなりきと言ふが至當なりと存じ候。

同君が日本主義を主張せられし迄は、蘊蓄時代とも稱すべく、或る意味にては沒我的に研究もし、議論も立てられたるにて候。而して日本主義を主張するに至つて、始めてエゴチスチック精神現れ申し候。されど其の精神は、なほ日本といふ一範圍の中に擴がり居り候。その眞に本來の面目を發揮したるは、ニイチエの影響を受け（むしろ刺激を受け）日蓮に超俗の性格を認められたる時代にて候ひき。

されど同君の思想は決して一箇所に停留したると無之候。日蓮上人に偉大なる人格を見、『超人』にあこがれたるは、軈て一進歩すべき一階段に外ならざりしと存じ候。純平たる個性發展主義を奉じたる同君が、更に如何なる方面に轉化したるか、これ小生等の見むと欲する所にて候ひしも、嗚呼、憾むらくは天畢に此の人を此の機に奪ひ申し候。匆々。

△故高山樗牛に對する吾が初戀

徳田秋江

◎私は何でも美しい物にはよく戀れる。戀れると言つたが、最もよくその心を表はして居る。私は美人を見て直ぐ看取れる。往來繁き煉瓦地を歩いて居たり、博覽會の混雜の中にもまれて居たりしても、美人と見れば直ぐキヨロ〱看回して、頭髮の形、髷の大きさ、廂髮の出樣、毛髮の濃さ薄さ、襟足の好き惡さ、襦袢の襟の色合、側に寄つた折には、その下の肌襦袢の地質まで氣が付く。併しながらそれは美人が何うしたいといふのではない、勿論肉體の慾がないとは言はぬが其の場合は、力めずして自から美に看取れるのである。私は呉服物を見るのが好だ、その呉服物を見るのと同樣に美人を見ることを好む。美人には双子の美人もあれば、お召の美人もある。併しながら、それが双子美人であらうとも、お召美人であらうとも、何處か他人にはいふに言へないウォルタア、ペイタアの所謂インコムムニュケーブルな點がある、それを認めたが最後大勢の中であらうが、何處であらうが構はず、キヨロ〱する。私の心中を知らぬものでその態度を見たものは、きつと色情狂といふかも知れぬ。自分でも狂に近いと省みることもあるが、氣に入つた美人と見たら看回さずに居れぬのが私の性分なのだ。何故かとそれを聞くやうな野暮な奴が世俗の所謂文藝批評家で、そんな分析的な說明も何にもしないて、唯看取れるのが、本當のテーストのある人だ。

◎私は右の意味に於て、高山樗牛には一と口に―假名て書いたが分りが好い―ホレタのである私の―ホレ性は、狹い意味の生きた美人にホレルばかりではない、智識美にもホレル。私は高山樗牛の智識美にホレタ。智識美といふ語の中には、彼の方の文章の美、論調の美、見地の美、思想の美を含んで居る。

◎高山樗牛が仙臺に居る時分はさておき、中學時代小學時代に於て既に拔群の才子であつたことは後になつて知つたのだが、私がそも〳〵樗牛にホレそめたのは、故國に歸つて居た時、博文館の創立十週年に發行した『太陽』に出た『明治の小說』を見てであつた。ホレタ私でも今から見れば固よりあの論文には缺點がある。併しながら私が初めてあれを讀んだ時の心持は言ふに言へぬ。論調と、見地と、文章と――これは今いふのだ―の新鮮な所が、ピタリと私の趣味に合つた。その時は唯何かなしに、胸が躍つたのだ。動悸がしたのだ。それと共にいま〳〵しいやうな、早く何うかしなければ取逃がすやうな心地がした。

◎その時分のことを想ひ起すごとに、私がよく自分にいふことだが、民友社の批評法――小說の批評ではない――が最も私のテーストに合つた。事理を解せざるの徒は唯一と口に、獨斷的、主觀的として、その批評法を斥けた者もあつたやうであるが、私は其の側面のことをいふのではない。勿論今日からいへば、民友社の頭は粗笨であつたらう。細かい趣味は分らなかつたらう。併しながらその政治も社會も文學も打つて一丸とし、其等の發生し來る根底に就いて藝術的直觀を下さうとしたのが民友社の見地である、論調である、即ち文明批評家の態度だ。而して民友社は遂に衰へた。當時民友社の衰亡を以つて德富蘇峯の變節と、政治的失敗とに歸したものがあつたが、今日となつて見ればさうでないことがよく分る。民友社の衰亡は時勢である。時勢も人も、自から作つた時勢と人とに亡ぼされるのが自然の大法である。若い者に古い者扱ひされるのが世の常である。見玉へ何處もさうだ、何時もさうだ。民友社はそが仕立てた……いや橋渡しをした時勢

の中からビーコリと高山樗牛を生んだ。高山樗牛を作つたのは高山樗牛自身である。併しながら彼れをして彼れを作らしめた時勢を開拓した有力者は井上哲次郎博士ではない、民友社であつた。併しながら民友社の批評法に養成された私をして、『明治の小說』を讀んだ時に、民友社よりも更に新鮮な論調に胸を打たしたものは高山樗牛であつた。考へて見玉へ。恰も高山樗牛が盛に時世論（其の主義よりも其の方式其の方式よりも其の感操が面白い）を遣だした頃から民友社は青年の心を失つた。私は『明治の小說』に依つて高山にホレそめ、それと同時に民友社に飽きが來た。

◎それから一年の後であつた。同じ『太陽』の奠都三十年の祭の臨時增刊に『明治思想の變遷』といふのが出た。主義は樗牛が當時カブして居つた國民思想とか日本主義とかいふのであつたが、時勢論といふのが氣に入つた。それより曩、民友社から出た竹越三叉の『新日本史』といふ當時好評を博した文明史體の明治史の中卷に『社會、思想の變遷』といふのがあつて、主義は異るが、時勢論をしやうといふ考へと、その方式とが餘程よく似て居る。私は樗牛のが出た時その二つと、それから建部遯吾博士が水城學人の名で『日本新聞』紙上に社會思想の變遷とか何とか何でもよく似た題で、樗牛等の日本主義を批評したのがあつて、凡て三つを比較研究したことがあつたが、水城學人のは漢學思想で古いと思つた。論題といひ、項目の分類といひ樗牛のは頗る三叉の方式に似て居る。確か其の頃であつた、三叉の『世界の日本』が赤表紙で大阪である時分に、樗牛が『太陽』の時文で、『三叉の文は獨り文壇の鉅觀なり』と大賞めしたのを覺えて居る。樗牛は死ぬ、三叉は時勢に外づれて來た。私には行く春の感が特に深い。

◎話が何時も横道にそれるが、文學頭の青年には有り勝ちに、その頃から樗牛は何樣な人が、今度東京に出てたら、見たいものと思つて居つた。所が其の年三十一年の秋私は早稻田に入つた。樗牛は三年で美學の講義して居つた。或る時私は三年の後の方に入つて、凝

平樗牛——その頃は凡て林次郎の名で書いて居つた——を見た。まだ髯のない、金縁眼鏡の好丈夫であつた。

◎私は人物を見て一層彼れが好きになつた。前に私はホレ性が強いと言つたが、私は單に女性の美人にのみならず、男性の美人にもひどくホレル。ホレルと言へば文字の習慣によつて直に性慾を聯想するであらうが決してさうでない。私には妙な氣分があつて、女は勿論のこと、男子でも同じ相場なら、何方かといへば好男子と面ずるのが氣持が好い。ソクラテスは醜男子であつたが、プラトーンは好男子であつたさうだ、それが本當の希臘人だ。私は確かに希臘人の性癖を以つて居る。自分と何の關係がなくつても——無關心に——唯好い男は好きさ。文士にはその書いたものと本人の風采とが全くソグワヌのが多いが、樗牛の其のスラリとした、毛の濃い、黒眼勝ちの、齒並の、整つた、威嚴をつくらう程に口の大きい、苦味のある、言語の明晰な風采は其の文章と酷く似て居る。

◎序に言つて置く、竹越三叉も頗る好男子で、彼れの風采は、直ちに『二千五百年史』の文章を想はしむるが特に其の眼光のギョロリとして鋭いのが私の氣に入つた。が彼れの文章は彼れの風采よりも早く頽齡の趣を示して居る。

◎私は田中正平氏の風采にもホレテ居る。坪内博士が嘗て『高山の顏に何處か似て居る』と言つた。確かにさうだ。東北人種の高山と上方人種の田中だけの相違であらう。子供らしい所があつて、氣焰の高いのも似て居る。その氣焰を吐き來つて、眉目の間に不羈の才氣の迸るのも似て居る。併しながら田中の白眼には安息がつて強い所があるが、樗牛の白眼はまだヘナ〳〵であつた。それは近代的な煩悶があつたからだらう。

△高山樗牛氏

戸　川　秋　骨

故人に關する批評につき輕々に筆を下し候は甚だ不本意の事に有之候へども、再三の御申入につき已を得

すその不本意な事を敢て行ひ、左に只今思ひ居候事を申述べ候、

大體小生は高山氏を以てあまり豪き人とは思ひ居らず候、併しながら君の筆に一種の魔力あり、君の思想に一種の創見あるは爭ふべからざる所にて、これはやがて君の生命に何物かゞ潜み居りし故と存じ候、此の何物かを解釋致し候はゞ高山氏の位置は明瞭する事と信じ居候。

此の何物かは君をして藝術批評家たらしむるよりは文明批評家たらしめ、美學の先生たる能はざらしめて美的生活の主張者たらしめ候事と考へられ候。なほ君は或は國家至上主義を稱導し或は世界的思想を鼓吹し、終には宗教的に傾くなど、幾度か態度を變じて、才子豹變など〻言れし事さへありしと記憶致し居候が、これ則ち此の何物かゞ爲さしめし仕業かと存じ候。而も此の何物かは君が該博なる智識と強烈なる感情とに依りて益々光輝を發したるやに考へられ候。

故にこの何物かゞ一度び君の雄渾なる筆に依りて發表せられ候や、一代の青年は君が風靡する所となりしも宜なりと申すべく候、然らばその何者とは畢竟何者に候や、そは明言致しかね候故に何物と申候次第なれども、假りに此れを辭句に顯はせば、內部生命とも申すべきか、此の內部生命はまた常に何者かを求めて君をして靜止する能はざらしめしものと存じ候。蓋し高山氏の當時より現時に及びなほ將來にも亘りて、世の青年は何者かを求め居候、此れやがて時代の內部生命の活動に外ならず候。而して高山氏の內部生命は恰もこの時代の要求と一致して活動致したるものにて、君の精神狀態は直ちに當代の精神狀態と申すべきやに考へられ候。この意味に於て君はよく當代を代表したるものと存じ候。

短くてもよしとの仰故これ丈けにて止め候。內部生命など〻曖昧なる文字を用ゐ候樣に候へどもこれを委しく申せば永くなりて只今の間に合ひかね候ま〻、それだけを申上置候。

拜首

東西比較 楊柳美觀論（中ノ上）

芥舟漁郎

中世紀以來の一傳說に依れば、基督の十字架に移楊を使用したるが爲めに其葉は罪惡を回想して斷えず顫動すると云ふとである。デクインシーは其近世迷信論に於いて基督敎の傳播せる諸國に此信仰が共に存在することを告げて居る。或る女性の著者は移楊の葉が十字架に使用せらるべき筈がなかつたからして葉の顫動する說明には適當でない、多分罪惡に汚れた木から離れたいと思つて煩悶して居るのであらうと女性相應な優しい可愛らしい觀察をして居るが、自分が詩人になつて作歌せざる限りは、斯かる見解は孰れにしても差支ない。移楊は英吉利に甚だ普通であつて河の畔りや森の中や到るところ汎布して居るが爲めに人目に觸れ易いから上述の傳說を基礎としたる次の文句を讀みて何人も感じたらうと考へる。十字架用の色々の木を探し廻り、移楊を切倒し、エルサレムの北にある小丘カルヴアリなる刑場へと曳き行ける光景を描きたる後に次のやうな句がある、

"On the morrow stood she, trembling
　At the awful weight she bore,
When the sun in midnight blackness
　Darkened on Judea's shore.

Still when not a breeze is stirring,
　When the mist sleeps on the hill,
And all other trees are moveless
　Stands the aspen trembling still."

獨逸に行はるゝ傳說は自ら獨逸的特徵を具えて頗る面白い。主なる基督が森中を步み給へる時、あらゆる花も木も悉く首を俯して敬ひ奉つたが、獨り剛愎なる移楊のみ平然として空嘯けるを見給ひて主の眉には怒りにあらぬ悲しみの雲の影掩ひ、過誤に對する償ひとして永遠に顫動すべきことを命じ給ひければ、移楊は今に至る迄恐怖と悲痛とに滿ちて風なき日にも猶ほ其葉を顫はして天命に服從するといふ意味である。ダービー孃の飜譯は八行四節にして玆に掲ぐるには長きに

失するが爲めにヘンダースンの書中にある四行二節ものを左に示す、

"Once, as our Saviour walked with men below,
His path of mercy through a forest lay;
And mark how all drooping branches show,
What homage best a silent tree may pay.
Only the aspen stands erect and free,
Scorning to join that voiceless worship pure;
But see! He casts one look upon the tree,
Struck to the heart she trembles evermore!"

斯の如く移楊と十字架との關係をつくりたる中世的傳說は一部の詩想となつて斷えず反覆吟咏されて居るので、例せばテニスン時代にマンチェスター詩人と名けられたるスウェーンの詩にも移楊の顫動を移楊口づから次の如く說明するのがある、

"The Cross, amidst lightning on Calvary stained,
Was made from our roots; there *His* blood hath remained!
Creation, accursing, in misery spoke,
And a shudder eternal then first o'er us broke!
From the *serpent* we're named, the last doomed to betray!
Oh! no rest for the Aspen till earth fades away!"

移楊に注目したる點は葉の顫動であつて、葉の顫動を主として何事にか喩へるのが英詩を貫通する思想である。移楊の葉の如くに顫えるといふのは人々の唇頭に上る常套語であつて、既に古くスペンサーの仙女王に見ることが出來る、

"His hand did quake
And tremble like a leaf of aspen green."

シエークスピーアは移楊を用ゐたること僅かに二回であるが、いづれも其顫動を比喩にして居る。タイタス、アンドロニカスの第二幕第四場にマーカスが大聲に、

"O, had the monster seen those lily hands
Tremble, like aspen leaves, upon the lute?"

と叫び、後の顯理四世第二幕第四場には例の豬首屋の女將が "Feel, masters, how I shake. Yea, in very truth, do I, an, twere an aspen leaf." と言ふて居る。

スコットには "Shook like the aspen leaves in wind"

とか "Gray birch and aspen wept beneath" とかいふ句を見ることが出來るが、婦人の心の變り易さを喩ふるに移楊の葉影の動くを以てしたのが最も有名てある、

"O woman! in our hours of ease,
Uncertain, coy and hard to please,
And variable as the shade
By the light quivering aspen made;
When pain or sickness rends the brow,
A ministering angel thou."

E. E. L. の雅號にて小說詩歌に名を馳せたるマクレアン夫人は愛の私語を聞きたるさまに移楊の顫動を見倣した、

"The aspen trembling, as if love
Were whisperd by the breeze."

しかしながら、何事にも喩へなて、移楊の葉の躍る姿や鳴る音を唯だ其儘に視たり聽いたりする詩句のないでもない。例せば次の前句はブライアントの作にして後句はローウエルの作てある。

"There's a dance of leaves in that aspen bower."

"Only the pattering aspen
Made a sound of growing rain."

白楊の英吉利に於ける分布は主として英蘭てあつて寧ろ普通に逢遭するものでないと言ふのが至當てあらう。蘇格蘭ては花を着けない。千五百六十八年に書きたるターナーの所言に白楊は以太利及獨逸に澤山あるとしてあるだけてあるから英吉利ては目視し得なかつたらしく思へる。少くとも見逃す程に稀少てあつたといふことは推測して差支ない。其後三十年にしてヂエラードはブラックウォールやフェンデンて之を視たと書いて居る。ハートリップの農業全書は千六百五十九年に出版されたのであるが其なかに、數年以前十万本の白楊がフランダーから英吉利に輸入され培養されたことが載つて居る。英吉利て白楊を普通 abele といふのは和蘭語 abeel に基くのてある。白楊に酷似する灰楊P. Canescens なるものがまた英吉利にあるが是れは葉の裏面に灰色綿毛樣のものがあるか若しくは絕無に

して平滑なるかに依つて白楊と區別するのであつて、高さは白楊に及ばないが猶ほ八九十呎に達することもあるので、大仕掛の修飾用としては丈高く枝幅濶く人家を掩ふから最も妙である。獨逸・佛蘭西では諸種の用に供するが、英吉利ではノーフォークの方面に甚だ多いだけである。黑楊も亦た少い方であつて、英蘭南方以外に於いては恐らく輸入したものであらう。十九世紀の初め頃迄は黑楊の輸入培養が最も盛大であつたが、夫れから以後は他の楊が勢力を得るやうになつた。偖、斯う調査してみると、移楊以外の楊屬に關する詩觀は所謂世界文學を傳つて這入つて來ても直接に詩人の閱歷をつくる機會が甚た少いから、却つて特色の著しき移楊に詩人の想ひが向き易いと判斷して差支ないと信ずる。まづ聖書と併稱せらるゝ沙翁に說き及びたる一句もないことを記憶すべき必要があらうと思ふ。

スペンサーの次の句は明瞭に希臘神話を材料にして居るから黑楊若しくは白楊であるに相違ない、

"And eke those trees in whose transformed hue
The Sun's sad daughters wailed the rash decay
Of Phaeton, whose limbs, with lightnings rent,
They gathering up, with sweet tears did lament."

英譯されたる西班牙詩人の句もホーマーのイリヤッドに見たる詩想と相照應して居る。唯だ此處では指の運動でなくして毛髮の亂るゝ狀である。白楊でも黑楊でもよからう、

"Each wind that breathes gallantly here and there,
Waves the fine gold of her disordered hair,
As a green poplar leaf in wanton play
Dances for joy at rosy break of day."

カウパーの句は年代から考へても白楊と斷じてよからう、

"The poplar that with silver lines his leaf,"

バリー、コーンウォールの句は意味の上からして白楊を歌ふて居ることが明らかである、

"The green wood moved, and the light poplar shook
Its silver pyramid of leaves."

ロングフェローの句は如何なる楊を指して居るかは不明であるが、田舍の古風な建物には何楊でも調和を

失ふものとは思へぬ、

"Somewhat back from the village street
Stands the old-fashioned country-seat;
Across its antique portico
Tall poplar trees their shadows throw;
And from its station in the hall
An ancient timepiece says to all,—
'Forever!—never!
Never!—forever!'"

エーカーズ夫人はロングフェローと同しく流石に新しい亜米利加詩人であるから、兩句とも白楊其ものゝ美點に着目して居る、

"The poplar drops beside the way
Its tasselled plumes of silver-gray."

"The silver poplar's pearl-and-emerald sheen
Glimmers incessant, shadowing the eaves."

バルウァー、リットンの文句を一讀してみる、

"Trees, that like the poplar, lift upward all their boughs, give no shade and no shelter, whatever their height."

楊の如く如何程丈高くとも枝々を悉く直立せしめて影をつくらざる木といふことであれば此楊は恐らくロンバルヂイ楊を指すのではなからうか。ロンバルヂイ楊 P. fastigiata は喜馬拉地方を原産地として波斯に擴り南歐に入り殊にロンバルヂィの河々に沿ふて豐富に生育したるが爲に佛蘭西でも英吉利でもロンバルヂイ楊と命名して居る。英國に輸入したるは千七百五十八年である。葉は黑楊に類似してゐるが、枝々は横に擴らずして悉く天に向つて直上するから木の格好も面白いし、高さは百呎以上百五十呎にも及ぶし、また成長も甚だ迅速で都合よき爲めに英國では修飾用として廣く行はれ始めた。明かに此楊を題として歌つて居るのはアルロ、ベーツといふ亜米利加の記者である、

"And stiff and tall along the shoreward rocks
Lombardy poplars woful sentry stand,
And each with shadow on the greensward mocks
The spectral pointing of the dial's hand."

精神の修養に就て

文學博士 福來友吉

●現今の學生に參禪をする人も少なくないやうてすが、學生が參禪をして解脱の域に達するといふことはなか〱容易のことてない。そんなことは到底學生に望むべきことてないと思ひます。然し參禪の法式は今日の心理學の學説と一致して居て確かに精神修養の一助となることゝ信ずる。禪宗の要求せる樣な、解脱の域に達することが出來ぬとしても、兎に角之をやれば確に利益がある。

●元來人間には仙術ていふ眞氣、孟子の所謂浩然の氣、といふ樣なものが具はつて居る。私は之を活元と名けつて居る。即ちライフのオリジン。スピリッチユアル、ライフのオリジンてあると思ふ。精神修養と云ふことにも種々なる方面があるが、其の中で最も肝要なる方面は此活元を養ふことゝいつて可い。宗教でも別段物質的のライフを與ふるものてない。宗教を信じても肺病は矢張り肺病て、腫物が矢張り腫物てある。肺病も、腫物も宗教によつて癒るものてはない。けれども宗教を信ずれば其肺病も腫物も苦にせず、肺病は肺病のまゝ、腫物は腫物のあるまゝて安心することが出來る。是れは活元が精神中に充實して來て、其の結果尋常人の堪ゆべからざる精神的苦悶の境界に居つて、夫れに安住することが出來るからてある。宗教の大目的は安住を得るにあるので、而して此の安住を得るには活元を喚起することより外に方法があるまいと思ふ。かゝる活元を養ふには他力的でも、自力的でも、宗教によりて得られたる果實は結局此の活元の自覺てあると思ふ。

●坐禪は確かに此活元の自覺を得る一つの方法てある。大悟徹底したる大解脱者は別てあるが、凡人たる吾々は日常浮世的の累に繫られて居る爲めに此活元の源を塞がれて居ることがある。即ち無明の妄念に支配されて居ることがある。坐禪は此浮世的の係累、無明の妄念を拂ひのけて、眼のあたりに活元と面して立つ

に至らしむる方法である。

●又時々高山大川を跋渉することも一種の轉氣法であつて、矢張り浮世の羈絆を脱して活元を養ふことになる。これが此二の方法。

●又活元の充ち滿ちて居る人に接することも、活元を養成する道で、これが第三の方法。此三つが私の今日精神修養法として考へて居る所なのである。

●坐禪は一人でやれるかも知れぬが、大抵は甘くゆかぬ。矢張りよい導師が入る。下手にやれば禪病にかかる。坐禪をやつて神經衰弱にかゝる人はいくらもある。實際活元のある人に接することが必要である。人の心には活元があるというても、其活元を呼び出すものがなければならぬ。世間には火事に逢つたり。又は泥棒に逢つて、精神激興したるが爲めに、年來塞つて居つた活元の泉が開けて、神經質的苦悶から脱失したものもある。けれどもそれはオッケージョンのことである。いくらオッケージョンを待た所で駄目だ。それ故に之を呼び出す道を講じなければならぬ。それには禪宗の坊さんなどがよい。坊さんには他人の活元を呼び出すに上手下手があり、よく其呼吸を呑み込んで居る人でないと駄目だから、矢張り人を選んでやる必要がある。

●現今青年者の苦悶といふものは智識の重荷に堪へられない處から起て居る。智識といふ者は自分の手足として使はねばならぬものである。然るに現今の青年は少しばかりの哲學や倫理學を學んで、やれ理想だの、やれ主義だのと言つて、理想や主義やの爲めに浮身をやつして、愚にもつかぬことを悲憤慷慨して、食事も進まず、安眠を妨害されて居る。こんな青年者に限つて、口には理想だの主義だのと大きなことを言ふ癖に、日常生活に於ける平凡なる勤めを果すことが出來ぬ。遇ひも見もせぬトルストイ伯などに對して隨喜渇仰の涙を流して有難つて居るが、下女下男等を使役する時には隨分殘酷である。世の中は自分の理想に合はぬ、主義に合はぬなぞと慷慨して居るが、日々の學業を安心して勉强したり、つまらぬ間食を制止したりする樣

な事は一向出來ぬ。併し此丈の事が活元を見失つた神經衰弱家には出來ないことだから仕方がない。

◉解脱した人は如何に俗事に接しても活元が傷くことがない。されど他の人々が外界に接すれば、直ちに倦み疲れて不如意の人となる。一度び不快の念を起すと、さういふ經驗が積み重つて遂に無明的觀念となつて活元を破る。世がつまらなく、人が味氣なくなる。だから時々は高山大川に跋渉して、他の方面に心を轉ずる必要がある。必ずしも高山大川でなくてもよい。盆栽園藝の如きでもよい。又繪畫音樂の如きでもよい。然しどちらかといへば自然が大なれば大なる程心を多く轉ずる力があると思ふ。私の知つて居る人で相場に手を出し、又園藝を愛して居るものがある。相場の爲めに精神苦悶した時に園藝に對すれば氣が暢びりして、全く相場のとを忘れて了ふといふて居る。園藝もこのやうになれば全く生命の藥になる。時々旅行などをして宇宙に對すれば其間は一種の活元が新生する。盆栽の様に小さことよりも矢張り眼界の廣い自然の山水の方がよい。子供の教育なども眼界廣い所に於てしたらよからう。赤裸々なる純朴の自然に接するやうな所が望ましい。夏休などに神經衰弱を憂ひつゝ夏期講習會に出てゝ聽講して居る連中があるが、それよりも海水浴でもやつた方が餘程氣が利いて居る。

◉又活元のある人に接するのは活元を呼び出すべき極めてよい捷徑である。アブストラクトな書物などを見るよりも、直接其人物に接したなら一言一句悉く活元を呼び出す力があるだらう。例へば戰爭などに於て大將の儼然たる馬上の雄姿を見れば、兵士の勇氣が恢復するといふことである。子供を教ふるにも甲(かん)の高い聲はいかぬ。成るべく朗かな、穩かな聲でやるがよい。又世人は教育はノーレッヂで教ゆるものと心得て居るが眞の感化の方面の教育は不言の教であると思ふ。吾人の精神は自覺以外に無自覺的に感ずる時がある。感化といふことも即ちそれである。以上の言の中で若し精神の修養に志す人に多少の暗示を與ふることがあらば幸である。



訛傳妄說

『國民新聞』

日露英佛四國間、同盟成立すべしといふ、突飛なる風說、一たび歐洲の一隅より起りて後、或時は、米國人をして、神經質なる揣摩を爲さしめ、或時は、露國新聞紙をして、揭げて以て、バルーンデッセーの用に供せしむ。此頃亦獨逸にて、匿名の一册子を發刊し、此四國同盟は、日本は之を以て米國を排除し、英佛二國は、之を以て獨逸を壓倒せむとするものなり、獨米兩國は、之に對抗するが爲めに、必死の連合を爲さざるべからずと、痛論する者あるに至る。初め四國同盟の風說起るや、日本の論客中粗忽なる輩は、遽かに得意の鼻を蠢かし、日英同盟既に成立せり、露佛同盟亦來りて之に加はるは、當然なりと、語るものすら有りたれども、今や之が爲めに、米國人に疑はれ、獨逸人に忌まれて、妄りに痛くもなき腹さぐらるゝに過ぎざるを知らば、彼等と雖も、今更ら此風說を流布せる者を怨み、其訛傳を釋くに、焦慮するならむか。

四國同盟なる想像の、由て來る所を尋ぬるに、日英同盟、露佛同盟の間の、連鎖ともいふべき、英佛間のアンタントコルデアルあり。世人乃ち、英佛を介して、日露を結び得べしと爲すの情あり。又一昨年以來、英露間には中央亞細亞問題に關する交涉あり、日露間亦通商條約其他の談判中なり、以上の諸關係を相綜合して、四國同盟の將に成らむとすることを、描き出すは、强ち無理ならざるなり。併ながら、是れ畢竟大早計の見のみ。

夫既に同盟といふ、政治同盟ならば、政略及び戰略上の規約を設くべく、經濟同盟、即ち關稅同盟若くは貨幣制度同盟ならば、其れ相當なる具體的事實なかるべからざるなり。知らず、以上四國間には、是等同盟の何れかを、組成せざるべからざるの必要ありや。將た又之を保持し得るの見込みありや。吾人固より、日佛の相親しきは、英佛の相親しきと異なるなきを信ずるものなり。露國と一たび戰ひたりとは云へ、平和回復後は、親交國を以て相許すを、躊躇せず。併ながら、同盟なるものは、自ら特殊の事情ありて、初めて成立するものにして、親交即ち同盟と解するが如きは、無稽の極なり。

而して日本帝國の境遇より之を云はゞ、其の北米合衆國との、經濟關係の親密なる。往々日米經濟同盟の說を爲すものあり。昨年來、桑港事件等多少の行違ひはあつたれども、同國民の好感情は、依然として渝ら

ず、貿易關係は一層良好なり。我と獨逸との間、亦一朝一夕の故にあらずして。我の歐羅巴大陸の文明を輸入するや、獨逸に負ふ所多きに對して、獨逸の對外經營、亦我と相親近せざるべからざる所以のもの、多々なり。故に若し、我にして既存の日英同盟の外に於て、何等作爲する所あらば、必ずや米獨諸國と相謀りて、相互の便益を進むるといふをならざるべからず。豈復た米獨を驅て、相衝突するの地に立たしむるの、愚を爲すべけむや。（援萃）

個人主義と家族主義

『日本及日本人』　新渡戸稻造

各個の人格を發揮する事のみを以て人生最大の目的とするは、極端であると思ふ。人間は到底一本立ちでは行かぬ、全く獨りでは人格の發揮も出來ぬ、人間は相持ちでなければならぬ。社會は個人の生產物であると同しく、個人も亦た社會の生產物である。然るに社會の行爲と個人のそれとは自ら違う、社會には創見などゝ云ふ事が無い、新案とか發明とか、新思想とか云ふ事は個人の腦より起るので、卓見のある個人が新思想や新發明を出し、社會が是れを認定して用ふるのである。社會でふボンヤリした團體は個人なる聖賢の考を拜聽して、幾分か之を實現するが手一杯の處で、三人寄れば智惠が出るとは云ふものゝ、愚徒が三人、三千人、三萬人寄つたとて善良の智惠は出ぬ。萬犬聲を揃へて吠ても「ロン」より以上の音樂は出ぬ故に馬鹿の多い世の中では、偶々聖人賢人が現はるれば、彼の敎を受けずに却つて卓見を破りたがる。去ればこそソクラテースの毒殺、キリストの磔刑などの傷ましい事が生ずるのである。

而して社會は、此等卓見ある人を迫害して、其居らなくなつた後で、始めて夢から醒めて悔ゆるのである。ソクラテースや、キリストの樣な人は、聖の聖たる者であつた爲めに幸に名も殘つたが、この他に思想も知らず、後世に名も顯はれぬ人で、猶ほ吾人の爲めに高く考へ、深く思つて、遂に身を殺した人達は、萬を以て數ふる程あろう。

吾人が國家の爲め、人類の爲めに希望する處は、出來るだけ異なる思想を養成したいのである。それには國家が敎育、宗敎等に就いて、猥りに標準を定める事をせず、個人に自由勝手に、種々の思想を考へ出さして、自由勝手に、爭ふて研めさせる事を許して欲しい。これでこそ、各自の人格修養が出來る。

一時は國民敎育などと云つて、國家敎育と云ふ標準を作り、此の標準に一歩でも違ふものは、非國民だとか、非愛國だとか云ふて排斥したのだが、幸にも現今は、斯んな事が無くなり、度量が廣くなつたのは頗る嬉ばしい。

異端だとか、極端だとか云ふものを許して、自由にインヂビヂュアリテーの發達を計つて欲しいものである、此のインジビジュアリテーを曲げたり、或は制限したりするのは、國家の大目的を傷ふものである。束

洋でも西洋でも、國家が輕々しく個人の說を壓服するは、漸く見えなくなつた様ではあるが、其代りに一家一家の家庭に於ては、個人の發越を壓迫する傾向が未だに除かれぬ、特に此事は我國に在りて最も甚しい。何ぞと云へば、「家名」「先祖に對して」と云つて、個人と家族が個人を壓迫する、成程家族本位といふ事には得もある。バルザックが云つた言に「近來家族制度が衰へたに就き、廉耻心が無くなつた」と云つて悲しんだ事があるが、夫れは然るべき事て、特に士族は勿論、町家等ても、家名に關する行爲は大に謹んだ、然るに又た一方に於ては、家名に係はるとて惡い事をも、一家同意して審包する迄は兎に角、啓事の如く見せんとするに到ては如何だろうか。一家標準といふ事は或は甚だ高く、或は甚だ低い、廉耻を嘉みするは大いに善いが、之れに反して惡事ある時にも「家名」の爲めに、惡くないかの如く辯護して世を欺く事は隨分あるが、甚だ惡むべきては無かろうか。(拔萃)

寂の一字

『東亞の光』　谷本富

試に「言海」を披閲するに「サビ」、下には荒の字を塡め、荒ぶると、年を經て熟するとと注し、又「サビシ」の下にも同じく荒の字を插み、衰微の語を加へたり。就中年を歷て熟すと云ふは、素是れ第二義なれば、暫く措いて言はず。即ち寂も亦寂寞、寂寞と看て、やがて蕭索、荒涼の義に解すべきか。

余輩の以て東洋的情趣の特徵と看做せる寂字は、實は之れのみにては稍々不滿の感あり。蓋し寂字的情趣の由來を案ずるに、未だ必ずしも專ら消極の實中に蹴在する者にあらず。禁慾厭世の印度思想之れが源泉たるは固より論なしと雖も、然れども又他に老莊一流の幽玄なる所をも兼ねるあり、乃至易理亦其の中に含蓄せらる。而して大乘佛教の思想の如きも深密に關係する所あり。終に傳へて我が國に入るに及んで、自ら別趣を備へたり。俳味と謂ふもの即ち是れなり。故に這の寂字は實に三國傳來の情趣にして、婆羅門、大小佛教、並に老莊の因子を混じ、別に儒學の哲理を合せ、其の極我が國に輸入してより、鎔融して一丸とし、更に琢磨せられたりと謂つべし。未だ決して爾く容易に解釋し去るを許さゞるなり。

余輩不肖固より未だ大悟せず、唯だ暫く古歌、古句を拈じて、微に會心する所を言へば、孰れも靜中動機を藏する邊、自ら妙趣を具へたりと言はんとす。鴫立澤は單に暮秋澤畔荒涼の風景を描くに止らず、悲鳥を點出して、即ち情致あり、立の一字無限の味ありとす。枯木蕭條の裡、一個の寒鴉を添へ、池砌閑幽の上、青蛙入水の微音を加ふ。靜中動機の寓する所、多言せずして深趣あり、是れを之れ眞個寂字的情趣と呼ぶべきにあらずや。若夫れ「サビ」の第二義として年所閱歷して成熟する事を擧ぐるも亦同じ、啻に閱歷して消磨し去らば、「サビ」はあらず。消磨の底裏反つて機用の成熟してこそ、始めて「サビ」あり、寂ありとすべきなれ。

按ずるに禪宗無字を肝要とす。此の無字又寂字と相通ずべきか。無字を以て萬物老死の義と做さば、恐らく其の本旨に戻らん。趙州の無果して如何。涅槃と謂ひ。寂滅と謂ふ者、素より虛無にあらず、灰身滅智にあらずとせば、自ら大乘の歸趣を知らん。「サビ」なる哉。易に寂然不動感而遂通天下之故」とあり。不動にして而して感通する所、確に是れ眞の寂あり。

更に之れを俗情を以て解せんか澁の一字最好く適應せるが如し。「言海」には澁を釋して、瀟洒とせるは未だ妥當ならず、寧ろ其の「クスミテイキナリ」と云へるを可とす。「クスム」は靜なり「イキ」は動なり。澁は正さに是れ靜中動機の伏する體なり。黄金閣を彫鏤して、而かも「ツヤケシ」と爲す所、自ら無限の妙味ありと云ふ。寂字と擇はざるなり。唯だ寂と云へば、多少學究の態あり、澁と云へば、市井の相あるを差とす、倶に脫塵超俗は相同じ。此に至つて寂の字更に一和訓を增して「シブシ」と讀むも亦妙ならん。是れ寂字の眞諦にして所謂東洋固有の情趣あり。淸貧は寂味あり、而かも貧乏都べて澁しと云はゞ、いかゞあらん。（抜萃）

脳税を減ぜよ

『慶應義塾學報』　鎌田榮吉

近來我が國位の高まると共に租税が著しく增加して國民一同大いに困つて居るのであります、併し是れは一方に置いて民力の發展と云ふことを計り又課税法さへ宜しきを得るに至らば、必ずしも甚しき憂をなすにも及ばぬと思ふ、日本にはまだ〳〵富の發達する餘地があると見て宜しいとしたところて、他の一方に於いて第二の國民たる少年兒童の腦髓に係る税額の增加することは大變なものだ、この税は少年の軟弱な腦髓に向つて壓迫を加へるのであるからして、その害をなすの甚だしいことは申す迄もない、今日の小學校、中學校、中々豪い税を頭に掛ける居る、その税目は色々ありますけれども、その最も重きものは、即ち文字である漢字と假名と交ぜて使はなくちやならぬ、と云ふことの爲に非常な苦みをして居る、その上に英語を覺えるとか獨、佛の語を覺えると云ふことも高等に進むに隨て殖へて來る、そこで英人が佛語、獨逸人が佛語を學ぶと云ふ事は左程むつかしくないが、日本人が漢書を讀むと云ふことてもこれよりは遙かにむつかしいことである、夫等の點から、少年の腦税が非常に重くなつて居る、先づ第一漢字と云ふものを覺えなくちやならぬ、假名と云ふものを覺えなくちやならぬ、この假名には片假名あり、平假名あり、又萬葉假名もある、その上其綴り方にも色々の方式があり又漢字の音訓、送り假名なぞ容易なことてない、そこで新聞や書物にしてもその本字を書いて其傍へ振假名をする、外國て人種の入混つた國抔には數多の對照語を書いて居る處があるのは隨分不便な事と思はれる、例へば停車場の札にアントエルペンとアンベールと云ふやうに二ツ書いてある、ところが、日本の如きは水入らずの同人種の國でありなが

ら品川と書いて又「しながは」と書いてある、又おかしいのは西洋の言葉を譯して漢字に書き直して、「ランプ」を洋燈と書く、又それへ「ランプ」と假名を振る、實に御苦勞な話だ、初から假名でランプと書いて置けば宜さゝうなものが、文字がある爲めに洋燈と書いて再びランプと書く、子供達は分らぬから西洋料理の洋の字はランプのランの字と同じやうな字だと言ふやうな笑ひ話が起る、然るに今日ではランプを洋燈と書て、假名を振ることの出來るやうな人を學者とか敎育ある人とか云ふことに成つて居る、之れが出來るが爲に實質的に於てその人の腦髓に何があるかと云ふに何にも無い、初からランプと極まつて居る、併しそれまでの苦しみは非常なものです、申す迄もなく漢字なるものは、形象文字で思想を書いたものである、假名はシラビックでシレープルを代表す、羅馬字のアルファベットとは原音を代表する、この三ツを對照して、先づ之を物理的に譬へると形象文字は一の物體と見做し假名は分子と見做し羅馬字は原子と見做すことが出來る、物體は之を分解して分子となり分子は之を分解して原子となる、即ち原子が抱合して分子が出來、分子が凝集して物體となる、例へば形象文字即ち漢字は一ツの握飯と云ふやうな物、この飯は元と、米と水とから出來て居る、この水は酸素と水素から出來たものである、即ちその水の分子、モレキュルは酸素と水素の抱合物であるから之を分つと水素と酸素と云ふ原子に分るることが出來るのであります、今若し此の宇宙間の萬物が物體のまゝて分解することが出來なかつたならば、どうでありますか、又分子のまゝて原子に分析することが出來なかつたならうば、どうでありますか、非常に不便などころか宇宙の經濟は全く止つて仕舞であらう、畢竟要らなくなつたものは毀れて復た外の物を造るからこの宇宙間の萬物は減ずる事なく又增す事なくして新陳代謝の作用が行はれると云ふのが天然の通則である、所謂物質不滅と云ふ、この規則の中に種々樣々の變化をして行くと云ふのは何であるかと云ふと、物體は分子に分れる、分子は原子に分れる、この原子が樣々に抱合して分子が出來、分子が凝集して物體が出來て行く、これ即ち僅かに七十七種の原子が常に分合會離して新陳代謝の作用が行はれて居る所以であります、して見れば從來日本に行はれて居る漢字よりも假名よりも、羅馬字の方が良いと云ふとは爭はれない理窟である、即ち僅かに二十五六の文字が分合會離して千言萬語をなす事は恰かも彼の原子の森羅萬象を形作るが如きものと云て宜しいのであります、(拔萃)

自然主義的表象詩論

『帝國文學』　岩野泡鳴

これから益々發展すべき詩風を個條書きにして見ると、(一)宗敎的形式の脫却。これには哲學的敎訓的形式の脫却も含めてあるので、云つて見れば、すべて傳習的思想の打破である。かういふ思想があると、いつも生靈の自由活動を妨げるのだ。自然主義は一點の羈絆をも許さない。赤裸々の生命を捉へるのである。(二)懷疑と煩悶。之を恐れる樣ては

自然主義は貫徹されない。傳習的思想家に限つて、鳥渡でも疑ひがあり、鳥渡でも苦みがあると、病人が醫者を呼ぶ樣に、直ぐ宗敎や哲學に訴へる。すると、數學はしたり顔にその得意の架空不自然な混ぜ物を持つて來て、それを藥に飮まして、一時の氣休めにさす。そんなことで安心出來る病人なら幸福なものて人生は大した苦もなく通れるだらうが、僕等は不幸にして渠等よりも重病である。一回の氣休めは却つて百回の苦みを增すわけになるので、寧ろこの煩悶を——止めるのではない——堪へて行くのを眞相だとして、飽くまでも個人の自覺を呼吸するのである。劇が若し解脫で終るなら、僕等には、悟つたつもりで澄まして居る坊さんを見る樣に滑稽であるから、それは悲劇でなく、一種の喜劇であるとは、僕の新説だ。自然主義の悲劇は個人即苦悶即呼吸の自覺である。(三) 神經と自然との燃燒流化。眞摯な自然主義を遂行すると、おのづから神經が敏活になる。敏活な神經が自然と燃え合ひ、流れ合つて、自然に感じがあるのが神經、神經に形が現はれるのが自然。僕等は自然の裏に活動を認めるのでなく、自然その物が神經的活動物となつて見えるのだ。それが乃ち自然のイリユージヨンであつて、つまりは自己その物の影であるから、その作物が作者と共に生命を保つことが出來るのである。

(四) 刹那的生慾の發現。前項の如くなると、そこに人間の生慾が一刹那の餘裕もなく、存在の危機を守つて居る狀態であるから、博愛や慈善を説いたり、『神は愛なり』など歌つたり、そんなのんきなことはして居る餘地がない。そんな餘地が一分出來れば、一分だけ自己の眞摯をゆるめたことになる。自己生存の大危機に臨んで他を救ふと云ふ樣な考が出ると思ふのは、僞善でなければ、心の箍(たが)の拔けたものであらう。酒精に水を入れると稀薄になる、眞摯な作物に非個人主義の要素が這入るに從つて、熱烈の度が不足になつて行くのだ。(五) 心熱。自己が最も眞摯になつて居る時は、自己の一部〳〵でない、全体が一つに燃えて居るのだから、その時の作物に感情の熱ばかり現はれる筈がない。智情意一體の心熱が現はれるのだ。云ひ換へれば、熱想的自覺である。かうなると、宗敎は意力、哲學は知力、藝術は情て行くといふ樣な區別は、誰れにても幼稚なことが知れよう。(六) 新語法と新用語 ネオロジズム(新語法)を叫ぶのは、新思想の出來た時代には必らず止むを得ないことだ、在來の用語、云ひまはし語法などではなか〳〵云ひ現はされない思想があると同時に、また技巧上の工風が進んで來るので、古い頭腦には之が間違つて居るとか、然らざれば分らないといふ非難となるのは、どこの國にも一時代後れた老人または若年寄の居る證據である。(七) 思想と技巧との純化。思想ばかりで作は出來ず、さりとて技巧のみでは無意義に終はつてしまはう。現代の詩や小説は後者の勝ち過ぎたのが多い。人によりて兩者いづれかに偏することはあるにしろ、その詩才の特色に從つて、思想は乃ち技巧、技巧は乃ち思想であるの域に達してこそ初めて理想通りになるのだらう。(八) 新リズム。前項までの個條は詩に限つたものでない、ダンヌンチオやメタリンクやイプセンなどもこの方向を取つて居るのだ。それが詩に纏まるには、リズムに刻まれなければなら

ない。新時代の新思想に對し、それ相應な新リズムが出て來るもので、神經の敏活なるにつれて、リズムも亦敏活になつて行かなければならない。エルレインがその一詩集を『言葉なき歌』と名づけたのは、このリズムの力を自覺して居たからである。先日、或婦人が萬國漫遊から歸つて來ての話に、外國の音樂を聽くと、跡までいゝ心持ちが殘るが、わが國のはさう行かないと云つた。すると、或人が之を解釋して、それはリズムが耳に殘つて居るので、邦樂はリズムが複雜だから、甘く殘らないのだ。外國樂でも、ワグネル物はさうは行かない、聽いた跡で、何だかうッとしい天氣が自分の頭を壓迫する樣な氣になると答へた。リズムの輕妙、複雜、強烈なのは、それ／＼巧みに使用されなければなるまい。

要するに、僕の所謂自然主義的表象詩は、以上の如く發展して行きべきものだ。大抵は拙著『中獸主義』で云つたことだ。舊思想、舊形式の人々が分らないとて、何も憂へるには足りない。云ひ換へれば、サイコロジカルポエトリー（心理的詩歌）である。これは必らずしも佛蘭西のサンボリストに習へと云ふのではない、たゞわが國古代の神々の生活を僕等は、今日、詩で實行するのである。審美學では愉快を與へ、解決を與へるものを美とするのが、それと反對に、不快や不解決が美ではないから、之を詩の材料にすることを許さないと云ふ學說なら、僕等は再び顧るに及ばないのだ。もつとも不快、不解決、醜、罪惡なども、美となる樣に使ひさへすればいゝのだと云ふのが一般だが、それなら初めから美だけを擧げて來ないで、美醜、快不快、善惡など、すべて自然のまゝに心理的詩歌の材料になる。何度も云ふ通り、生存の危機一髮といふ時に當つて、のん氣にも美醜の考へはあるまい。眞摯、熱烈、刹那的表象のイリユージヨン――これがリリク、乃ち、敍情詩の本領である。（拔萃）

ホトトギス

○第十巻第九號（五月一日發行）要目

定價●壹部十五錢郵税一錢●五部前金郵税共七拾五錢●拾部前金郵税共一圓四拾五錢●貳拾部前金郵税共二圓八拾錢

（中付の一）

東京市麴町區富士見町四丁目八番地

俳書堂雜誌部

振替貯金口座貳〇五番

五月一日發行

編輯主任 佐々醒雪

意匠監督 和田英作

家庭文藝

毎月一回 一日發行

第一卷第六號

定價貳拾錢 郵税金貳錢

臨時増刊(四月二十日發行)(定價貳拾五錢)

博覽會と東京

目録を列擧したるは眞の案内記にあらず、眞の案内記は趣味を以て書かれざるべからず。本誌載する所現代の文士、關月、霜川、琴月、鶴伴、吊花、醉雨、野圃、及醒雪、古城、薄光、諸氏の筆になる若し本誌を一讀せば恰も身自ら博覽會會場にあるかの觀あり、加ふるに櫻盧氏の東京案内は八十餘頁に亘る大附錄なり。

發行所 東京日本橋通三丁目 金港堂 同支店 大阪市東區北久太郎町

(中付の二)

新小説

第拾貳年第五卷◉五月壹日發行

▲本欄▼

無人境……江見水蔭

家庭悲劇 清濁……土肥春曙

渡りぞめ……泉斜汀

獨立心……正宗白鳥

▲思潮▼

羅馬人の饗宴……片山孤村

比較文學……畔柳芥舟

職業としての繪畫……紀星峰

▲雜錄▼

歌曲としての說經……藤岡東圃

牡丹……前田曙山

懷舊……小川未明

▲我觀錄▼

批評家の權限……登張竹風

▲時文▼

友人某に與へて黨領的野心を戒む……後藤宙外

▲家庭▼

女學校卒業生へ希望……山脇房子

齒の化粧……野村水藻

臺所道具……幡幽泉

▲譚叢▼

右團次父子……市川小團次

▲藝叢▼

由良之助の型變遷……三木竹二

▲社會▼

東京觀場惑亂會……双角魔王

三崎座と宮戸座……山岸荷葉

野田の醬油……太田宙花

都下の育兒事業……耕硯生

▲流行▼

銀器と飾棚……流行子

▲懸賞披露▼

渡船場にて（葉書文）……泉鏡花選

燈（和歌）……金子薰園選

蚊（俳句）……高濱虛子選

會社熱（狂句）……前田曙山選

▲繪畫▼

花の香（表紙）……川村清雄

無人境（口繪）……東城鉦太郎

ふかみ草（口繪）……島崎柳塢

春宵（口繪）……榊原蕉園女史

實價

壹部廿五錢郵税二錢五厘●六冊前金郵税共壹圓五十九錢●十二冊前金郵税共三圓十二錢郵券代用一割增

發兌元　東京日本橋區通四丁目角（振替貯金口座壹六壹七）　春陽堂

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

伊原青々園氏著

夫さだめ

近刊!!

春陽堂發行

徳田秋聲氏著

おのが縛

實價金六十五錢
郵稅金八錢

畔柳芥舟氏序
登張竹風氏序
後藤宙外氏序
泉鏡花氏補
泉斜汀氏著

深川染

實價五十錢
郵稅金六錢

東京日本橋區通四丁目
(振替口座一六一七)

泉斜汀氏著

深川染 後編

近刊!!

(中付の四)



小軋轢

徳田秋聲

一

私の妻が第三の女を擧げた時、世帶を持つてから押通しに住んでゐた從來の家が手狹になつたので、私は遽に引移るべき借家の搜索に取かゝつた。

是は四月の中旬過、櫻の蕚が赤く、青々した柔かな若葉の蔭に殘つて、何處の垣根際にも白い落葩が粘着いてゐる暮春の頃。――新に住家を搜すと云ふ事は、私のやうな果敢ない生活（私は小い官吏で）をしてゐる者に取つては、何となく不安を感ぜしめる。加之、私の神經の故でもあらうが、家と云ふものに附纏つてゐる世間の迷信は、私の二十世紀の頭腦にも、矢張薄々附纏つてゐて、土地が乾燥で光線と空氣の流通が自在で、下水の吐け口が開けてゐたら、其で立派に衞生上の要件は充されてゐるのだが、行く先の家に就いての不安は、唯其れだけでは除かれぬ。尤も住馴れた家でも、私は始終一種の不安を感じてゐるのが癖で‥‥否、單に家ばかりでなく、此大塊の上に生存してゐる一小人間としての私の

生活其自身にすら、其感はするのではあるが……

然し若葉の頃、古巣を棄てゝ、新しい家に荷物を釋いて、より廣い部屋に寛いて、趣の變つた庭に對する時の心持が樂くない筈はない。私のやうな變物にも、其樂しさは矢張感ぜられるので、何だか生活の新生面でも弘げるやうに、氣紛れな、胸も躍れば氣もソハ／＼して、土曜の午後から日曜へかけて二日も、足を棒にして捜廻つた。

適當の家の見つかつたのが、其からは十日ばかりも後で、或日役所からの歸路に、元町の高臺を通かけると、或大な洋館の横町の角の薪屋に貸家の立札が出てゐた。札は未だ眞新しい。私は猶豫なく飛込んだ。

家は細い路次を右へ曲つた其奥にあるので　門の前には藁繩の斷片や、ボール箱の蓋などが散つてあり、若い一人の書生がステッキや古傘や鍬や旗竿などを一ト纒めに、繩で結つけてゐる、其傍に、カチリとした坊主頭の小い爺さんが、銘仙の袷に羽織を著て突立つてゐる。私はツカヽヽ傍へ寄つて訊いた

「貸家を拜見したいですが……貴方が家主で在しやるので？」

老爺は、手垢のついた石膏細工か面かと思ふ、ツルヽヽした血の氣のない顔を擧げて、細い目を瞬り、大口あいて笑顔を作り、「ヘッ、切望一つ……」とお叩頭して反返る。

而して欣々と先に立つて、「實は昨日明いたばかりて、もう御覽のとほり何處から何處まで綺麗になつてをりまするが……」と言つて玄關から茶の間へ通す。

私は茶の間の先の小ぢんまりした四疊半、其から退つて狐格子の中戸を開けて、長い廻緣へ出ると、玄關の右手の六疊、其奥の八疊の座敷、座敷の違棚、戸袋、厠などの工合を仔細に見て行いた。家は中古だが、間取の都合から、部屋の樣子が如何にも落著好く出來てゐる。其て極日當の好い癖に、餘りパツとしなくつて襖や何かも此頃の新造のやうにケバ〳〵しない。庭も可也廣く、梅の老木が一杯に若葉の繁つた枝を曲らせて居るのも好ましい。

「これは好い？」と私は緣の根に突立つて、あちこち見廻しながら叫んだ。

老爺は固い頭顱の天邊を指頭で撫廻しながら、「一體貸家建てはないんでして……、」と云ふのを冒頭として、ソロ〳〵熱を吹出す。

私は好い加減に腰を折つて、「それで家賃は……。」

老爺は高い吭笛を一つグイと言はせて、「お家賃の處は十七圓でござりまするが、一ツお願したいのは、實は借手が度々變ると云ふよは、手數でもあり、餘り好い心持のものでもありませんで、萬望其三年間の御契約に……其代り、然う願へますれば、家賃の方は一圓だけ引きまして十六圓、然云ふ事に願ひませんと……、」と又口に泡を吐してベラ〳〵辯じ立てる。

私は妙だと思つたが、家賃が割安なのと、家が悉皆氣に入つて了つたので、左に右考へて見やうと云ふので、其日は引退つた。歸り際に、

「もし御契約するやうでしたら、明朝夙く來ますが、貴方は……。」

「私は、」と老爺は頷いて、「自宅は指ヶ谷ですが、何、晝間は大概此方へ來てをりますで……其と云ふのが、此の門の前に住んでゐる婆アが實は此路次内の差配でありますが、此が其の煮ても炙いても喰へた代物ではないので、私が此に住つてゐる……元は此に住つてをりましたので、其時分から私の大嫌な因業婆アで……」と毒々しく云つて、「其奴に世話燒すのか業腹で、家の明てるうちは必ず晝間だけ出張してゐるやうな譯で……然云ふ御都合ならば、明朝は一つ、早くから出張してをりまするから、是非切望お間違なくと……」先刻拔いておいたらしい折釘を新聞紙の片に包みながら、釘拔と一緒に、几帳面に棚の中折帽の傍に置く。

私は莨を一本、火入から火を移けて、其まゝ分れた。

二

引移つたのは、其から三日目の日曜であつた。

私は中學校へ通つてゐる義弟と一緒に、先づ先方へ行つて、昨日爲殘した部分の掃除など始めた。然う搆するうちに荷物の取込が始まつて、バタ、、、、二人で働いてゐた。て、第三回目の荷物が取込れてから、私は釘箱と金槌を取出して、一脚の椅子を足場とし、妄と釘を打散してゐると、義弟が傍へやつて來た。

「兄さん、門の前の長屋に住んでゐる婆アは、ありや一體何でせう。」

私はカン、、遣りながら、「差配ぢやろ。此路次中の差配ぢやろ。」

「何だか知らないが、實に厭な婆ですな、」と吐出すやうに言ふ。
「ふん、何如云ふ婆だ？」私は椅子から降りて訊く。
「それは當然の人間ですけれど……長屋の人間にしては寧ろ品か好いくらゐです。けれど何だか不厭な奴です。ツンケンした、不厭に澄した婆です。其も可いですけれど、丁と格子戸の所に頑張つてゐて、目を皿にして人の荷物を一々注視しとるです。」
「可いぢやないか。」
「けれど、彼奴は必然此地内の金棒引なんてせう。何ても口喧しい、煩い婆に決つてゐます。」
「何ても可い。此方は大屋の直轄だから……。」
「そりや然てす。—處が、あの大屋の爺も何だか氣に適はん奴ですな。」
「何如してだ？」私は少し不平面になる。
「私が今朝敷金を持ちて行つたら、何だか莫迦に細い事ばかり言つて、座敷と四疊半の戸袋の戸が張替へたばかりだから、那の金が少しでも剝げたら、出る時替張へてくれろだの、庭の植木一つ、石一つでも位置を替へては困るだの、それは實に煩い奴ですよ。」
「それが大屋の通有性ぢやないか。」
「ですけど、極端ですもの。彼奴は必然冷酷な奴です。」
然言つてゐる處へ、緣先からヒヨツコリ禿頭を出したのは其大屋て、此方は些と狼狽氣味てあつたが、

先方は其持氣振もなく、

「このな、圍ひが些と杜漏になつてをりまするて、若しお氣に懸るやうでもあるなら、一つ修繕しやうかと思ひまするが……。」と、能く聽くと上方‥少くとも遠參あたりかと思ふ訛が些い〻耳に障る。其で莫迦にケチ〻した、一酷なやうな處のあるのが、誰の目にも見え透くやうて、正直てはあるが、金になると一厘一毛も容赦しないと云ふ風がある。其は、近頃世間に行らない、樽代請求を主張して、一歩も退かなかつたのでも解る。が、溫かい國に產れたゞけに、汚いながらに感情は露出て、性情が澆く出來てゐるから、何處かに愛すべき點がないてはない。

私は早速に、「それは結構……。」

「それからな、此門の前の婆アてすが、彼奴が誠に口煩い、意地骨の曲つた奴て、何彼につけ面倒てすから、可成お交際はなさらんやうに、此だけは私が御忠告して置きますので……然し又そんな奴てすから、引越の蕎麥くらゐは少し御奮發なすつて。」

「は、宜しい。が、あの婆さんは何てすか。」

「他は其の、此界隈の地主……家作も澤山有りますが、御存の角の××さんに長年お針を勤めて居た女てすよ。××さんは名高い敎育家て、大臣にこそなられぬが、金を拵へる段になると其は巧いものて。世間ては學校を二つも持つてをられる事は知つてをるが、大地主、家作持てある事は餘り知らんやうてす。あのお針が矢張××さんのお國の者て、彼處は寒い山國てすから、人間もナカ〻我慢づよく出來

てをります。其所爲てもないが、私とは何如云ふものか、以前から反が合はんので、彼婆アに意地を突張られると云ふと、道の私がはや迚も敵はんので‥‥‥一例を擧げて申さうなら、私の此門のうちに、其は枝振が面白い古い松の樹があつたと思召せ。其枝が大概那の婆アの見苦しい庭先へ突出てゐる、其をヤイ〳〵喧しく云つて、いや泥坊の足場になるの、縁先が暗いの、何の彼のと苦情を持込んで、到頭其松を切らして了ひましたよ。‥‥‥まあ、そんな奴ですよ。」

「然ですか。」

「然云ふ譯ですから、まあ可成ならお交際なさらんやうに‥‥‥。」

「然ですか。心得ておきませう。」

老親は辯るほど辯ると、置忘れておいた此間の折釘と、薄い座布團一枚とを取出して、莨一服吸はず、悄々還つて了ふ。

三

其晩くらゐ心持よく眠つた事は、恐く稀であつた。朝砲兵工廠の勞作の激しい物音に驚かされて目が覺めると、木が多い故か、家が天井高く廣い故か、呼吸、心臟の鼓動も日頃にない健かで、張詰めたやうな血管を、好い心持に溫かい血が漲つてゐる。私は何かなし、旅行先で、旅籠屋の二階にでも寢てゐるやうな氣がして、目をパチ〳〵、物稀しい部屋中をアチコチ眺めまはして居た。加之、森とした靜寂も、氣の遠くなるやうな初夏の幽婉な晩景も、冥想には持つて來いだが、然し此の朝の活動の聲も亦好

いもので、頭腦が單純であるだけに、晝中のよりも可厭な氣持は爲ない。

朝間の涼風が、薄すり日の差した障子から部屋にも其氣を通はせて、胸も頭腦もサワ〳〵とするやうだが、庭へ出て遊んでゐる子供の聲も、常時よりは樂しく、爽やかに響いて、ゴタ〳〵荷の取片着をやつてゐるらしい勝手の騷も、何だか愉快さうである。

此引越當時の飯は、何となく氣味の惡いものだが、私は其感もなく、常時より一碗も餘計に喰つて、其から額の位置を直しなどしてゐると、もう出勤の時間だ。其處へ大屋が一人の職人を連れて、竹や繩をシコタマ脊負込、自身も仕事着らしい短いどんつくを着て、草履穿て、チョコ〳〵と庭を往つたり來たりして居る。

其日は五時頃歸つた。門前まで來ると、例の因業婆に逢つたが、思つたよりは奇麗な婆さんて、此は今外出と見えて、ネルの單衣に八丈の道行など着込んて、切髮の頭も下品でなく、腰は屈んでゐても、大軀の、ヅンと押出が好い。それて擦違ひざまに、些と會釋したばかりで、婆さんは大樣に、然し何處か意地惡さうな目て、ヂロリと私の顏を見て行く。成程薄氣味惡くもある。

私が靴を脱いて上つて、部屋へ通るか通らぬに、妻はバタ〳〵やつて來て、蒼い顏を爲ながら側へ寄つた。而して洋服を脱ぐ手傳も爲ず、突如息の逸みさうな調子て、

「貴方〳〵、私可厭になりましたよ。」

私は何を言ふかと思つた。

「此家はね、厠の方角が惡いんですつて。成程然う云へば、奥へ引込んで、陰氣な可厭な厠よ。」

「誰が其樣事を言つた。」

「前の婆さんから聞きましたわ。」

「あの婆の言ふ事なぞ……。」

「其だけなら可いんですけれど、他にもつと〳〵可けない事がありますの。」

「何が然う可けない？」

「何がつて、貴方、此處で何時かの有名な縮屋殺しが、妾と一緒に棲んでゐたんですと。」

「棲んで居た？ 棲んでゐたつて可いぢやないか。殺したのは餘所なんだから。」

「でも可厭だわ。」と妻は言ふうち、身柱がゾク〳〵するやうな顏て、氣毒なほど怯えてゐる。

「だから私、初めから何だか、パッとしない家だと思つて……。」

「誰から一體そんな事を聞いたのかい。」

「前の婆さん！」と瞳子を眤と私の顏に据えて、「前の婆さんが敎へてくれましたわ。」

「揶揄はれたのだらう。」

「いゝえ、あの婆さん其樣人の惡い婆さんぢやありませんよ。……それて、幾度借手がついても、一人も居つく人はないんですつて。此前の人など、自分で湯殿まで建てゝ、其話を聞くと、明日もう引して了つたんですつて。其前の人も、其前の人も、婆さんが敎へてやつたんださうですよ。」

「餘計な事を辯る奴だ。」と私は舌打して、上着を取つたまゝ其所の椅子に腰を下す。
妻は怪訝さうに、「ぢや貴方は知つて在したんですか。知つて居て、引越したんですか。」
「いゝえ。」
「如何ですか、」と妻は胡散くさい目容をして、「それて、あの大屋は可けないんですつて……」
「どう可けない？」
「あの吝嗇の癖に、子供の十人も持つてゐて、それが皆細い、蠢々してるんですつて。それてゐて、矢つ張妾の二人も圍つておいて、其妾に日濟貸なんぞ爲して……、」
「おい……、」と目て制する。
庭には老爺が、ゴツ／＼やつて、一生懸命垣根の手傳をしてゐる。
私はツと椽先へ現れた。其て老爺に聲かけて、「此所ぢや何か不吉な事があつたつて言ふが……。」
老爺は目をクシャ／＼させて、首を此方へ捻向けたなり、其は可笑いくらゐ萎げる。而して鋏と棕櫚繩をおつ投出すと、ツカ／＼椽先へ來て、
「やあ、あの婆アが言ふたてせう。あの婆アの言ふ事をお取上げになつては駄目ですぜ彼奴は私の金の出來たのが業腹てく／＼、それて、何だ彼だと非をつけて、私に此邸を見切せて、安く買はうと云ふ算段なんてして……尤も後て解るとてはありますが、切望まあ末永く……、」
「だけど、眞實なんてせう。」

「眞實にも噓にも奥さん、何も其樣事が貴方……もう、ずッと古い事なんてして。……」と例の又辯じ出す。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

私は妻に迫られて、一週間ばかりて此を引拂ふ事になつた。

（完）

「死者」とは豫告しをきたれど小生の都合によりて斯る小篇にて暫らく責を塞ぐヿとなりたる罪を謝す　秋聲

お三津ッさん

鈴木三重吉

(一)

緒の切れた片方の下駄を帯へ通して腰へ下げて、女竹を二本、ジー〳〵後ろへ引きずッて、片跣足で、跛を引いて、のらり〳〵歸ッて來る。表の提灯屋はもう店をしまッて門口を掃いて、剝げちよろの戶が下りてゐる。路次へはいりかけると提灯屋の障子戶がガラッと開いて、

「功さん〳〵。」

と言ッて、誰だか白粉を附けた綺麗な若いおばさんが塵取を提げて出て來た。

「功さんでがんしやうがの。まア〳〵すッくり見違へた。こッちへお出でい功さん、わたしぢやいの。もうわたしをお忘れたか。……ホヽヽ、別ッたの?」

と嬉しさうにして、塵取を置いて側へ來る。お三津ッさんだ。知らない間におばさんになッてるんだから一寸別らない。綺麗な着物を着て、黑い帶を結んて、綺麗なおばさんになッてゐる。

「まア大きにおなりたいの。おばアさんがいつの間にこんなにしなんしたろ。いくつにおなりたい?え功さん。」

背中へ手をかけて、覗くやうにして聞かれるけれど、何だか恥かしくッて、電信柱を爪でこすりながら默ッてゐたら、お三津ッさんは後ろから兩方の手頸を握ッて、

「功さんなぜそんなに恥かしがりなんす。」

と負さりかゝるやうにして、重たく二足三足たら〳〵と歩かせたが、

「あら、あんたは跣足でゐてか。……下駄は片ッ方だけかいの。……ホヽヽこんな事をして功さん着物が汚れるに。除なさいよ。もッとかう向いて。……えゝ帶ぢやにくちや〳〵に結んでおいてるいの。」

下駄をはづして、屈んで帶を結び直して、着物の土を拂ッてくれて、

「功さん、お三津ッさんがよくおんぶして上げたのを知ッてお出でるか。え？、」

お三津ッさんは齒を黑く染めてゐる。昔のお三津ッさんとはすッくりちがッてゐる。

「忘れたの？、」

「いゝえ。」

とかぶりを振ッて、五分刈の頭を繻子の帶へ横に擦る。

「夕方にはいつでもお三津ッさんとお湯へはいて、……あら〳〵また塵烟。こッちへお出でこッちへ。」

と軒下へ駈け込むと、ジアーと襲うて來て向ひの生薬屋の看板がガタ〳〵とかち合ッて、目を開けたら

町の東は黄色い畑でかくれて向ふが見えぬ。お三津ッさんは袖をはたき合ッて、

「あゝきたないの。」

と顔をしかめて箒を取ッて、片隅に掃き寄せてあッた提灯骨の削り屑を塵取へ取る。

「功さんはあの時はまだお饅頭ぢやッたいの。そしてお三津さんとこが此向ひで、隣りがお肴屋で、知ッてお出てるかい。」

「少し知ッてる。」

「お肴屋はなくなッた。向ひはいつ普請をしましたい？」

「疾ッくに。去年。」

「去年。すッくり建ち變ッたいの。功さんとこは今裏座敷にお出てるの？ほんに。二階の下へ路次が附いたいの。」

お三津さんは往來の眞ン中へ出て、鬢へ櫛を入れながらこちらの家並みを見てゐる。荷車が來る。

「功さん竹を引ッ込めて置きなさい。」

「川の所で取ッたの。屋根まである。これお見。屋根とは高いがの。」

と立てかけて置く。お三津さんは默ッて、つく〴〵昔を考へるやうな目元をしてゐる。藥屋て店をしまふ。

「功さん。おばァさんはまいにちどうしてお出る。」

「内に。」

「まだ母さんが來られんえの。」

自分は戸に縋ッて、横町のお稲荷さんの松の木の上にたッた一つ出てゐる大きい星を見つめてゐたが、何だかさびしいやうな氣になッて來た。そしてお三津ッさんが内の子ならいゝにと思ふ。

「お三津ッさん〳〵。」

と頭の後ろでおばァが、

「薄着で外へ出とッちや。」

「早うはいんないや。」

と戸の内から呼ぶ。後ろを向ひて見たら戸の節穴に灯がさしてゐる。

（二）

うす暗がりの中に佛さまの線香が一粒、短かく附いてゐる。おばァさんは炬燵の向ひに寢てゐられるやうだ。

「おばァさん。」

と言ッたが返事をなさらぬ。ランプを探して火を附ける。おばァさんはもう本當に床を伸べて寢てゐられる。頭の所にわしの夜具も出してあッて寢間着が炬燵の上に置いてある。枕もとへ踞んで、蒲團の綴絲をいぢくりながら、

「おばアさん〳〵」

と言ッたが矢ッ張り寢てゐられる。おばアさんの額には丁度兩の眉毛の眞ン中に、黒いほくろが一つある。わしが時々其上を指で押へると、目を堅く閉ッてもういゝ〳〵と言はれる。其ほくろをじいと突いて、指をぐる〳〵動かしたら

「ア」

と言ッて目を開けて、

「功さんか。戻ッたか。」

と言はれる。

「わしや寢入ッたさうな。もう夜ぢやいの今まで何してお出でた。こんなにいつまでも歸ッて來ぬとおばアさんはどんなに氣遣ふか知れんがの。板の間にお膳が下ろしてあるから、そッとこッちへ持ッてお出で。……お止し〳〵。ランプを動かしてはいけん。功さんが扱ふとつい引ッくり覆す。お膳をこッちへ提げて來れアいゝのぞい。下におかずが入れてある。そいからこの中をお見。」

と言はれるから、炬燵へ手を入れて見る。

「下ッとるじやろ。」

「何が。」

「上に〳〵。眞ン中に。」

蒲團をはぐッて見たら小さい蓋物がハンケチで包んで下げてある。ご飯が溫めてあるのだ。

「跡をとん〳〵と叩いて置かんとスウ〳〵する。……さう〳〵。もうよし〳〵。」

おばアさんは今夜は何だか力なげに途切れ途切れに物を言はれる。小さい赤いお膳を下ろして赤い箸で胡麻鹽の振ッてあるご飯に燒豆腐を副へて食べる。おばアさんは目を閉ッて額に苦しげな皺を寄せてゐられる。

「おばアさんは具合が惡いの?」

「お茶かい?そッと下ろさんと重たい土瓶ぢやから……手へかけてはいけんぞの火傷するからの。おばアさんは足が立たんからお給仕がしてやられぬ。」

「なぜ足が立たんのじやろ。」

よく見ると顏の色も少し惡い。

「さッき納屋から重たいものを提げて來しなに、どうやらしたらつい蹌ついて轉ろんだいの。只輕うに轉んだゞけぢやのに足やらそこいら中が痛うて、少し風も引いとるんぢやろ。氣分が惡うての、」

「いけんのウ。どうおしる。」

「なんの、もうえゝのぞい。かうして寢て起きたら、あしたになれア早世話はない。然しもうわし

もつまらぬものになッたわいの。」

「お父うさんが早うお歸へるとえゝのにのウ」。

「とうさんかい？とうさんはまだ中々戻りやせぬ。けふは十九日。いよ〳〵あしたからお彼岸ぢやいの。功さんや、すんだら板の間へ出してお置き。そうして、あとでこのふとんをそッちへ引ブッて行ッて功さんの寢間を敷いておくれ。どうでも早うお母アさんを貰はねばわしやもう追々世話が出來まいて。女を置いて見れば不束なわしては切り廻しが出來ぬし　嫁が來ねばいけんぞの。お近がもう少し生きて居ッてくれたら言ふ事はないのに」

と獨り言のやうに言はれる。お膳を片づけてランプの前へ膝を組んで、側にあッたマッチを取ッていぢくッてゐると、

「功さんや、おばアさんはいつ亡くならうも知れんぞの。跡でどんなお母アさんが來るやらの。…も少し目鼻が附くまで見てやりたいが、もうつまらぬ。」

と跡は口の中で言はれる。じッとして向ふの仄ぐらい煤けた壁を見てゐると涙がひとりでほろ〳〵とこぼれる。おばアさんは目が見えぬ故、

「おまへランプをいぢくるのではないかい。」

と言はれる。

「いゝえ。」

と言ッて、口をかみしめて内證でしく〳〵と泣く。そうしてゐる内に、玄關に誰か來たやうな氣がする。じッと聞いてゐても何とも言はぬ。嘘だらうと思ッたら本當に、

「ごめんなさい。」

といふ。立ッて行ッて襖を開けたら、

「わたしよ。」

と言ッて、お三津ッさんが障子を開けて上ッて來る。

「お父ウさんは。」

「ゐない。」

「おばさアんは。」

といひ〳〵居間へはいッて、

「あら、もうお休み？御隱居さん。いえ〳〵さうしてお出でなさんせ。お久しうござんす。お三津てござんす。」

と嬉しさうに浮き〳〵と云ふ。自分は、泣いた顏を見られるときまりが惡いから、入れちがひに玄關へ出たきり、いつまでも暗い中に立ッてゐる。おみつさんの調子は急に低くなッて、

「まア〳〵飛んだ事でござんしたいの。外にどッこもお怪我はござんせなんだか。」

と言ッてゐる。自分は知らないで手にマッチを持ッてゐる。何の氣もなくシュッと擦り附けて、半分燃して、フッと消す。先の赤いのが落ちかゝる。急いで障子を開けて玄關へ投げたら、赤いのがわしの下駄へ當ッてスと消える。下駄の緒を切ッてゐる事を思ひ出す。わしが直して見やうと思ッて、襖の右側を開けると、上がパッと明かッて、居間の重ね簞笥の脊中が出る。下の片隅に板が切當てゝあるのを取ると、鼠の嚙ッた穴から小引出へ手がはいるっ搔き廻して心覺えのある丁度いゝ麻繩を出して、玄關の下駄箱の上の豆ランプを點して、切れた鼻緒をすげる。心配して瘤に結んだかと思ふと、上から引ッぱッて見ればすぐ拔けてしまふし、大分ひねくり廻したけれど、とうと手に合はぬから、打ッちやッてお三津ッさんのゐるところへ行ッて、炬燵の横に座ッて話してゐるうしろ姿へおぶさりかゝッたら、

「ホヽ、どうするの、重たいく。」

と後ろへ手を廻して摑まへて、わしが素直に抱かれて横に膝へ腰をかけたら、

「ぢやから御隱居さん、まアこんな譯なのでござんす。」

とお三津ッさんは睫をうるませてゐる。

（三）

起きて見たら、おばアさんは板の間であられを煎ッてゐられる。足はだいぶ直ッた。お三津ッさんが、まだ寢てる内に來て、ご飯を焚いてお漬も搾へて置いてくれたから、おばアさんは起きずに先ッ刻まで

た。昨日また下駄の緒を切ッたのか。なぜあんなに切れ詰るのぢやろ。お三津ッさんがそれも直して行ッた。と言はれる

「お三津ッさんは。」

「もう内へ往んだいの。」

お三津ッさんはこんなにして毎日内へ來て世話をしてくれるんだッたらいゝのにと思ふ。ご飯を食べるとすぐとんく〳〵と走ッて出て、ひとりでに提灯屋の店先へ行く。赤い劍を十文字にかいた大きいお祭りの提灯が、軒につながッて下ッてゐる、お爺がいつもの淺黃木綿の筒袖を着て、汚れた絣の袋を組んだ膝へ被せて、澁色のツルく〳〵頭へ、大きな目玉の眼鏡を鼻の先へかけて、番傘へ字を書いてゐる。お婆アは奥の方で、手拭を被ッて、提灯の劍を赤く塗ッてゐる。日向へ片足の先を出して、默ッて、古疊の端に腰をかけて見てゐたら、爺さんは字を書き〳〵、

「誰かしら小坊主が來たぞ。」

といふ。

「フ、、、」

と笑ッたら、

「えゝつと、こんなはどこやらの坊主ぢやッたいの」

と矢ッぱりこちらを見ないで言ふ。

「やアいわしや坊主ぢやない。お爺の方が坊主ぢやい。

「あら。お爺は坊主か知らん。」

「そいても頭の髪が一つもないわの。」

「なんのい。髪は一ッぱい生へとるい。」

「うウそ。一つもない。どッこにもない。

「いンにや。ある。」

「やアい。」

「そいては此小坊主は明き盲目ぢや。黒ウろいのがチョン髷に結うたろが。」

「やアい。嘘ぢやい。」

「どこに／＼。」

手の平を頭へやッて、

「あアれ、ないぜ、ない／＼。あゝ／＼大變ぢや／＼。一つもない／＼。」

と、わざッとびッくりして、

「しまふた／＼。先ッ刻まてちアんとあッたのに、どうなッたろ。はアての。」

と言ッて傘をくるりと廻して、

「はゝアわかッた／＼。坊さんが後ろから來て徐ッと食べたんぢやわい。」

「やアい。」

「食べたく。ちよいと舌を出してお見せ。」

と眼鏡の上から白い目をしてこッちを覗いて、

「ほウ。長いく舌おちやの。あゝ功さんは歯拔けおちや。可笑しいのウ。歯拔けおちやく。」

と言いく字を書く。お爺が字を書くのは一遍に書かないて、同じ所を何度も繕取ッたり、後から眞ン中を塗ッたりして、とうと仕舞に大きな字にするのだ。婆さんが、

「功さん。おばアさんは足は直ッたの。」

と聞く。

「まだ大分直らん。少し直ッた。」

「惡るかッたいのウ。」

「おばさん。」

「お三津ッさんはどこへお行きた。」と聞かうとしたが、何だか氣が引けるやうだッたから、默ッて疊の解れ口を引ッ張ッてゐると、

「なアに。」

と聞くから、

「あのウ……お三津ッさんは？」

と言ッて了ッたら、お爺が、

「お三津はこの上に居る。」

と言ふ。

「どこに。」

「ん？天井の中に踞んどるい。」

「ウフ、、、さうぢやないえの功さん。お三津ッさんはの、裏の小母さんとこへ行ッとるんぞの。」

裏の二階の縫物屋だ。わしの内が提灯屋を提灯屋へ貸して、提灯屋が提灯屋の裏二階を縫物を敎へるおばさんに貸してゐるのだ。

「功さんも行ッてお見。孃さんたちが大勢ゐてぢや。」

といふ。だッて恥かしいから、

「厭ア。」

と言ッてこそ〳〵内へ歸ッて行く。

歸ッて路次の横の小猿戸を押して座敷の庭へはいると、頭の上が提灯屋の小二階だ。竹塀の根の、赤い芽の出た牡丹の木が、戸が障ッたか、はいる後ろに、微かに搖れる。斜になッて尻を擡げた松の木の下に、苔の生へた雪見燈籠があッて、そこから飛び石が筋違ひに、大股で跨げて五ッ六つ、順々に大きくなッて行ッて、椽へ腰をかけると、廣がッた松の葉の上に二階の障子が白く嵌ッてゐる。切れ〳〵に低

い話し聲が聞こえる。お三津ッさんか誰かわからぬ。手水鉢の下の苔の上に椿の花がぽた〳〵赤く落ちてゐるのが目につく。小さい木なのだけれど、花はお椀の蓋程ある。はじめて落ちた花だ。一つ〳〵拾つては、燈籠の臺の椽へ順々に並べる。こんなにして、落ちるのをはしから並べると、仕舞には燈籠の下がぐるりと赤くなる。まだ五つしかないから、少し間を開けて片ッぽべだけ並べてゐると、

「功さん〳〵。」

と上から呼ぶ增さんとこの小さい姉さんが赤と紫になつた片袖を垂らして、二階の手摺りに縋ッてゐる。

「それをあしに一つおくんなさいの。」

といふ。

「へ。」

と言ッて一つ取ッて突き出したら、上から白い手を伸べて、

「あアれ、屆くものかいの。」

と言ふ。裏から見ると花の眞ン中に穴が開いてゐる。兩手で摘んで穴から姉さんを覗いて見て、

「見えん〳〵。」

と言ッてゐると、

「早うおくんないの。」

と、せか〳〵いふ。

「なアに。あれ、かい、あしも欲しいえの。」

と、また誰か知ら出た。紺屋のお國さんだと思ッたら矢ッ張りお國さんだ。花びらを一枚むしる。

「功さん、壞してはいやいの。」

「えゝ事があつた。功さん待ッてゐていの。」

と增さんとこの姉さんが這入ッて、それからお國さんも這入ッて、大ぶして、お國さんが針箱の葢を、黄いろくなッた紙縒(コヨリ)の繩て十文字に紮(カラ)げて手繰(ダグ)り下ろす。壁の半分までも屆かぬから、增さんとこのが、緋羅紗の下帯をといて、まだ足りぬから更紗の風呂敷を持ッて來て角(カド)をつないだ。箱は山吹の花の上へ下りて來た。更紗はたいぶお國さんの手元に餘ッてゐる。

爪立ちをして花を一つ入れる。

「も一つ入れぬと傾くから駄目。」

「ついてにも一つ。眞ン中へお入れいの。功さんのはまだあるのかいの？おまち〳〵、ゆッくり〳〵。」

「ホヽヽヽヽ」

「どッこい〳〵。」

「も少し〳〵ホヽ、あぶない〳〵。」

「ホヽヽ。」

と、赤い袖口と縞の袖口と、たがひちがひに、ぴく〳〵して、たぐり上げて、ケラ〳〵騒いで這入ッてしまふ。

「功さん。」

と、また呼びかける。

「あア？」

と言ッて、上を見たらお三津ッさんだ。「あたしにも一つおくんなさいの。」

と媚りして手の平を出す。默ッて一つ突き出したら、

「ホヽヽうそ〳〵。二階へお出てんか、功さん。店から廻ッてお出で。あんたお着物が黄イになッとるぞいの。こゝん所〳〵。胸の所をお見。」

指の先も花の粉が黄イろく附いてゐる。

（四）

大事なお彼岸だから、お寺へまゐッてくれねばいけぬ。まゐッて母アさんを拜んで來い、とおばアさんが言はれる。

お午を食べると、袂の附いた絹の着物を着て、いゝ帯を甲斐の口に結んで貰ッて、きんきらの巾着を横へ下げて、五錢貰ッて紙へ包んで帯へ挿せて、玄關へ下りて、いゝ方の下駄を出してゐると、おばア

さんが袂をつかまへて出て來て、お包みとお米を入れた袋を包んだのを渡して、

「いゝかい、功さん。賢龍さんにでもえゝからおばアさんがまゐるのでござんすが、少し具合が惡うござんすからといふて、それから永田のおぢさんに言うてこれへ上書きをして貰ふのぞの。おぢさんが一寸見えなんだら賢龍さんに賴んでもしてくれてぢや。いゝかい。まご／＼しとるんぢやないぞへ。」

と、同じ事をまた言うて、

「そしてお經がはじまッたら、ぢやアんと靜かにして座ッてお出てよ。足が痛うなッたら外へ出て遊んで來てもえゝが、よその內の子のやうに本堂の椽をとん／＼飛び廻ッたりなんかしちやいけんぞの。庭へ下りて蘇鐵の所へでも行ッて、離れてお遊びや。それから紙屋のおばさんが、おばアさんの事をお聞きたら、少しお頭が痛いだけぢやから、寢てはお出てんとお言いや氣遣うて尋ねて來てぢやといけんから。まだぢや／＼巧さん。皆言ふまでよう聞かにや。……しまひに菓子盆て豆のご飯かなんかゞ出るからの。よう零さぬやうにして食べるのぞの、あれは功さんは片手ぢや提げられぬから、下へ置いて、屈んで食べるのぞの。」

と、もじ／＼して敷居へ立ッてるのに、ずん／＼いくらでも言はれる、

行く途中て、太田屋のおぢいがビラを書いてゐるから、永い間店先へ立ッて見てゐる內に誰かしら後ろからピッと耳を引ッ張ッて、ひらりと隣りの店の暖簾の後ろへはいる。誰だらうと思ッて直ぐ附いて

はいッて行くと、ぐるりと表へ廻ッた。下から黄な天鵞絨(ビロード)の鼻緒が見える。

「やアお三津ッさんぢや。」

「ホヽヽばあ……まだこゝいらにぶらついとるのいの。」

お三津ッさんはいゝ着物を着てゐる。直ぐ手を繋いてくれて、

「おばアさんは、もう疾(ト)ッくに出たとお言ひたのに。」

と言ひ〳〵一所に行く。

「もう途中でぶら〳〵せずに、せッせとおいでや。えゝ着物を汚しなさんなや。ちよいとこッちを向いてお見。大そういゝ子におなりた。湯を使うて貰ふたのいの。鼻を拭ぐのに紙を持ッておいてかい。」

と立どまッて、たもとから塵紙を出して、二三枚はなして、小さく畳んでわしの懐へ押し込んでくれる。

お役所の角の所へ来ると、お三津ッさんは手を放(ハナ)して、

「こゝから獨りで眞ッ直ぐおいで、お三津ッさんはこッちへゆくの。」

「どこへ？」

「ちよいと此さきまで。行ッて序てに韮(ニラ)を買ひに行くの。それで蒸すとおばアさんの痛いところがすぐ直るから。」

「韮た何。」

「葱のやうなもの。早うお出て。」

と言ッてお三ツッさんは横町へはいッて、一寸こちらを振向ひて見て、お役所の板塀の下をとん〳〵と足早に行く。紫がゝッたやうな羽織の両脇に、つぼめ合はせた袖の入ッ口が二すじ赤い。少し行くと、大きな枝垂れ柳の向ふになッて、裾から上が鳥籠へはいッたやうになッたかと思ふと、

「はい〳〵。」

と、蓆を積んだ荷車が叱ッたたからもう見られなかッた。

* * * * * *

しめ〳〵とふる夜の雨の門口で貞公の大きい背中から下りる。

「おまちなんせ。序てに奥まで附いて行かにや濡れますに。功さま〳〵。」

と言ふのを、

「もうえゝ〳〵。」

と言ひ〳〵、深い路次を駈けッて玄関へ飛び込むと、居間に三味線を弾いてゐる。

「だれに見しよとて紅かねつきよぞ……」

と、低く謡ふのはお三津ッさんだ。襖を開けると、

「あゝ功さんおかへたかい。」

と三味線を置いて

「永うお遊びたいの。何してお遊びたいの。

といふ。おばアさんは炬燵の側で、火鉢にかけた土鍋でつぎ切れを絞ッては足の甲を蒸してゐられる。

「貞公がつれて來てくれたのかい。ぬれはせなんだかい。」

と言はれる。

「いゝえ、一つも濡れてはお出てません。肩の所に只ばらりと雫がかゝッとるだけでござんす。さアすぐお着かへなさいの。おいで。帶をといてあげるから。……。何が懐ろへはいとるの？」

「こウれ。」

と言ッて引き出す。

「なアに。あい、千代紙を貰うて來たの。」

「これお見。猫がだん／＼お湯へはいッてる。猫のお湯屋ぢやいの。ほうれ、こいつは脊中を摩ッてるがの。こいつは……」

「さゝ早くお着。風を引きます、風を。」

「功さんはお寺で、言うた通りにおとなしくしてお出てたかい。豆のおまんまが出たろ？」

「いゝえ。芋と蒟蒻のまゝぢやッた。蒟蒻は甘うないから、みんな撰ッて紙屋のおばさんのおまゝへ入れてやッたい。」

「ホヽヽ、まア。」

とお三津ッさんが笑ふ。

「これからそんなお行儀の悪い事をするもんぢやないぞの。」

「それから歸りに雨が降ッて、紙屋のおばさんが内へ來いとお言ひたから、そして貞吉をおばアさんの所へ言うてやらすから、づうと夜までお遊びとお言ひたから……」

「また風呂敷をどこかへ忘れて來はせぬかい。」

「風呂敷はこゝにあります、お隱居さん。あの先ッ刻、男仕が來たときに持ッてきましたいの。」

「貞公が歸りに、巧さんを泥の中へ落さうか〳〵言うたから、落して見〳〵と言ッてやッたア。」

と言ひ〳〵、炬燵の蒲團の裾を枕にして轉んだら、おばアさんが、見え惡いやうな目をしてさし覗いて、

「功さんや今夜からお三津ッさんは内の子になッたんぞ。いゝぢやろ。」

と頭へ手をかけられる。

「うウそ。」

「うそじやないわの。」

「嘘ぢやいのウ功さん。」

とお三津ッさんはわしの着物を掛竿へかけて置いて、

「功さんはお三津ッさんがきらいぢやから、そいて嘘ぞいのウ？」

と微笑みながらランプの所へ座ッてわしを見る。

「うゝん。そんならほんとうぢやい。」

「ぢやアお三津ッさんはきらいぢやないの。」

「あゝ。」

「いゝや〳〵。きらいぢや〳〵。」

とおばアさんが嬲られる。

「あアれ、足をそんなにするんじやない。じッとしてお出で。お三津ッさん。どこやらまで行ッたいの。」

「どこやらでござんした。」

と三味線を取ッて構えて

「櫻花さ。わ。ら。は。落。ち。ん。……いや、あしこはまだちや。御隱居さん、何にしても、もう久しう振りませんからまるて抜けてしまいましたいの、」

とツン〳〵と調子を見て棹の手に赤い袖口をちよと引き出す。

「お三津ッさん。そんならまいにち内へ來てゐてくれるの。」

「えゝえゝ。わしやもう功さん所へ來たんぢやから夜もづうと泊るんじやいの。」

「こんばんも?、」

「あゝ。」

「あしたのばんも?」

「あゝ、これからいつまでゝも。功さんやおばアさんがもう往んでくれとお言ひるまで。」

「そんならもう他所のおばさんにはおなりんの?」

「えゝ。もうだれがおばさんなんかに行くもんぞい。のウ御隱居さん。えゝつと、も一度戀の手習ひの所からやりましよ。……………ハアッ。」

と、にこやにかけ聲をして謠ひはじめる。雨はいつしか本降りになッたやうだ。

（終）

次號小說豫告

六月發行の本誌に小說寄稿の快諾を與へられたる諸氏は下の如し。

田山花袋氏

佐藤紅綠氏

岡本靈華氏

盲目

楠緒子

大學の正門からインキ壺やノートブックや角帽が切りに吐き出される時刻である。
まだ春の淺い縹色の大空に眞晝の日輪はまばゆく輝いて居るが、南から北へ廣く一筋に續いてゐる本鄉通りは店から店へ軒から軒へ吹き通してゆく風が白刄を肌にあてるやうに寒い、その風の中を人が行く馬がゆく車が軋る砂があがる芥が舞ふ。
遠く見通すと電柱や電線や看板や暖簾や廣告の紙などが、ごた／＼と出たり引つ込んだりして幷んでゐる其廣い道路がだん／＼に狹まつて、兩側の軒と軒とが合はさつて仕舞ふやうに見える、ちようど其處が四丁目の四つ角で、電車が堪えず呻いては通つて居る、色で出したら赤や靑や紫や黃や白やの繪の具で、いちどに白紙を撫でまはしたものが、砂芥のあがる風の吹く本鄉通りの色に成らう。
その騷々しい煩さい往來の中に不圖異なつた物の音が震ふと、見ると六十を越へたとも覺える盲目の老人が靴屋の前を尺八を吹いて蟲の這ふ程に歩いて通るので、音は細く細く震へて消えるかと思ふと消えもせずに、枝と枝とに懸る蜘蛛の絲が空にふるへて切れると見えても切れずに引き延ばさるゝが如くに續いて、細い音は耳に響くよりは銳く心に徹む。
老人は大名縞の布子に蚊飛白の綿入羽織を着て、汚れた毛絲の白襟卷に頸を卷いてその頸から脊へ、

引き裂いた白木綿の切で釣つて小さな木札を懸けて居る、木札には、

娘乙江儀、此度家出致し行迹相分らず、盲目の私誠に困難致し候、何卒大方の慈善家諸君御恵を乗れさせ給はんことを祈る。

と娘を共に探して呉れといふのか糊口の料を與へてくれといふのか、更に要領を得ぬ事を書いてある、誰が書いたのであらう墨色は未だ新らしい、拙ない字で何卒の卒が率になつて垂れさせが乗れさせに成つて居る。

老人の目は此世の光に少しの未練もなく綺麗に盲ひてゐる、古びた茶の帽子を被つた額には幾筋もの深い皺があるが、皺の一筋毎には必ず落魄の今日までの誰れも憂世の物語があらう、半白の髯で半は埋まつてゐる顔も決して醜くはない、秀でた眉や隆い鼻に氏や素性があり〱と讀めて在りし昔を無言に語つて居る。

盲目なれば勿論杖を持つてゐるが、それは脇に狹んで尺八を吹く、時々に吹き止めるのは寒い風に手が凍えるからで其度毎に手を懐へ入れては、持つてゐる懐爐を取り出しては暖ためる、然ればとて人の門にも立たねば錢を呉れとも言はねば物を惠めとも乞はぬ、尺八を吹いては五六歩、吹き止めては五六歩、風に逆らうて寒さうに眞晝の光の中を覺束なささうに探りつゝたどる。

不思議な音色と異様な態に人は惹き付けられたやうに老人の周圍を取り巻く、木札を讀む、尺八に添へた唇を見る十本の指を見る、それて勝手にずん〱と往つて仕舞ふのである、老人は更に構はず、

音を持ち去らるゝ風に競ふて強く歌口に冷たい息を吹き入れる。
その時天井の低い安泊の二階の一間には、二十歳の娘は火の少ない火鉢を中に、いとし男と差對ふて坐つて語る。
『もう今日で三日になるぜ、』
と男が指を折ると、
『三日になるかねえ、』と、
女はほつとして胸を抑へる。
『お前、寒くはねえか、』
『いゝえ、お前さんはえ、』
と二人は顔を見交はす。
『今頃は、お父親ッあんは何うして居るだらう、もう、ちつとも眼は見えなく成つてゐるんだから、ちつとでも私が居なかつたら嘸難儀を爲るだらうと思ふと……』
眉を顰めて悄然と目を曇らしたが、
『お前さんと言ふ人は、ほんとに罪な人……』
と首を傾げて男の顔を熟と眺めて、涙の目を輝かして女は微笑んで見せる。
女の微笑んだ其時、本郷通りの老人の尺八は一際心に徹む音を立てゝ、寒い風が何處を吹くと、親を

捨てゝ走つた娘は高い樹の上で小鳥が囀づるやうに、いとし男と語るて有らうと、小さい時から何時もそれに人の愛を惹き付けた片笑窪のある娘の笑顔を思ひ浮べる、親は大道に北風に斯う曝されて指が凍える脣が痺れる、可愛がつて育てた娘も二十歳に成つて終に男の手へ縋つた、春が來れば花が咲く冬が來れば氷がはる、目の見えぬ親の手許へいつまでも引き据えて置かうと思つたは我が誤りか、たゞ親が吹く笛の音が、可愛い娘を今一度惹き付けては呉れまいか、三十年昔殿樣から拜領の尺八は鹿の音と銘が打つてある。

ことくと店々の硝子戸を鳴らして、餓狗が物をせゝるやうに吹いて來る北風が、さらくと砂を顏へ打ち付けたので老人は氣味わるさうに頸を振つて尺八を吹き止めると、おゝ寒むと、懷中から懷爐を出して手を暖ためる、脊の木札を讀んでゐた小僧は、くるりと前へ廻つて老人の顏を見上げた、先へ行く女學生が二人つゝき合ふては振り返る。

安泊では男が女に言ふ。

『お父親ッあんの世話を爲てへと思ふんだけれど、半纏着の職人なんぞは聟に持たねえと言し‥‥』

女は男に言はせず、

『ほんとに昔固氣の頑固なんだから、お前さん爂腹も立たうけれど‥‥斯うやつて私もお父親ッあんを思ひ切つて家を出て來たんだから‥‥‥』

何うぞ行末見捨てずにと、潤んだ目で甘えて、又たも男の顏を見ると、男も目に答へて心と心は一つに

固まる。

『お前といふものを奪りあげて、お父親あんこそ無己を怨んでゐやう、さうかと言つてお前に成つちや迷惑かも知れねえが、己らは何うしてもお前ばかりは斷念め切れねえし……』

『あら……』と、

娘は默つて聽かず、

『誰れが迷惑だつて……もう一遍言つて御覽、私こそ斯うやつてお前さんに附着て歩いて、いつぱしの職人をだいなしに爲て仕舞つて居る、口じや左樣お言ひでも何んなにかお前さんはお腹の中じや私を怨んで……』

『止しねえ、』と、

男も聽かぬ。

『是れが惡縁といふもんだ、』

『惡縁といふもの、』

と女は問ふて、莞爾と二人は默つて點き合ふ。

老人はふら〳〵と尺八を持つた儘歩む、吹くか吹くかと尺八を見ては、つぶれた目を見て子供が三人後から附いて往く。

孝行な娘は孝行も忘れて我が好かぬ鑿や鉋や鋸を好いた、孝行な優しい拳に親の肩をたゝきなが、

男の側の戀しさに怨み泣いた孝行娘は、今日は楠や檜の香に染みた男の腕に寄つて、親の事を思ひ出しては呉れて居まいか、親も娘も娘も男も、これが惡緣じやと、辛と尺八を持ち直して歌口を濕す。

抱いたり負ふたり風車欲しがるほどは、娘も親の氣儘ぢやが、島田に結ひたいと言ひ出すが最後、木屑に塗みれた歳の往かぬ男にさへ譯も無く奪られて仕舞ふ、是れが定かいと、胸につぶやく慘な聲が再び音になつて震へる、唇は紫色に凍えて、尺八に添へた十本の指は、電信柱に張つてあるカウスインキの廣告の紙が、破れてひら〳〵と煽られるやうに風に只震へて居るとしか見えぬ。

飯屋の店の薄暗い中は煮物の香や酒の醉や話聲で充滿に成つてゐる、其前へ來た時向ふから毛並の惡い大牛が石を積み上げた車を引いて、のそ〳〵と石屋に引かれて來た、とも知らぬ老人は、何やら異樣の物が顏の前に蠢くと覺えて、尺八の音を切つて立ち止まつた、向ふの避けて通るのを待つのである、すると牛もぴたりと歩み止めた、其方で避けて通れといふのであらう、角のある大きな頭を切りに振る。附いてゐる若い男は、あせつた聲を張つた。

「爺さん、避けねえか、」

老人は平氣で立ち止まつて居る、無垢の娘の魂を奪つて惡緣の絲を引いた、怖るゝならば其魔の手である、角のある動物を何怖れやうと突立つてゐる、石屋は怒つて鞭を上げて牛を追ふ、牛は忽ち體を一はね撥ねると、重い石を積んだ車が、づしんと搖ぎ始める。

「危ねえ、」と

飯屋の中から、一杯機嫌の顏を赤くして居る男が突然飛んで出て老人を左へ引つ張り寄せた、老人は平氣なもので引かれて蹌踉た身を杖で支へる、脊の木札がゆら〳〵と搖れる、石屋は徐に牛を追ふて彼方へ通り過ぎた。

飯屋の中からは更に四五人の男が出て來て老人を取り卷く、一人が聲を立てゝ木札を讀み上ると年寄を不愍がるものやら娘を悄がるものやら出來る、娘を誘惑かした男を妬くものがあると其妬く男を他の手合が又嬲るやら嘲笑すやら、各自に、さんざ饒舌つて仕舞ふと、何をいつても取り合はぬ盲目を殘して再び呑みかけの酒に暖たまるべく飯屋の店へ引つ込んでしまつた、遠まきに見て居た子供らは、わあと囃して彼方へ引いた、老人は卷かれた烟から出たやうに又歩んで尺八を吹き始める、風は一層寒くなつた、懷爐の灰も、もう盡きた時分である。

安泊りの障子の隙からも寒い風が口笛を吹いて吹き入る、銀杏返しの鬢からは、はらりとほつれ髮が落ちる、女は肩を縮めて、

『おゝ寒い、この風にお父親あんは何うして居るだらう、家に居るだらうか外へ出たらうか、怪我でもして呉れなければ好いが……』

繼ぎはぎながらに羽織も暖たかく仕立て上げて、手の屆く棚の上へ載せて置いたし手爐の火の斷えぬやうにと炭團も澤山取つて置いたし、と六疊と三疊の汚ない茅屋に親と娘が內職の人仕事に廣い世を狹く暮してゐた我家の樣を畫き出す。

『濟まねえ、』

と男は凛々しい眼尻を据ゑて、思ひ案じた腕組みを爲る。

『濟むも濟まないも、それはお前さん……』と、女は、廣い强固と爲た、縋り付いたら世間に是れより他に、自分のために氣の安まる場所は無いと見る、男の胸の邊に目を遣つて、

「私は、やつぱりお前さんに可愛がられる方が……」

と小さい聲で微笑む姿は枝の繁みて小首を傾げた小鳥のやう、睫は濡れて居る。

『靜岡の兄を便つて、ひと先彼地へ落ち付いて、其上改めて親方に口をきいて貰つて、何うかしてお父親ッあんの世話を爲ることに爲やう、』

『嬉しい何うぞお前さん、左樣してね、』

と女は涙を拭ふ。

何十人とある中て、木遣の上手は我男、節といひ聲といひ拔け出て際立つて、慓ひ付きたいやうな我男の木遣故に、大きな建築の棟木も浮くやうに空へ上がらう、その男に魂も命も打ち込んて赤い髮飾を丸髷に掛けよと、燃ゆる女の眼からは、懷しい親の面影は、やつぱり何時か消えてしまふ。

男と女とが安泊を踏み出した其時は、盲目の老人は靴屋の店から一町あまり、鳥屋の鷙鳥か鳴き立てる籠の邊を、嶺と嶺との深い谷の底て岩にせかれて噎ぶ水のやうな、物に紛れぬ世間離れた笛の音を震はして通る。

南から北へ續いてゐる道は一筋、南から北へゆく親へ、北から南へ出て來る二人と、ぱつたりと道の眞中て會合さうか、會合しても何事が有らう、親は二人と心付くまいし二人は親と心付くまい、病に盲ひた二つの眼と戀に盲ひた四つの眼てある。

（をはり）

春曉

岩野泡鳴

またも思ひに
なやむ日こそ
來ぬれ、板戸の
ひまを漏れて。

白む臥所に
夢のかをり、
殘る暖み
つつむわれや。

寧ろこのまま
ねむり入らば、
死をも知らずに
世こそ變はれ。

覺むる心は
苦をも招き、
苦をばいだきて
男泣きす。

人の知らざる
憂ひ多し、
身をば起さん
力失せつ。

白む臥所は
夢のかをり、
ゆるむ節々
花を開く。

春のあしたの
ねむりごこち、
いまだ生れぬ

身にも　あれや。

夏の日

三木露風

來る畏れ

石高の原の舊道
毀たれて郊野につゞく
夏の日の熱き日向に
蛇　は熱睡に圓き
夢を見ぬ。影はくづれて
ほろ〳〵の土に引退ひ
萎へたる小草ぞ喘げ。

そりからに高草熱き
寂寞の郊野の上を、——
ふとしもや、火の如沈び
沼の水よどみて重き
上を、つと風こそわたれ、
何事ぞ。鳥は斜に
草に落ち、雲は動けり。

沈靜の中に『眞晝』は
尙眠る息を聽きつつ
蛇　の夢を抱きて
おだやかに大擾亂の
一時の前に事なし。
されど見よ、野の雲動き
雲動き、風はわたるを。

雫

白く流るる美しき
雫は枝につたはりて
はたと落つ。
黄金の光、日ぞ透ける

朝は南にみどり葉の
伸びて芽をふく下枝より。
あな、また落つる銀の
雫は寄れり——葉の末に、
ああまたも
落つるに、魂は佇みて
ふとしも聞きぬ、幽かなる
「命」の聲を、ためいきを。

渦

合歡の樹の繁枝より
虹立ちて
淵に入る。
淵の水濃青なる
渦をまく
「眞晝」ごろ。
とろ、とろと渦の音——

夏の日は
眼ざめたり。
天地はさながらや、
骸光る
穢のむくろ。
つと起りすべりゆく
蛇うつす
水の上。
とろ、とろと渦の音
夏の日の
晝さがり。

靄の日

細越夏村

靄の日あたゝから
薄黒き低き空の

叢れ渡る雲の裏は
明き日ぞ笑ましげの
風無き冬の午すぎ。

坂おりて又かなたに
坂を見る廣小路、
組み上げし石垣古りて
青黒き苔滑かに、
並みつゞく常盤木木立
靄帶びて夢見げの
影淡きおぼろ景色。

行き馴れし通路を
珍しう過ぎがて心地、
葷酒禁ずる碑石に
心ゆかるゝ寺の前、
冬花賣の掛け店の
今日いと床し、小鳩さへ
神々しうて駒下駄の
音を憚る花崗石敷。



渡邊甚之助

○

たわたわと黄の蝶二つわれによる霞の姫のみつかひのさま

花のみち露よりふけるあさ風に黒髪まかす八少女の群

つたなかる骨性なれや君見れどさびしさ去らぬあさましき胸

誘惑はわれによりくるかゝるとき斧もて斷てと心きほひぬ

わが心ものに色なき蕭條の枯野に似たるさびしらに居ぬ

あめつちに古き愁のよみがへる夜ともさびしや

遠かたの鐘

〇　小木保烏城

貴人を小簾ごしにみる心地にも御園櫻は靄して咲きぬ

おほひるめ黄金の光地になげて櫻花さく八洲照しぬ

春の日は美き子が詩の料となり華やぎつゝも暮れにけるかな

玻璃の窓落花の雨の朝ぐもり詩は小さく悲しくなりぬ

春の水君がおもひや流れ來と花の枝もてしがらみつくる

〇　鷲尾美雲

飢ゑぬれば恒心みだれ斧振ふ幾百の子をあはれとぞ見る（足尾の暴動をきゝて）

そと入れば御袖に掩ふ一卷を「伊勢」と推しぬはたたがへりや

常闇の悲哀の園にみとめたる花一輪を希望といふや

笹の家に幾人の子と睦語る鳥もあるべし春の日の雨

〇　川俣冬青

いざ酌みて一斗の酒をのみつくせ花と國とのわかれなる日ぞ（洋行する人を送りて）

目閉づれば君の瞳の花となり櫻となりてほろとちるかな

わが胸の情の國の王としてさくらの下に君立てりけり

〇　野の人

胸に住むなにかは知らぬ彩鳥のかなしき歌に今日も泣きしか

破れたる昨日は遠し百とせの後の思ひに泣く日ともおぼせ

をさなうて人にすねたるみ寺ごもり泣きてたのしむ身となりにしか

〇　金城白霓郎

濃みどりの木立にまかれ脊戸畑に蜀黍たかき遠家おもふ

春の雲二つにきれておもむろに塔そびえ立つ山越えてゆく

巣ごもりて憂愁もつ子のかなしめるさまして居たり雨の日鳩は

○　小林狂霞

雪かつぐ山むらさきに黄昏れて裾野の月に灯のおぼろなる

北國や小家に母と炬燵して山毛欅に雪する冬をこもりぬ

あさ風に驢馬してゆけば雪としも柳絮みだるゝ江の南かな

うす月にけしの花ちる磯の家たる日ありとも遠世をおもふ

○　西川哲水

春の月曇りもあへずてりもせぬ我胸に似て光りのうすき

大地はいといとうすき被衣して眠るさまなり春の夜の月

春の夜や思はれ人の黒髪と白きうなじに月ほのに照れ

○　中川靈波

ほとゝぎす大江あくる細雲の赤ら引きたる夜明け方かな

若葉青葉茂れる路をまどひ來ぬ戀しき君が灯やゆるとて

○　杉江爽籟

春はきぬ都の兄が晴衣を縫ふべき絲をひとりつむがむ

朝の日や夢かたるごとうぐひすは李の宿にいとう鳴くかな

○　塚田裾水

緋桃さくころとちぎりしかりそめの面影ぴとよ春の湯の山

三月のよき朝あけや我が魂の往ぬべき日ぞと風は吹くかな

○　原田鳴弦樓

京の寺の花の小雨の朝の庭いまうぐひすが禮讃誦すよ

わたつみの果よりひゞく曉のうたに磯は黃金の波になり行く

○　奥瀬霞翠

名は知らず紅の小花に通ひ來る黑き蝴蝶の胸に覺ゆれ

かゝる夜は珊瑚小島のおぼろ月螢女の戀をふと思ふかな

○　高橋葦水

春の日の障子にうつる鳥かげに訪ひます君と心とゞろく

海草の香する磯邊をさまよひぬ君のみ夢に入るとおもひて

○　鷲尾血紅星

木枯の夜の港や大艦はうめくが如き聲して着きぬ

○　橋田濤聲

許しませ罪の我なり天人の面影人をしのばざらめや

○　香川里霞

うたがひはいみじき事をいひはやし心の殿をさわがしにけり

曙やときくれなゐのおん袴すゞしの白の御衣召しぬ夏

○　鈴木康

禁斷の果實もつまず恥知らですごす此世に光榮あるかそも

恐ろしき足尾の鑛山にゆくといふ工夫と語りぬ春雨の汽車



五月雨

五月雨やさめて又ねる寢草臥　へき
五月雨や松明振つて人遠し　同
五月雨や一燭ともる地藏堂　同
五月雨の古き宿屋に泊りけり　同
五月雨や待てば貸本屋も來る　同
五月雨や賣家見に入る裏戸口　同
五月雨や朝寢も慣れて長旅籠　同
桑畑に迫る出水や五月雨　同
五月雨や三味に入る俳太祇　同
裏町に綿打つ音や五月雨　紅骨生
窓を掩ふ芭蕉切らばや五月雨　總子
五月雨や馬首たれてひかれ行く　雪峰
五月雨や御坊〳〵の草茂る　方外

五月雨や花なくて伸ぶ鉢の草　朱郎
講中の脚袢草鞋や五月雨　青梅死人
對岸の煙突高し五月雨　江村
さみだれて長し短し川の杭　柳子
五月雨や松の木多き南禪寺　壺翁
青桐の幹を青うす五月雨　泰山
五月雨にひねもす留守の苦吟哉　骨壷
村塾に拍子木鳴るや五月雨　蓼花
五月雨や莚吊るして藏普請　樵風
徵發の昔語るや五月雨　同
緋鯉見ぬ池の無聊や五月雨　京夢
家に古き機織臺や五月雨　同
五月雨や狸のやうな僧に逢ふ　洛燕居
百と數ふ朝顔の芽や五月雨　同
竹植て椽に端居や五月雨　水圃
納屋隅に小笹生ひけり五月雨　同
五月雨や絲かけなほす謠本　華外
別れ途の一本松や五月雨　同
五月雨や祭がへりの牛車　姑洗
泥くさき泥鰌の汁や五月雨　同
新らしき橋かゝりけり五月雨　稚草

戀ならぬ合ひ〳〵傘や五月雨　同
五月雨や鰻の上るとゞろ落ち　青城
五月雨や虎杖伸びし城の鮭　同
水鷄啼く池の柳や五月雨　十湖
五月雨や刺身庖刀の錆を研ぐ　同
五月雨や我が庭犯す物の蔓　同
早咲の薔薇の蕾や五月雨　夜光
五月雨の湖に鱒取る小舟かな　同
卯の花の散つて二十日や五月雨　同
五月雨や織り進まざる地織機　小魚
郭公啼かぬ夜はれし梅雨かな　同
朝顔や梅雨の垣に二三尺　同
五月雨や外國へ行く船の人　沐雨
五月雨や松盡きて見る村百戸　同
五月雨や車て過ぐる橋長き　同
八尺の天水桶や五月雨　天馬
校倉の戸の花苔や五月雨　同
五月雨の酒庫に樽打つ響かな　同
五月雨や重く振りたる御鬮箱　鐵洲
五月雨や庭に流るゝ鍋の煤　同
天窓の紐のしめりや五月雨　同

蓴菜の花咲く池や五月雨　磨劍
五月雨や里正が家の梅熟す　同
阪下の博勞旅籠や五月雨　同

募集課題

芍藥　五月十五日〆切
蚊帳　六月十五日〆切

應募俳句は東京市本鄕區駒込曙町大谷正信宛の事。

附記す、本號の課題に應じ給ひしは四十八名にて、句數は蘿花氏の百二十、小魚氏の百三、天馬氏鱶洲氏の各百、稚草氏の八十、青梅死人氏の七十一、磨劍氏の六十、骨董氏華外氏の各五十、十湖氏壺翁氏夜光氏姑洗氏水圃氏樵風氏の各四十以上、へき氏總子氏洛燕居氏朱郎氏沐雨氏の各三十以上等にて前號の應募句數に劣らず仲々に多かりしが、本回も亦あまりに好き句を見出し得ざりしは選者の遺憾とする所なり。

なほ今後は一題につき應募句數を五十以内と限るべし、かくすれば却て幾度かの推敲を經たる好句を見出し得ることと信ずればなり。



青年大會及び救世軍大會所感

秋骨

余等の始めて小學校に入りしや、時の敎科書は米國に於て用ひられしウィルソン讀本の飜譯なりき。後ち英語の學習を始めしや、其敎授せられしものは同じくウィルソン讀本の直譯なりし。爾來年を經る事二十餘、今や外國文物の輸入は益々滋からんとすれども、最早直譯の時代は過ぎて、凡ての事物は全く吾れに飜譯されつゝあるなり。そは獨り文敎の上に於て然るの

みならず、吾が現社會の事物大抵飜譯にして、現代は則ち命じて飜譯の時代といふを得べし。凡そ形而下の事物の輸入は直譯も亦可なり。或はそれ直譯ならざるを得ざるべし。然れども思想界の事に至りては、素よりその獨創ならん事尤も願はしき事なりと雖も、已むなくんば飜譯ならざるべからず。飜譯は一面に於て外國の事物なると共に、一面に於ては必らず獨創の跡の刻せらるゝを免るゝ能はざればなり。

基督敎はすでに日本に飜譯されんとせり。只飜譯と共に其本來保持し來りし敎義が果して繼續されつゝありやは頗る疑問なり。一面に於てはすでに全然本來の宗敎と異りたるものとなり了せる所なきか。碩學の聞え高きホール博士は近者公堂に演說して、基督敎の內觀的側面はこれを東洋思想に待たざるべからずと說破せりとか。而して吾が基督敎界は博士の此の所說を以て卓見高論として迎へたるものゝ如し。余は所謂基督敎の主張を有するものにあらず、はた碩學博士の言說を評論するの資格あるものにもあらず。然れども余の感ずる所を率直に言はしむれば、余は博士の此の意見を以て自己が保持する基督敎の大本義を滅却し、甚しく基督敎を侮蔑せるものなりと信ず。余は一人の敎徒の立つて此れを論駁するものなきを怪む。一神的の基督敎と東洋の凡神的傾向とは、其敎義に於て到底一致するものにあらざるなり。余の聞く處にして誤りなしとせば、博士は其新說のため屢々敎界の正統派より指彈せらるゝ事ありとか。これ素より然かあるべき事なるべし。余にして博士の說なるものを正當に了したりとせば、余は博士を以て基督敎正統派の人と爲さゞるは勿論、一神論者としてだに視る能はざるなり。然りと雖も日本に於て博士が斯くの如き意見を公言し、而も一人の異論者を見ざりし所以のものは何ぞや、曰く基督敎が日本に飜譯されたるを以てなり。基督敎の日本に飜譯されたるは、則ち一面に於て宗敎の上に獨創の立脚地を得たるの證左となすを得べし。基督敎徒の屢々用ふる日本的基督敎なる語は頗る怪しき意味を有すと雖も、兩部合一の如き新現象となるべき前提たる

やも知るべからざるなり。

時代の飜譯的趨勢と共に、基督教界も斯くの如く飜譯の時代に入れるに際して、なほ獨り直譯を以て頑然として孤立するものあり。余は其忠實と至誠と其勇氣とに敬服す。孤立するものとは救世軍なり。救世軍は青年大會に何等の關係を爲さゞりしが如し。其行動は常に他の教派のそれと別途に出で丶而も其元氣常に他派を陵ぐものあり。それ救世軍は多く教義と教理とを說かず、むしろ實際の事業に專心するが如し。此の一事は恐らく世の同情を惹く所にして、余と雖も亦其の事業に對して敬意を拂ふを惜まざるなり。然れども其方法手段に至つては頗る同意し難きもの多し。余はかれの方法手段を指して、これを西洋の直譯と叫ぶ。而して余は今の時に當りて西洋の直譯が吾が社會を害する所多くして益する所極めて少きを信ずるものなり。救世軍の本源たる英京倫敦若くは米國の大都府に至りては、或はそれかれが如き手段の必要もあり、はた功を奏するの場合もあるべし。街路の雜沓は博覽會開場の日に於ける上野公園のそれにも增して甚しく、常時の人心また靜穩なる能はず、常に猛火に追はれたるが如き狀態にあるものに對しては、異樣の服裝をなし軍隊的に旗鼓喧噪して道路に人を要して以て道を說くの要もあるべく、また自から然らざるを得ざるべし。然れども吾が日本の如きは東京市が如何に雜鬧すると雖も、要するに靜肅なり平穩なり、英米に於ける田舍なり。此の田舍に住むもの、自から靜思するの餘裕あり熟慮するの餘地を有す。前記ホール博士の內觀なるものは斯くの如き所に於て能く荒む事を得べきなり。由來吾が國民は靜肅なり穩健なり、而して斯くの如きは吾が美德なり。然るに救世軍の手段に至りては全然吾が此の風習に反して、この美風を壞滅せんとするものならずや。かくの如き運動に對して、吾が靜肅なる人心は果してこれに耳を傾くべきか。若しこれに耳を傾くる事ありとせば、余はこれを以て吾が長所美風を毀損するものとして、極力これを排斥せざるを得ず。太鼓喇叭は緣日若くは出火場裡に於てこそ調和すべけれ、

吾が靜穩なる市府に於ては不體裁沒趣味の甚しきものにして、これに依りて吾が人心の荒蕪せらるゝもの幾何なるや知るべからず、由來宗敎道德の考察に於て歐米の人が吾れに勝りて高遠深大なりとするは甚しき誤想にして、吾れこそ此れ等の點に於てかれに對して敎ふべき地位にあるものなり。殊にかの最大多數の人士が有する思想は極めて單純なるものにして、吾れの如き高尙にはた趣味あるものにあらず。かれを以て宗敎の本源の如く考ふるは今や昔日の誤解なりとす。余は只滿心濫りに自から尊大を示して喜ばんとするものにあらず。心あるものは彼れ歐米に於てもかくの如く思考するや必せり。

さらに顧るに、抑も吾が人心は西敎直譯者の口にするが如く、しかく墮落せるものなるか、果して吾が社會はかれ歐米の社會に增して腐敗せるものなりや、余は斷じて吾れの彼れに勝れるものあるを言はんとす。吾が國民はしかく急速に救濟せずむば滅びんとするが如き狀態にあるものにあらず。素より余と雖も西歐の長所はこれを認むるに吝ならず、西歐崇拜に於て敢て人後に落ちず、然れどもそは宗敎若くは道德に於けるにあらずして、かれをして特色あらしむるものは全く他の方面に於て存在す。こは他日別に論ずる處あるべしと雖も、少くもその今日の先覺者なるものが謂て以て道德となし宗敎となす所のものにあらざる事を斷言せんと欲す、從つて余は西敎直譯者の吾が德風を難ずるの甚だ其當を得ざるを信ず。况や太皷喇叭の救世軍に至りては、吾が國民の品性を壞る事あるも、これをして昴上せしむるの道にあらざる事を斷言して憚からざるなり、若しそれかの慈善事業の如きに至りては、必らずしも救世軍の態度に依らざるも遂げ得べき事にして、むしろ靜肅穩密に行はるべきものにあらざるか。なほ聞くが如くんば移民政策の上に救世軍の力めし處多大なるものありといふ。斯くの如きは其事業として頗る多謝すべく、其生命また此邊に存すべしと雖も、そは一個の社會的事業に屬し救世軍特有の本質とすべきにあらざるなり。

さらに顧つて見れば余は吾が爲政者若くは上流縉紳の無定見に驚く。平素は宗敎の何たるをも考へず、はた顧みだもせざるものが、靑年大會の開かるゝに際してや、遽々然として巧言玲色、歡待これ足らざるを恐るゝが如くなりき。而して今や救世軍のブース氏來ると聞きては、また東京横濱の市極力歡迎に奔走す。余は靑年の煩悶なるものを恐れ、社會主義を恐るゝ蛇蝎の如くなる、政府と縉紳とが何が故に斯くの如き國民の性情を改めんとする運動を拒絕排斥せざるやと怪む。

靑年の煩悶は政府の心痛を起せし一事實なりき。而して基督敎は少くともかの煩悶を呼び起せし原因の一なりとす。社會主義は吾が警察の厭ひて殆んど國賊視する所、而して救世軍の主張と行動とは、これを論究すれば蓋し社會主義の傾向あるを免れず、然るに今や爲政者と縉紳とは相率ひてこれを歡迎す。その闇愚無定見むしろ笑ふべからずや。吾が基督敎靑年會と救世軍とは先づこれ等歡迎者の救濟を第一の急務とするの要あるべし。

道塗說を爲すものあり、靑年大會の開會も救世軍大會もみな政府の企劃に出でしものにして、外交上基督敎列國の歡心を買はんがための一策に過ぎずと、日露の戰爭に際して基督敎界の宿老某々氏の外遊ありしも亦政府の劃策に出て、今の大會も當時より豫期せられしものなりとか。蓋しこれ眞に途上の臆說ならん、基督敎界内外の士かくの如き兒戯に類する企圖に乘ぜらるゝものならんや。然れども現時政府上下の行動より見んか、則ちその相率ひてむしろ敵視すべきものを歡迎して至らざるなきを見れば、人をして或は斯くの如き企圖ありしかの疑念を此の間に挿ましむるも、何の言辭がこれを辯じ得ん。果して斯くの如き事あらんか、余は爲政者に告げんと欲す。曰く救世軍の如きを歡迎するは、基督敎國の歡心を得るの道にあらず、何となればかの團體は現時に於てこそやゝ重きを爲すに至りしとは言へ、なほ其本國に於ては識者の間に侮蔑を免れざるものにして、これを歡迎するはたゞ〳〵吾の無

識を暴露するに過ぎざればなり。

同時に余は救世軍のかく歡迎を受けたるを見て、頗るその發達のためにこれを惜む。何となれば救世軍は迫害追窮の間に立ちてこそ其本領を發揮し、軍隊として世と奮闘し得るなれ。しかく歡待に接しては恐らくは其力を用ふるに處なく、はた他日若し其眞相を發露するの日に至らば今日の歡迎者は全く道傍の人となり了して、失望は迎ふるもの迎へらるゝもの兩者の上に起らん。吾が救世軍の士此れしきの事相を了せざるの理なし、蓋し自然の勢如何ともなすべからざるものあるか。

滑稽なる世や、好個の喜劇かな。經世家のなき久矣。

平和的攪拌

麻畦

文化を進むるには人類相互の一大觸接を要し、一大混和を要し、從つて一大攪拌を要す、猶ほ醍醐を釀すにも似たり、それを釀さんには先づ攪拌なかるべからず、米に麹糵と渾れなく觸接し渾れなく混和せらるゝところ其處に醍醐沸々と起りて一味甘美の醍醐は成らん、吾人は靜に史を繙くに紙上常に血痕の斑々たるあり、誰か父母あらざる、誰か兄弟あらざる、而かも吶喊の聲をば斷末魔の叫びとはして幾多の壯丁が命を露と爭ふこと、此感先づ胸に迫りて坐ろに來る腥風に快き感じはせず、されど別樣の見地よりすれば吾人は唯だ一の麹糵にあらざるか、斯くて戰爭は吾人に一大攪拌を迫りて文化の美酒を釀さんとするにはあらざるか、若し文化の促進を吾人の理想とせば、吾人は已むを得ざる運命より片言にもあれ隻句にもあれ、吾が祖先を屠り我が骨肉を殺したる、古來國の内外幾多の大小の戰爭に向つて謝辭なかるべからず、歷山王の長伐十字軍の遠征乃至は匈奴の跳梁にも、更に近くは日淸日露の兩大役にも謝辭なかるべからず、左れどそは餘りに高價を要求す、血を盛れる肉を要求す、文化の促進は望ましけれど、斯くて一大攪拌も望ましけれど、左迄の要求には堪えがたしとすれば別に平和的攪拌の方法なかるべからず、明治は四十年、此東京勸業博覽會を期として幾多の集會催さる、曰く萬國基督教青年大會、曰く全國佛教徒大會、曰くブース大將歡迎會、曰く全國宗教家大會、更に又メソヂスト教總會もあるべく、その他全國辯護士、全國新聞記者等と、大會大會の名はあらゆる社會にも波及するの觀あり、それも可し之も可なり、吾人は獨り海内のみならず、更に海外の名士を引接する今年の如き我國に取りては實に無比なるを思ひて、その所謂平和的攪拌ともいふべきものあるを喜ぶものなり、會の性質如何の如きは今は必ずしも論せず。



電車とイブセン

學究生

日本の進歩は驚くべきものである。實に突飛である。少し油斷をして居ると忽ち時世に後れる。露西亞とは戰つて勝つた。世界一の軍艦が建造された。自働車の會社が出來た。萬國基督教青年會の大會が開かれた。變轉は頗る急激である。併しながら斯くの如き進歩かくの如き發達は重に外形を主として居るやうに思はれる。多くは虛榮に流れて居るやうに考へられる。余一個の考から言へば、日露戰爭がすでに一種の虛榮で、また此れに依つて多くの虛榮的思想や虛榮的事業を養成し誘引したと思ふ。基督教青年大會の如きに至つては虛榮中の虛榮で、事が精神界に亘るものである丈けいよ〳〵其弊害も多い事と察しられる。尤もこれは政府の使嗾に出でたるものであると言へばそれまでゞ、只利用された宗教側の憐むべきに止まるのであるが、余は斯くの如き事を以てあまり世の中の慶事とは考へないのである。

此種の新事業新傾向のなかに、尤も長大の進歩をなし尤も多大な功果を收めて居るものは電車であらう。これは決して虛榮から出た事でない。其の事業は世に實益を與へて居る。從つて其發達は實に偉大である。現時東京市内にそれが何哩延長して居るか知らぬが、倫敦や巴里や伯林のそれの如きは、到底比べものにはなるまい、米國の大都會と雖も恐らくは此れほど便利にそれが四通八達しては居まいと察しられる。余は今言つた如く此の電車を以て決して虛榮の裝飾とは思はぬ。其實際世間に與へる利益は漠大なるものであると信ずる。併しながらそれにも拘はらず、これも亦時勢

のやむを得ぬ處か、形が先きになつたのてはないかと思ふ。少くとも少し早く出來過ぎたのてはなからうかと思ふ。否な早過ぎたのてはないが、世間が未だこれを正當に用ゆるまてに進んて居ないと思ふ。其證據には電車に付ては苦情が百出てあつた。電車が人を轢き殺した、停電した、車掌が不親切てあるといふ、電車側に對する非難は盛んてあつた。併しながら更らに世間の方を考へて見れば、非難すべき點は一層甚しいのてある。乘客のこの機關を利用するまてに進んて居らぬ處から種々の不便を起して居る事は一々述べられぬほど多くある。そして此の電車の通ふて居る處の左右は泥濘てある。さて電車は形而下の事てあるが、これと同樣な事が形而上にもあるかと思はれる。則ち歐洲の新思想新文學を盛んに輸入紹介する事がそれてある余は題して電車とイブセンと記した、併しそれは必らずしもイブセンには限らぬ、只現下尤も流行して居る此の詩人を新思想の代表として擧げたのてある。

イブセンの戯曲は新らしい者てある。其思想は現代の活動と傾向とを示して居る。余はこゝにイブセンの價値其文藝史上の位置を論ずる事は出來ぬ。併し其現代の大文學てある事は最早確定して動かぬ處てあらう。今吾が文壇は――少くとも其進歩したる一部は此のイブセンを紹介し研究して居る。中には或はイブセン以上の高い考を持ち、イブセン以上の立派な思想を鼓吹して居る人があるかも知れぬ。これは頗る結構な事て又立派な事てある。これ等の人々の吾が文壇に寄與する利益は漠大てあらう。恐らくは後來に發育すべき種子の播下として、交通の上に電車が與へる利益にも勝つて居る者があるかも知れぬ。併しながら此の非常に進歩したる思想、文學は一斑の公衆には充分に了解せられない。從つてこれに對して苦情が百出するかも知れぬ。或はすてに百出して居るかも知れぬ。或は人を轢殺す事がないとも限らぬ。電機の不慣な技師に依つて取り扱はれるやうに、眞實にイブセンを了解する事の出來ぬ場合もあらう。今の讀書社會のイブセンを讀むのは多く英譯に依るのてある。果して英譯がノ

ルウェー眞正の風味を傳へるか、また傳へたにした處でそれを了解し得るであらうか。さらに失禮なことを言へば、始めから能く讀まずしてこれを口にする人はないとしても、英譯さへ眞實に讀みこなし得ぬ樣な人がないとも限らぬ。萬一斯くの如き怪しい技手に依つて動かされた日には、イブセンなる電車は停電する事もあらう。或は線路外に逸する事もあらう。煩悶と稱して靑年が屢々自殺を企て若くは果した事もあつたが、此れ等も新思想の下に轢かれたものであるかも知れぬ。此れも素より電車の場合と同樣で罪は多く轢かれる側にあるので、これほどの事は、新思想なり新機關を輸入する場合に是非免れ難い事で、則ち已むを得ぬ事である。

人の轢かれるのは已を得ぬ事とするも、併し電車の停電は困る。間違つたイブセンが紹介されては困る。なほ又乗客が舊式で折角の此機關の利益を減殺して他の乘客に迷惑を懸けては猶更ら困る。世間がこれを了解する事の出來ぬために、其の舊式の思想を以て、此の新思想を打ち壞しては甚だ困る。余一個の考を以て言へば、東京には電車を布設する前に是非一つやらなければならぬ事があつたと信ずる。それは道路である。電車の疾走する前に人間の歩行する道がなければならぬ。此の大都府には雨が降ると道路はなくなるのである則ち此の泥濘を何とか取り除ける必要があつたのである。併しすでに此電車が布設せられ而も非常な發展をなした事であれば、今は只これを充分に活用しその圓滿な發達を遂げしめねばなるまい。同樣にイブセンに就ても余は其前に大に爲すべき事があつたと信ずる。其道を備へる必要があつたと思ふ。則ちイブセンに來るまでの歐洲思想の順序を追つて、これを公衆なり文壇なりに示して其道行を了解さすべきではなかつたらうか、たとへば佛蘭西に就て言ふも、そのゴンクールの小説でもゾラのでもマウパッサンのでも――飜譯に都合のよい短篇は別として――殆んど其作者を代表し得るものは一つだに飜譯されて居ない。露西亞に就て言へば、ツルゲニエフでもトルストイでもあれ程

喋々持て囃されて居ながら、確としたものは矢張譯されては居らぬ。こんな風に上滑りをして行つたのではイブセンを言つても世間には分るまい。分からないのが當り前である。併しそれも仕方がない、今はイブセンが紹介されたのであるから――實は疾くから一部の人には讀まれて居たのではあるが――最早後ろを向く事は出來ぬ。事こゝに及んでは已を得ぬ、技師たるもの大に奮勵して、良くこれを研究し了解し、イブセンの停電、線路外への奔逸等のない事を望むのみである。

さて凡そ現代に於て此れ等の新らしい思想傾向を紹介し鼓吹して居るものは青年である。廣い意味の青年である。余は深く其活氣ある盡力に敬服する。然るに青年諸氏の先進者老輩には所謂解らずやが澤山に居る。かれ等には煩悶といふ事が分からなかつた。青年の心が了解されなかつた。そして青年の意氣が銷沈して居ると言つた。馬鹿な話て、彼等は自分等の意氣が銷沈して居る事とは氣が付かなかつたのである。恐らく今でも氣が付かぬのであらう。此れは已を得ない事て、此の急轉直下の吾が社會には、こんな老輩先進者は伍して行く事が出來ないのである。かれ等は古い小學讀本にあつた鶩の玉子を孵へした牝雞のやうなものである。車に乘つて居て電車の疾走するのを呼びとめ、それに轢かれたものを見て、電車の害を叫んで居る類である。併し先進老輩を追窮する必要はない。かれ等はすでに打ち破られて青年は凱歌を奏して居るのであるから、今改めてかれ等の事を兎や角言ふ必要はあるまい。

それで此青年を指導し統率すべき先輩老輩がこんな風である事は、一面甚だ悲むべき事であるが、青年に取つては頗る愉快な極めて面白い時代である。これが外國であつて見ると逆かさまである、たとへば固牢な英國の如き國に於て早くイブセンを紹介したものは誰れてあるか。評壇の老將ゴッス氏てはなかつたか、其飜譯者はアーチャー氏てはないか。何れも年寄株て、則ちその年寄株が新思想の鍵を持つて居るのてある。

然るに吾れに於ては無名の青年が多く此の新思想家を味つてこれを紹介して居る。余も亦青年の一人であれば此の特權を偉大なる賜として、時代に感謝するものである。

併しながら此新思想を動かすには、充分の用意と充分の熟慮熟練とを要する。これが只半分の了解に終つては先進老輩に對しても恥かしい事である。これをして只突飛な新奇に走る一時の出來事に終らしめては、一種の虛榮に終らしめては、只老輩に對して恥かしいのみではすまない。吾が思想界のために甚だ悲しむべき事となるのである。願くはこれを完全に了解し紹介し且つ消化したいものである。

イブセンの名をかりて、これを電車に比し、餘計な事を論じたのは、此詩人の崇拜者に對して甚だ失禮な事であつたかも知れぬが、惡意からでない故許して貰はなければならぬ。

文壇小言

小蚊子

▲武山青果氏は「彗星」と題する小説を「讀賣」に連載する約束で、全體百五十回ばかりのゝを、已に十回丈けを詛してある相だ。天外の「コブシ」の完結次第、同紙上にあらはるゝ筈だ。

▲高濱虛子氏は此頃メツキリ腕を上げた。「俳諧一口噺」あたりから油が乘て來たと見えて趣味饒かなる作物を續々出す。「國民」に連載して居る「塔」はどれを見ても可なりに面白い。中には非常に面白いのがある。先月の「ホトトギス」に出た「風流繊法」などは最も面白く讀まれた。

▲坂本四方太氏が「家庭文藝」に載せた小說「朝顏」は氏の腕にしては餘り感服出來なかつた。これ一回で彼是れ批評する譯にはゆかぬが、氏は矢張り寫生文の方がよいと思ふ。

▲ホトトギス派の人が寫生文から一轉して小說を書き出して來た。頗る面白い。ホトトギス派の趣味は瀟洒にして淸新である。此趣味を普及する爲めに俳句から寫生文に轉じ、寫生文から小說に轉じて來た。何卒大に奮勵して文壇の淸凉劑となつて欲しい。

▲薮野椋十の名を以て「東京朝日」に連載されて居る「東京見物」はなかなかの才筆である。中には餘りわざとらしい、アーチフイシアルな所もあるが全體に於ては容易に模すべからざる妙所、佳所が少くない。東京見物の參考となるべき便利あるべきのみならず、又文壇の珍とするに足るだらう「文章世界」其他の雜誌などには夏目漱石氏の筆だと傳へたものがあるが、あれは澁川玄耳といふ人の書いて居る者ださうだ。不折の挿畫を入れて近々金尾文淵堂から一冊の本として出版されるといふ話だ。



我輩も猫である

はくや

地に働けば汗が出る、水に掉させば流される、ムニャ〳〵。

梯子段を上ること一段にして、上るに易い段と知つた、二段にして明暗は表裏の如く、手の屆く處へは屹度上れると悟つた、三段目の唯今は斯う思ふて居る。――我輩の力で上つたものが、我輩の力で下りられんとは理屈に合はぬ話である‥‥

然し理屈に合はぬ事は、世の中には幾多(いくら)もあるのだから敢て不思議がるにも當らぬけれど、仕かけた仕事のまとまりがつかぬやうで、何となく極りが惡い、

尤も我輩の主人は、如何なる事を仕出しても、終ぞまとまりのついた事のない人である、近い例を申さうなら、古新聞古雜誌を整理すると云つて、棚や押入にウヂャと積み重ねた奴をばら〳〵と引ずり出す、始めの内は賴もしい程の元氣で、一月分は向ふの隅、二月分は後の方、文學雜誌は右の事、醫學雜誌は左の事、新小說は文學書、中央公論も同斷なり、醫事新聞は左なり、萬朝報は後なり、萬朝や萬朝や、萬朝や讀賣――と、魚屋の叔父さんが鰯をよむやうな鹽梅に、奇妙な節(ふし)でやつて居るが、右へ左へ投り散らして、終ひには坐敷中一面に散らかつて、始末するのだか搔き廻すのだか解らない、首尾能く散らし切れた時分になると、そろ〳〵先生欠伸になつて、いよう――蟻のへえずる處もねえ――と魚屋を廢めて假聲屋になる、能く散らかつたなと、散らかした事は忘れて散らかつた事ばかり感服して居る、先づ一服だと惡く落付いて、何か一冊ばらりと開ける、何時しかこの屑紙籠のやうな坐敷

に居る事は忘れて夢中になつて讀み出して了ふ、終ひには其本丈け一冊持つて、オイ後は奈何かして呉れと、ツイと二階へ上つて了ふ、屑掃きのやうな後始末を承はるものは妻君と舍弟君だ、奈何整理するのて御坐います？と妻君が聞くと、奈何ても可いから押し込んで置いて呉れ……て、押入は舊態を維持して永に散らばつて居る、

一以て十を知るに困難てない、思ふに主人は創立の才はあつても完成する技倆は無いらしい、

いや如何に主人に完成の技倆が無いからと云ふて我輩までそれを眞似るには及ばない、眞似らるゝ主人に痛痒はないが、眞似る我輩は梯子段の三段目て往生しなければならぬ、甚だ心細い、

若沙彌君とこの先輩は、散らかした仕事を始末する爲めに、水の中へころがり込んて死んてのけた、死んて了へば、それまてゞある、市が榮えて了ふのだ、一死萬罪を償ふとは、昔からの習慣だ、罪あるものでも死んて了へば帳けしになる死んや罪も科もない、我が先輩に於ておやだ、

先輩が死んて始末をつけたとなると、我輩も此處て首ても縊らねばなるまい、死んて了ふのはお安い御用だが、實は未だ死にたくない、死は最後の手段てある、輕々しくやッつけるべき性質のものてない、主人の如く後始末のつかぬのにも困る、けれども亦先輩の如く、死んてのけるにも及ぶまい、

尤も先輩は果して後始末の爲めに死んだのか奈何それは知らぬ、唯其死の一足飛びなる事からして、然うてはあるまいかと我輩が想像を逞ふしたに過ぎぬ、若し云ひたい事、書きたい事が未だ澤山胸中にありながら、過つて非業の最後を終げたのだとすると、先輩の死や又憐むべのき者てある、どつちにしても死者に口なしで信僞を辯ずる事は出來ぬ、

先輩は先輩、我輩は我輩てある、今死なずして梯子段の方をつけるには、眼を瞑つて三段一度に飛び下りるの一途あるのみだ、それはけんのんて到底もやれぬ、百方計盡きた時、思はずニャーと聲が出た、宗教家は

之れを以て、神に求むるの聲だと云はう、或は然うかも知らん、或は然うてないかも知らん、我輩には解らない、

然しこの無意識に出たニャーに依つて、我輩は一とつ智慧が出た、何んでも動物は困りさへすれば智慧が出るものと見える、困ると云ふ事を知らなかつた昔の大名が、馬鹿樣であつたのは不思議はない、

扨てどんな智慧が出たかと云ふと、我輩が此處でニャー〳〵やれば、乾度誰が來て下して呉れると云ふ事を發見したのだ、こんな手輕な方法があるのに、死ぬの生きるのと苦心したなどは、我ながら少々滑稽だつた、

が自分で上つた癖に、人間の厄介になつて下りるとなると、第一我輩の氣量を下げる事だし、第二には其結果は、矢張主人の新聞整理と同等になつて了ふので、それては今迄の苦心も名論も滅茶々々になると思つたが、村芝居ぢやあるまいし、何時まで三段目でまごつくにも當るまい、實は甚だ寒くつて堪らない、名論なんぞは又述べる機會もあらう、下手に負惜みをして、風邪でも引いては引き合はぬと思つたから、無暗にニャー〳〵と泣いて見た、

然し困つた事には、いくら泣いても更に反應がない、誰も來て呉れさうな樣子が見えぬ、折角智惠が出たと喜んだのも、何の功が無いとなると、智惠なんぞは出ても出ないでも同じ事になる、それではなまじ苦んで智惠なんぞ出さぬ方が面倒でなくつて可い、始めから智惠が出なければ、仕方がないて斷念て了ふ、一段智惠が出て見ると、此處に失望と云ふ事が起る、得ることがなければ失ふこともないのであるから、寧ろ昔の馬鹿樣が羨しくなつた、

然し何時迄そんな事を思つて居た處で、三段目に居るものが自然に二段目に下れるものでもない、我輩の喉の氣笛か壞れるまで泣いて見やうと決心して、根限りニャー〳〵やつた、

すると妻君が奈何したと云つた、奈何したか來て見れば解る、假令來て見ないても大方想像が着きさうなものだ、

然かも我輩は博言博士てはない、唯猫屬固有の言語を語るのみだ、妻君と雖どもその位の事は心得て居るべき筈だ、然るを擅まゝに人間の言葉て、奈何したと聞いて然かも奈何したの返事を人間の言葉て促さんとするが如きに至つては、其無法や蓋し學ぶ可らざるものと云つて可い、

けれども何と理屈を云つて見た處、つまり御手を拜借しなければならぬ境遇に立ち至つたのであるから、おとなしく又ニャーと云つた、すると今度は早くおいてと云つた、早く行ける位なら何時迄こんな處てまごついては居ない。

斯う物が解らないては仕方がない、その癖ナショナルリーダーの五位は讀めるのだが、困つたものだ、思ふに學校の教育の仕方が惡いのだ、コンモンセンスに富む人物を作らうとはしないて、學者ても作る積りて教育するものと見える、お氣の毒だが高等女學校位て三年や四年、いくら大車輪て教育した處、そうぞろ〳〵學者が出來て堪る筈のものてはない、コンセンモンス養成所てある事を忘却して、學者孵卵器と心得えて居られては閉口する、

相手が解らず屋なら、我輩も又覺悟がある、と何を云つても頓着なしに、唯ニャー〳〵一點張てやつた、有繫の妻君も手に餘したと見えて、困つた猫だねえと云ひ乍ら、我輩の襟首を握んて、ぶらりと下げて、火鉢の猫臺の上へ安置して呉れた、此時我輩は、成功の秘訣は押を強くするにあると悟つた、鐵面は成功の一法てあると又思つた、

其後數日は無事だつた、毎日の練習に依つて梯子段は最う安々と昇降する事が出來る、

或日曜の事てあつた、二階へ上つて日向りの好い椽側てうたゝ寢をして居ると、書齋に居た主人がツイと下へ行つたと思ふと、間もなく又上つて來て、我輩の後の方て、何かコト〳〵云はせて居る、何を始めたかと思つたが、起き上つて見る程の事もなからうと、矢張うと〳〵として居ると、ゴソ〳〵紙を開けるやうな音がする、扨ては先生も何時の間にか、アンドレア、

デルサルトに取りつかれたかなと思つて居ると、ジヤアと水をこぼした、愈々アンドレア、デルサルトに相違ない、雨漏りのシミでも見て不量見を起したものと見える、飛んだ處に寢て居たものだと思つたが、今更奈何も致し方がない、且つ何一とつ仕る事もなくて、三度の飯を食はして貰らつて居るのだから、この位の税金は仕方がないと觀念して、ぢつとモデルになつて居てやると、何時まで經つても止めさうもない、自分はモデルになつて居るゝと思ふと、同じ寢て居るのでも樂寢とは少し違ふ、何となく窮屈で然う際限もなく長い間動かずに居るわけには往かぬ、最う相應の税金は拂つた筈だと思つたから、失敬してウンと欠伸をした、然し馬鹿猫郎とも何んとも云はぬ、それでは筋が違ひさうだと振り向いて見ると、主人は夢中で顯微鏡を窺いて居る、何んの事だ、飛んだ勘違ひをして窮屈な思ひをした、

餘り馬鹿々々しかつたから、袂へぢやれ着いて邪魔をしてやらうかと思つたが、勘違ひをしたのは我輩が惡いので敢て主人に罪があるわけではないから、犬の糞の敵打ちをするてもあるまいと、顔を洗つて見て居ると、矢張癌細胞があると獨言を云つて居る、向ふのシヤーレーの中には、腐肉のやうなものがチヨツピリと入れてある、喰つて見やうかと思つたが氣味が惡いから止めた、

新刊批評

▲英文學史

淺野和三郎著　大日本圖書株式會社發行

藤岡博士の「國文學全史、平安朝篇」と相並びて文學史中の双璧也。著者八年間の苦心經營決して徒勞たらざりしといふべし。行文流麗明快にして一度び讀み初むれば容易に卷を措く能はざらしむる著者の筆力先づ多とすべく、古代に疎にして近代に詳らかなる敍述の體裁、繁簡其宜きを得たりといふべく、作者の代表的作物を捉へて一々梗概と評論とを揭げ、鼇頭に一々原名を記し。卷尾に索引を附したる用意の周到頗る便とすべく、附するに米國文學史及び英詩の種類及韻律法を以てしたる、是れ亦讀者にとつて甚だ有用なる材たりといふべし。全篇千頁以上の大冊、拾はゞ瑕疵もあるべく、探らば缺點もなきにあらじ。予の瞥過の際殊に可笑しと感じたるはポーの「黄金の玉蟲(カメムシ)」を「黄金の蚤」とせることに

て、著者が此篇を推奬して恰かも熟讀したるやうに書けるにて一層滑稽の惑なき能はず。蓋し一語と一語を誤て、かく書けるものならん。されどかゝるものは所謂白璧の微瑕にて此篇の價値を甚しく傷くるものにはあらじ。若し文學史とは只忠實に記述紹介すべきものとせば、此篇の論斷の如き、人によつて必ずしも與し難きものなきにあらねど、著者一己の英文學に對する批評を見んと欲する者には極めて興味ある出來榮といはざるべからず。我等は滿腔の同情を著者の苦心に注ぎ、熱心なる讃辭を此書の出來榮に呈し、以て江湖の讀を推奬するもの也。（定價一圓五十錢）

▲千代紙　鈴木三重吉著　俳書堂發行

鈴木三重吉氏の短篇集也、文章としては明治年間未曾有のものにして最も永く後代に殘るものゝ一也。次號に精評すべし。（定價七十五錢）

▲文藝講話　上田敏著　金尾文淵堂發行

上田敏氏は文藝宗を奉ずること十年一日の如く、其文壇の諸方面に於ける活動、何れも多少の注目に値せざるものなきも、予は寧ろ海外新文藝の紹介者としての氏に最も重きを置かんと欲する者也。常に時流に先んじて海外の新流行を覺知し、熱心に之を紹介鼓舞すること、恐らくは氏の右に出づるものあらじ。此篇は最もよく氏の此得意の方面を發揮せるものにして、「劇詩フランチエスカ」に於てダンヌンチオを。「海の夫人」に於てイプセンを。レオナルド、ダ、ヴインチに於てメレズコウスキーを。其他「マーテルリンク」及び「近世の英文學」「佛蘭西近代の詩歌」等を批評紹介せり。又音樂論あり、劇場談あり、戰後の思想問題あり、氏の趣味の極めて廣きことを窺ふに足ると雖も予は寧ろ前に擧げたる、文學の批評紹介を以て最も見るべきものと信ず。竹柏園に於ける講話、又は雜誌等にあらはれたるものなるも、かく一册の書として机上に備ふれば、頗る海外文藝の研究に便利也。泰西の新思潮に觸れんとする人の一覽を望む。（定價金壹圓）

▲榮華物語詳解（首卷三册）　和田、佐藤兩氏合著　明治書院發行

和田英松、佐藤球兩氏が十年の苦心を以て榮華物語の詳解を企て、明治三十二年第一卷を發行してより卷を重ぬると十四、今回の首卷三册合せて全部十七册を發行して漸くに完結せり。吾人不先づ第一に此熱心なる學者的態度を感歎せざる能はず。吾人不幸にして本文十四册を通讀したることなく、其出來榮の如何は之を批評するに由なきも、今此首卷に收めたる、解題、考證、年表、系圖人名索引等の叮嚀懇切なるを見れば其本文も亦決して杜選ある註釋本と其選を異にすべきを察するに餘りあり。他日本文を一讀するの機會あれば詳しく之を批評することあるべしと思ふ。（定價壹圓五十錢）

▲教理と實踐　文學博士　村上專精著　文明堂藏版

村上專精博士が某所に於て七日間に講述したるものにして佛教を教理と實踐の兩方面より殊に其實際的方面に重きを置きて說明したるもの也。講演の筆記なれば文字の遣ひ方の妥ならざるもの、口調のあしき

處などなきにあらねど、概して明瞭にして素人にもわかり易き本也。(定價四十五錢)

▲心の影　柳川春葉著　今古堂發行

須磨子といふ薄命なる一女性を主人公として描きたるもの也。行文流麗にして結構亦巧妙に、家庭の讀物として絶好のもの也。每日電報にて好評ありし宜也といふべし。(定價七十錢)

▲實驗的基督教　ホール博士著　警醒社書店

印度及び錫崙の諸市邑と我日本の都市に於てホール博士のなしたる講演六回を日野眞澄なる人の和譯したるもの也。ホール博士は其思想稍ゝ純粹の基督教信者と異るもの丶如く其說く所亦著しく東洋人の意を迎へたるらしき所なきにあらねど、又確かに其說に聞くべきものあるが如し、他日精覽の上精評することあるべし。(定價六十錢)

▲自治寮生活　鵜箭子著　本郷書院發行

「中學世界」に連載せられて、可なりの評判があつたもので、第一高等學校の寄宿舍自治寮の生活を面白く書いたものである。附錄には高等學校一覽がある。高等學校を出た人、今在る人、後に來る人には興味あるものであらう。(定價三十錢)

▲教育童話子供の樂園　東基吉著　同文館發行

こは、近々二百四十六頁の小冊子に過ぎずと雖も、訂裝も美はしく、內容も亦面白き節多し。卷頭「雪姫」「白鳥の王子」より、卷尾の「鳥と獸と蝙蝠」まで、三十三篇の童話を含む。文章も平易のうちに趣味を寓す。子供の讀物としては先づ成功せるものといふ可し。(定價六十錢)

▲凪子　細越夏村著　益世堂發行

戀はくせもの人の子の血を一度沸かしめずんば止まざるに、更に偏占的性質より、意中の人を必ず手中の人となさんとはす。幾多の煩悶、幾多の悲痛皆之より生ず、而かも其處に犧牲の念の乏からんか煩悶悲痛は唯の煩悶悲痛に止まらず、更に恐るべき幾多の罪惡は生じ幾多の慘劇は演ぜられん、此篇は若き四人の男女が、孰れも孰れ、悉く純潔玉の如き性格を有し、能く如上の場合に處して、自己の堪えやらぬ苦悶を耐え、互に獻身的に他の幸福を圖らんとす、而かも意地惡き運命の手は之をも許さず、幸福は何人の頭上にも下らで、遂に皆から孤獨生活に入らんとするを寫す、多恨の文字の底に神々しき犧牲の精神を皷吹せるもの、家庭の讀物としては可ならんか、筆路は中頃より生彩を覺えたれども初は稍板頂に失する點あるを憾む。(定價金六十五錢)

新刊批評の續きは頁數増加したるため止むを得ず組置となしたり次號には必ず掲載すべし